

福井県埋蔵文化財調査報告 第138集

曾根田遺跡

— 地方道路交付金事業(道路改良)に伴う調査 —

2013

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

本書は、地方道路交付金事業（道路改良）〔舞鶴若狭自動車道 上中ＩＣ建設に伴う主要地方道上中田鳥線へのアクセス道路新設工事〕に伴い、三方上中郡若狭町上黒田において、平成19年度から平成21年度にかけて発掘調査を実施した曾根田遺跡の発掘調査の成果をとりまとめたものです。

曾根田遺跡は、鳥羽川の支流である黒田川によって開析された谷の開口部に立地する集落遺跡です。今回の調査では、掘立柱建物5棟を検出したほか、かつての黒田川とみられる河道からまとまった量の弥生土器や木製品が出土しました。舞鶴若狭自動車道建設に伴う発掘調査の成果も踏まえると、旧黒田川の両岸に弥生時代以降の集落が断続的に展開していたと考えられます。また、谷の南側山麓部には古墳時代後期の下山古墳群が築かれていることから、この古墳群に関連する集落であった可能性も想定されます。

本書が今後地域の歴史研究に寄与するとともに、各方面で多くの方々に活用される一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様々から多大なご支援とご協力を賜りましたことに、厚くお礼申し上げます。

平成25年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所長 佐藤圭

例　　言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが主要地方道上中田烏線道路改良工事に伴い、平成19～21年度に実施した曾根田遺跡（福井県三方上中郡若狭町上黒田所在）の発掘調査報告書である。
- 2 曾根田遺跡の調査は、小浜土木事務所の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、平成19年度は坪田聰子と森下智恵、平成20年度は田中祐二、平成21年度は田中と池原悠貴、土谷崇夫が担当した。
- 3 発掘調査は、平成19年度が平成19(2007)年9月3日から12月28日、平成20年度が平成20(2008)年11月4日から12月26日、平成21年度が平成21(2009)年7月1日から8月31日に実施した。出土遺物の整理作業は、平成20(2008)年4月1日から平成25(2013)年3月22日に、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集は田中、坪田があたり、赤澤徳明、田中、坪田が分担して執筆した。執筆分担は以下の通りである。
坪田聰子 第1章、第2章、第3章（遺構、木製品）
田中祐二 第3章（遺構、縄文土器、石器）、第4章（遺構、縄文土器）
赤澤徳明 第3章（弥生土器、古墳時代以降の土器）、第4章（弥生土器、製塩土器）
- 5 曾根田遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 6 検出遺構の図化・図版作成は田中、坪田が行った。土器の図化・図版作成は赤澤、田中、坪田が、木製品の図化・図版作成は坪田が、石器の図化・図版作成は田中と古山明日香が行った。また、検出遺構の写真撮影は田中、坪田が、出土遺物の写真撮影は青木隆佳、清水孝之、月輪泰、坪田が行った。
- 7 本書に掲載した地形図および遺構図は、株式会社国際航業（平成19・21年度）と株式会社国土開発センター（平成20年度）に委託して作成したものを作成して使用した。上空からの写真は、航空測量時に上記の委託業者が撮影したものである。
- 8 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符号する。写真的縮尺は不同である。
- 9 本書における水平レベルの表示は海拔高（m）を示す。方位は真北と座標北を併用し、前者に限り「T.N.」と表記した。なお、X・Y座標値は国土平面直角座標第VI系（日本測地系）に基づく。
- 10 第1表は福井県遺跡地図遺跡地名表をもとに作成したが、種別・時代については最新の調査成果に合わせて変更した箇所がある。
- 11 土層や土器の色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を基準とする。
- 12 石器実測図において、実線で示した範囲は製作・使用に伴う敲打痕・つぶれを、破線および網掛けで示した範囲は使用に伴う磨耗・磨痕・研磨痕を示す。また、木製品実測図の網掛けは炭化を示す。
- 13 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 14 発掘調査には、地元の方々の参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

目次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 遺構と遺物	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 遺構と遺構出土遺物	10
第3節 遺構外出土遺物	42
第4章 まとめ	49

写真図版目次

図版第1 遺跡	(1) 調査地全景	図版第7 遺構	(1) C12グリッド河川1 木製品出土状況
	(2) 平成19年度調査区全景		(2) C11グリッド河川1 木製品出土状況
図版第2 遺跡	(1) 平成19年度調査区 町道東側全景		(3) 河川2
	(2) 平成20年度調査区全景	図版第8 遺物	溝および河川1出土土器
図版第3 遺跡	(1) 平成21年度調査区全景	図版第9 遺物	河川1出土土器
	(2) 平成21年度調査区全景	図版第10 遺物	河川1出土土器
図版第4 遺構	(1) SB01	図版第11 遺物	河川1出土土器
	(2) SB02		
図版第5 遺構	(1) SB03	図版第12 遺物	河川1出土土器
	(2) SB04	図版第13 遺物	河川1出土土器
図版第6 遺構	(1) SB05[SP330]柱根・礎板 出土状況	図版第14 遺物	河川1・河川2および 遺構外出土土器
	(2) SB05[SP331]柱根出土状況	図版第15 遺物	木製品
	(3) SP80柱根出土状況	図版第16 遺物	木製品・石器・ガラス小玉
	(3) SP81柱根出土状況		
	(5) C9グリッド河川1 木製品出土状況		

挿 図 目 次

第1図	調査区位置図	2	第21図	溝・自然流路出土遺物実測図	25
第2図	遺跡位置図	3	第22図	河川1土層断面図	26
第3図	周辺の遺跡分布図	6	第23図	河川1木製品出土状況図1	27
第4図	土層概略図	9	第24図	河川1木製品出土状況図2	28
第5図	遺構配置図	11	第25図	河川2土層断面図	28
第6図	SB01実測図	13	第26図	河川1出土土器実測図1	29
第7図	SB01柱根実測図	13	第27図	河川1出土土器実測図2	30
第8図	SB02実測図	14	第28図	河川1出土土器実測図3	31
第9図	SB02柱根実測図	15	第29図	河川1出土土器実測図4	32
第10図	SB03実測図	15	第30図	河川1出土土器実測図5	33
第11図	SB03出土遺物実測図	15	第31図	河川1出土土器実測図6	34
第12図	SB04実測図	16	第32図	河川1出土土器実測図7	35
第13図	SB05実測図	17	第33図	河川1出土土器実測図8	36
第14図	SB05柱根・礎板実測図	17	第34図	河川1出土土器実測図9	37
第15図	柱穴列1実測図	18	第35図	河川1・2出土土器実測図	39
第16図	土坑実測図	19	第36図	河川1・2出土製塙土器実測図	39
第17図	柱穴実測図	21	第37図	河川1出土石器実測図	40
第18図	柱穴出土遺物実測図	21	第38図	河川1出土木製品実測図	41
第19図	溝・自然流路土層断面図1	23	第39図	遺構外出土遺物実測図	42
第20図	溝・自然流路土層断面図2	25			

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	7
第2表	土器観察表	43
第3表	石器観察表	48
第4表	木製品観察表	48
第5表	ガラス小玉観察表	48

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

曾根田遺跡は、鳥羽川右岸に形成された狭隘な谷部の開口部付近に立地する（第1図）。谷のやや北寄りには黒田川が流れしており、その北方には丘陵裾に沿うように上黒田集落が形成されている。調査地は水田および農道や町道として利用されていた。

舞鶴若狭自動車道⁽¹⁾は、舞鶴東インターチェンジから北陸自動車道敦賀インターチェンジまでを結ぶ自動車専用道路として平成元(1989)年に基本計画が決定された。三方上中郡若狭町上黒田地籍では、この舞鶴若狭自動車道の本線および上中インターチェンジの建設と、自動車道と主要地方道上中田鳥線を繋ぐアクセス道路の新設工事が計画され、事業予定地内にある黒田寺跡、下山古墳群、曾根田遺跡の試掘調査ならびに発掘調査が順次行われた。

地方道路交付金事業（道路改良）に伴う曾根田遺跡の試掘調査は、平成19(2007)年2月5・6日に福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下埋文センター）が実施した。20m間隔で設定した試掘坑を重機で掘削した結果、東端の試掘坑以外で土坑などの遺構や弥生土器が出土する遺物包含層を検出し、遺跡が事業予定地内に広がっていることが判明した。以上により、試掘対象地の東端を除く事業予定地3,000m²については本格調査が必要と判断され、埋文センターと福井県嶺南振興局小浜土木事務所による協議の結果、平成19年9月から地方道路交付金事業に伴う曾根田遺跡の発掘調査に着手することで合意した。その後、平成20(2008)年6月には、施工方法が沈下盛土に変更された箇所が生じたことから再び協議が行われた。沈下盛土の対象地のうち、町道1号線の東側に接し、平成19年度調査区を挟んで南北に分かれる地区については、隣接地の状況から遺跡の遺存が明白な南側部分は本調査とし、北側部分は平成20年8月5日に試掘調査を行った。試掘調査の結果、北側部分においても河道の広がりや弥生土器を確認したことから、本調査が行われることとなった。また沈下盛土の対象地のうち、町道と農道および農道北側の地区については、平成20年9月4～10日と12月18日に試掘調査を行った結果、柱穴や土師器を含む遺物包含層を検出し、当該範囲においても本調査が必要と判断された。

第2節 調査の経過

地方道路交付金事業（道路改良）に伴う発掘調査地点は、舞鶴若狭自動車道建設事業に伴う発掘調査地点の北側に隣接しており、平成19年9月から着手した。その後、施工方法の変更が発生したため、平成20・21年度にも発掘調査を実施した。それぞれの期間・面積は以下のとおりである。

平成19年度 調査面積 3,000m²

調査期間 平成19年9月3日～平成19年12月28日

平成20年度 調査面積 県道南側部分391m² 県道北側部分449m²

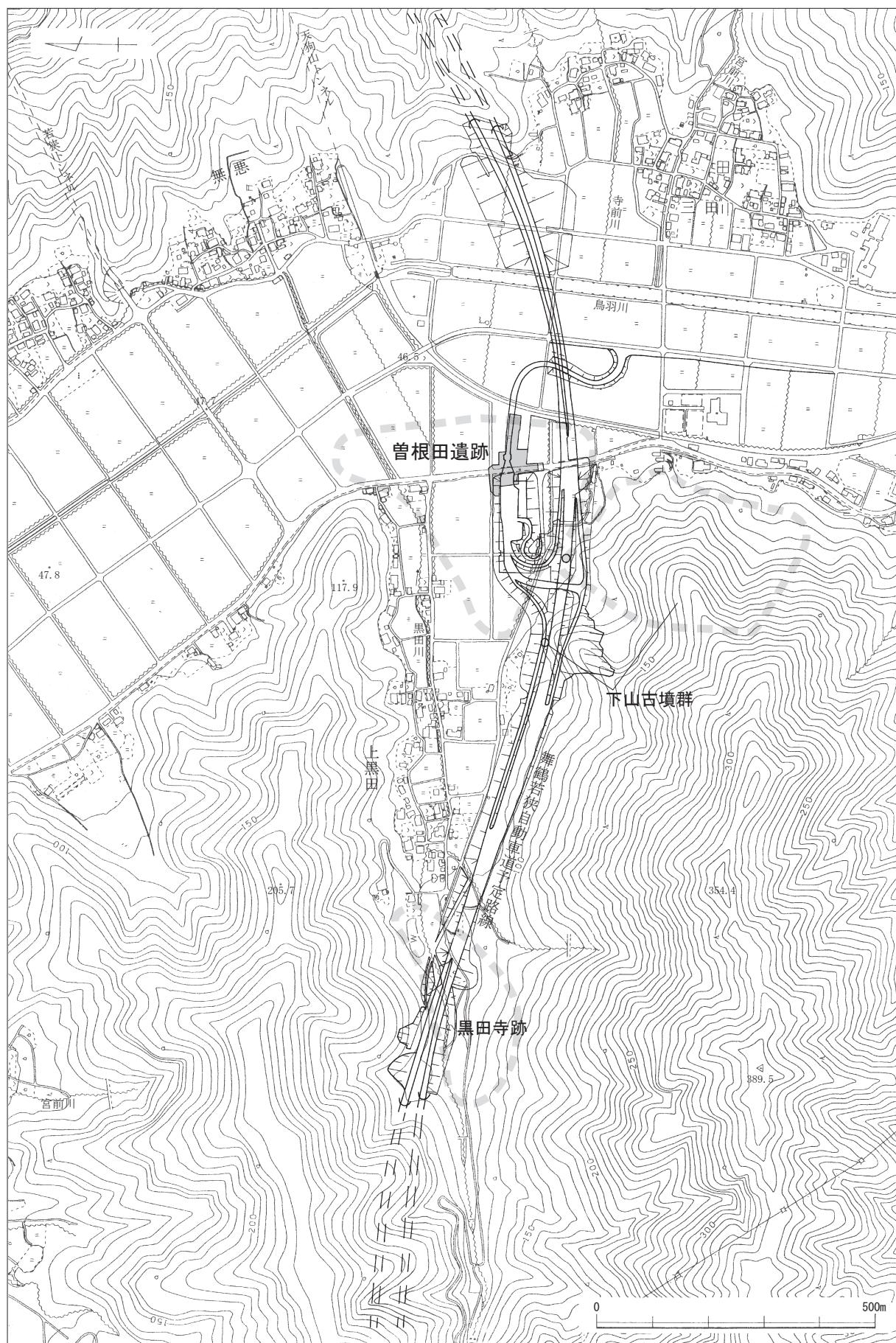
調査期間 平成20年11月4日～平成20年12月26日

平成21年度 調査面積 1,460m²

調査期間 平成21(2009)年7月1日～平成21年8月31日

註

1 舞鶴若狭自動車道については、当初「近畿自動車道敦賀線」と呼称していたが、平成15(2003)年3月9日に福井県内で一部開通した際、兵庫県の吉川ジャンクションから福井県の敦賀ジャンクションまでの道路名称が「舞鶴若狭自動車道」に改称された。



第1図 調査区位置図（縮尺1/10,000）

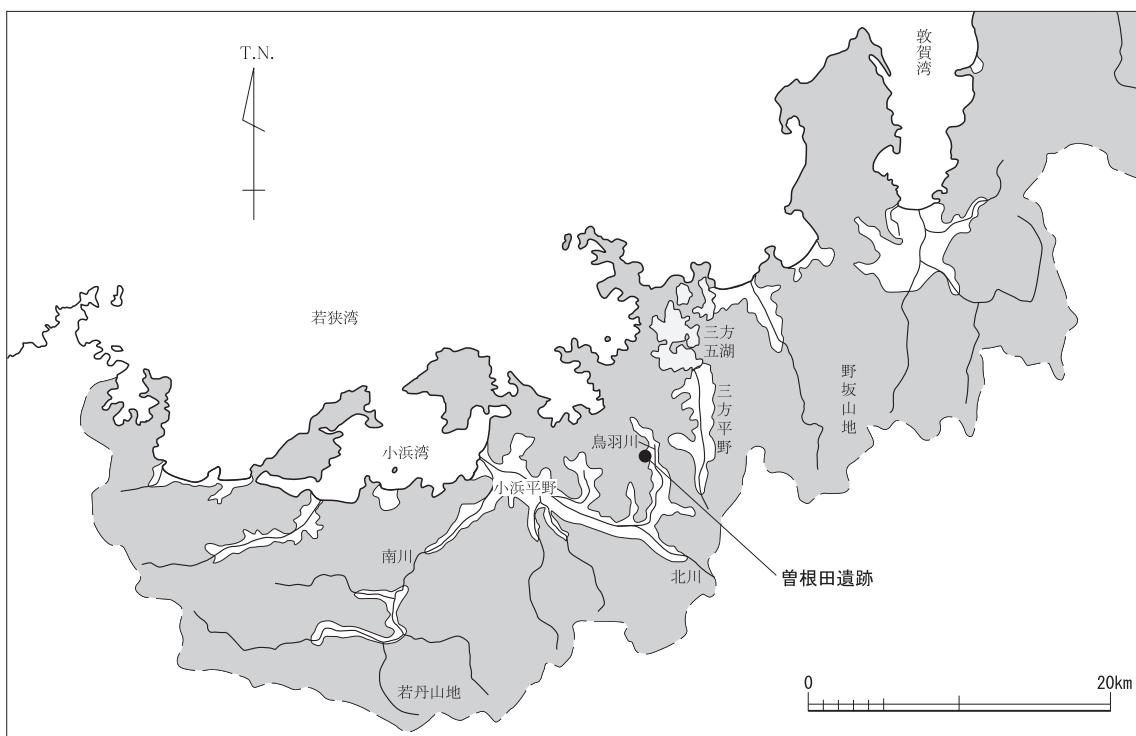
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

曾根田遺跡が所在する三方上中郡若狭町は、福井県の南西部に位置する。若狭町は、平成17(2005)年に遠敷郡上中町と三方郡三方町が合併して誕生した町であり、西は小浜市、東は三方郡美浜町、南は若丹山地を境として滋賀県高島市とそれぞれ接しており、北方は若狭湾に面している。

若狭町の地形は、野坂山地と三遠山地および小浜平野と三方平野に大別される。東部から南部にかけて連なる野坂山地は、鉢伏山、野坂岳、三十三間山などを擁し、尾根と谷の高低差が400~600mの中起伏山地を形成している。西部の三遠山地は、尾根と谷の高低差が200~400m未満の小起伏山地であるが、急峻な地形を呈する。三遠山地は沈降山地で、その谷間に水を湛えた沈水湖が三方五湖である。この三方五湖を含む三遠三角地は、東を三方平野の東縁を南北に走る三方断層帯、南を小浜平野の南縁を東西に走る熊川断層に限られた沈降地塊である。三遠三角地では、海岸線は若狭湾内でも顕著な沈降性海岸（リアス式海岸）を呈し、沈降性の谷には狭長な沖積平野である三方平野と小浜平野が展開する。三方平野と小浜平野は、三十三間山に源を発する鰐川と北川の流域にそれぞれ形成されたもので、鰐川は北流して三方湖に注ぎ、北川は北西に向かって流れて鳥羽川・南川と合流し、小浜湾に注いでいる。小浜平野は、平野の発達が乏しい若狭湾沿岸において最もよく発達した平野であり、農業生産力も比較的高く、国府が置かれるなど古来より若狭の中心的地域であった。また北川流域では、北陸道と若狭国府・丹後国府を繋ぐ丹後街道と、京に向かう若狭街道が重なっており、交通の要衝でもあった。

曾根田遺跡が所在する若狭町上黒田は、若狭町のほぼ中央に位置する鳥羽地区に属する。鳥羽地区は、南方を除く三方を丘陵に挟まれた鳥羽谷と呼ばれる細長い谷間にあり、谷のほぼ中央を北川の支流である鳥羽川が流れている。曾根田遺跡は、この鳥羽川右岸、鳥羽川の支流である黒田川によって開析された狭隘な谷部の開口部に広がる小規模な扇状地上に立地している。



第2図 遺跡位置図（縮尺 1/500,000）

第2節 歴史的環境

1 周辺の遺跡

若狭町では、鰐川・鳥羽川および北川が形成した扇状地上やその周囲の丘陵上に、多数の遺跡が確認されている（第3図、第1表）。ここでは、発掘調査された遺跡を中心に時代順に概略をまとめる。

縄文時代 鳥羽川流域では縄文時代の遺跡は少なく、昭和29（1954）年と昭和60（1985）年の調査時に十善の森古墳（108）の盛土から後期と晩期の土器が、舞鶴若狭自動車道建設および地方道路交付金事業（道路改良）に伴って平成19～21（2007～2009）年に埋文センターが行った発掘調査で曾根田遺跡（1）の河道から晩期の土器が出土した程度である。しかし、鰐川流域には、草創期から前期にかけての鳥浜貝塚（130）、中期から後期を主体とするユリ遺跡（132）や北寺遺跡（134）といった本県の縄文時代を代表するような集落遺跡が集中しており、鳥浜貝塚とユリ遺跡では合わせて11艘もの丸木舟が出土している。

弥生時代 鳥羽川流域での調査例は、曾根田遺跡（1）、三生野湯田遺跡（12）、大鳥羽遺跡（29）、向山遺跡（92）がある。曾根田遺跡では、舞鶴若狭自動車道建設事業に伴う調査で竪穴住居2棟を検出したほか、河道から弥生土器や木製品が多数出土している。三生野湯田遺跡では、昭和61（1986）年の旧上中町教育委員会による発掘調査時に弥生時代後期の土器が確認され、昭和37（1962）年の土地改良事業時に出土した木製の田舟や梯子も同時期のものと考えられている。大鳥羽遺跡では、昭和48（1973）年に有柄式石剣が偶然発見された。昭和58・59（1983・1984）年には、旧上中町教育委員会による発掘調査が行われ、溝・土坑・柱穴などの遺構と、弥生時代中期の土器や磨製石剣1振を検出した。向山遺跡では、明治33（1900）年に北川堤防改修用の土砂を採取した際に、弥生時代中期の扁平紐式六区画袈裟繆文銅鐸1点が出土した。昭和63・平成元（1988・1989）年には、若狭中核工業団地造成に伴って福井県教育委員会が発掘調査を実施し、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土坑墓や土器棺墓を検出している。

鰐川流域の調査例は、角谷遺跡（137）、仏浦遺跡（140）、田名村山遺跡（143）、江跨遺跡（145）、南前川遺跡（165）、藤井遺跡（166）、江端遺跡（182）、井崎丸山遺跡（183）がある。藤井遺跡で確認された竪穴住居とみられる方形の落ち込み1基のほかに注目される遺構はなく、土器や木製品などの遺物を確認しただけの例が多い。このうち特筆すべき遺物としては、昭和44（1969）年の土取り工事中に、仏浦遺跡で出土した弥生時代後期の突線紐式袈裟繆文銅鐸1点や、田名村山遺跡で出土した鳥形木製品2点がある。

古墳時代 鳥羽川および北川流域の平野や丘陵上には、古墳が多数存在する。鳥羽谷では谷奥から下山古墳群（2）、城山古墳（34）、大谷古墳（41）、脇袋古墳群が調査されている。下山古墳群は、平成19（2007）年に埋文センターが直径14m前後の円墳2基を発掘調査した。いずれも横穴式石室を有し、北部九州系の系譜に連なるものが6世紀中頃、畿内の影響がうかがえるものが6世紀後半から末頃に位置づけられている。城山古墳は、左岸の丘陵上に単独で存在する全長63mの前方後円墳で、平成5（1993）年に立命館大学による範囲確認調査が行われた。2段築成で、埴輪を巡らし、墳丘2段目のみ葺石を施す。5世紀前半から中葉の築造と考えられている。大谷古墳は右岸の丘陵中腹に立地する直径約28mの円墳で、畿内型横穴式石室をもつ。捩り環頭大刀や馬具などの副葬品が出土しており、6世紀中頃に位置づけられている。背後に膳部山がひかえる脇袋古墳群には、若狭地方でも有数の前方後円墳が集中している。全長74mの西塚古墳（70）、全長100mの上ノ塚古墳（71）、全長72mの中塚古墳（72）、全長50～60mの糠塚古墳（73）がそれであり、いずれも埴輪・周濠・葺石を備える。西塚古墳では、大正5（1916）年の調査で神人歌舞画像鏡や変形三獸鏡を含む多くの副葬品が出土した。北部九州系の横穴式石室を有し、築造時期は5世紀後半とされる。上ノ塚古墳では、平成4（1992）年に福井県教育委員会が範囲確認

調査を行い、三段築成であることや、周濠内に木製の立柱をもつことを明らかにした。4世紀末から5世紀前半の築造とされ、若狭地方で最初に築かれた最大の前方後円墳である。中塚古墳は、埴輪の比較から西塚古墳より後出する5世紀末頃に位置づけられている。糠塚古墳は、平成21(2009)年の若狭町教育委員会・花園大学による範囲確認調査で、5世紀末に築造された前方後円墳と判明した。

北川右岸、鳥羽川と北川の合流地点近くの丘陵上には、前方後円墳、方墳各1基と円墳7基で構成される向山古墳群(91)がある。このうち、全長48.6mの前方後円墳である1号墳と、長軸12m・短軸10.5mの方墳である3号墳は、昭和62・63(1987・1988)年に旧上中町教育委員会が発掘調査している。向山1号墳は5世紀中頃の築造で、葺石を備え、内行花文鏡・鋸歯文鏡・金製垂飾付耳飾・短甲など豊富な副葬品や東海系の埴輪が出土している。北部九州系の横穴式石室を有し、若狭地方の横穴系埋葬施設の初現と考えられている。また北川左岸、向山古墳群の西方には天徳寺古墳群に含まれる十善の森古墳(108)、丸山塚古墳(109)、上高野古墳(106)などが所在する。十善の森古墳は全長67mの前方後円墳で、3段の段築を有し、埴輪・葺石・周濠を備える。前方部と後円部にそれぞれ横穴式石室を有し、後円部の石室は北部九州型横穴式石室の特徴をもち合わせる。遺物は、中国製方格規矩神獸鏡・金銅製冠帽・装身具類・馬具類などが出土しており、6世紀前半の築造が想定されている。この十善の森古墳の北には、かつて直径50mの円墳である丸山塚古墳が存在した。横穴式石室は玄室長6m、羨道長11mをはかる県内最大規模で、画文帶神獸鏡・三葉文環頭大刀・双龍文環頭大刀・馬具・甲・水晶製三輪玉などが出土しており、6世紀中頃の築造とされる。上高野古墳も円墳で、平成3(1991)年に旧上中町教育委員会による発掘調査が行われた。3m超の巨大な天上石をもつ横穴式石室が確認され、7世紀前半に位置づけられている。

このほか、鳥羽谷の最奥付近にある三生野湯田遺跡(12)では、伽耶系と考えられる古墳時代中期の組紐文陶質土器が県内で初めて出土しており、注目される。

鰐川流域では、右岸の山麓部から丘陵上に古墳が集中している。全長35mをはかる4世紀前半の前方後方墳である松尾谷古墳(158)のほか、古墳時代前期から中期の円墳である藤井岡三昧古墳(157)・藤井岡古墳(159)、古墳時代後期の横穴式石室を有する円墳である岡の山2号墳(151)・下り山古墳(152)・道の上古墳(154)・権兵衛古墳(161)・高野谷古墳(162)、3基の円墳で構成されるきよしの古墳群(164)などがみられる。これに対して、左岸は古墳の分布が希薄である。その左岸にあって、円墳11基・方墳5基からなる田名古墳群(141)は、その下方にある田名村山遺跡(143)で古墳時代中期末から後期初頭にかけての土器や滑石製模造品が集中して出土する祭祀遺構が検出されており、関連が指摘されている。

古代 鳥羽川流域での調査は少ない。曾根田遺跡(1)では、舞鶴若狭自動車道に伴う調査で掘立柱建物や井戸を検出し、河道からは「松尾」・「黒田」と書かれた平安時代の須恵器が出土した。「黒田」は地名とみられ、注目される。このほか、三生野湯田遺跡(12)では平安時代の須恵器が出土し、有田遺跡(39)では灰釉陶器が採集されている。生産遺跡は、8世紀代に操業した杉山窯跡(81)、9~10世紀に操業したとされる末野西窯跡(43)・末野東窯跡(48)などが知られている。また、旧上中町教育委員会が昭和62・63(1987・1988)年に発掘調査した有田坂遺跡(84)では8世紀代の須恵器窯跡の灰原が検出された。

鰐川流域も調査例は少ないが、平安時代の円面硯、線刻土器、多数の墨書き土器、斎串、調塩や庸米の付札を含む木簡3点が出土した田名村山遺跡(143)や、昭和63(1988)年の旧三方町教育委員会による発掘調査で墨書き土器、斎串、天平4(732)年の日付がある租庸調の庸布の付札とみられる木簡片1点を検出した角谷遺跡(137)などが注目される。また大上郷遺跡(123)でも墨書き土器や転用硯を採集している。



第3図 周辺の遺跡分布図（縮尺 1/25,000）

第1表 周辺の遺跡一覧表（番号は第3図に対応）

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	曾根田遺跡	散布地	弥生・古墳・平安	69	脇袋遺跡	散布地	古墳	137	角谷遺跡	集落跡	弥生・奈良
2	下山古墳群	古墳	古墳・中世	70	西塚古墳	国史	古墳	138	風神遺跡	散布地	弥生
3	黒田寺跡	寺院跡	中世	71	上ノ塚古墳	国史	古墳	139	天原日城	城跡	
4	田井城	城跡	中世	72	中塚古墳	国史	古墳	140	仏浦遺跡	散布地	繩文・弥生
5	独活跡	寺院跡		73	糠塚古墳	古墳	古墳	141	田名古墳群	古墳	古墳
6	麻生野堡	城跡	安土桃山	74	勝手社古墳	古墳	古墳	142	田名城	城跡	室町
7	香川屋敷	館跡	安土桃山	75	脇袋古墳群(丸山支群)	古墳	古墳	143	田名村山遺跡	散布地	弥生・平安
8	光照寺谷遺跡	散布地	平安・中世	76	瓜生上砦	城跡	安土桃山	144	田名古谷前遺跡	散布地	弥生
9	経ヶ鼻経塚	経塚		77	上下の森古墳群	古墳	古墳	145	江跨遺跡	散布地	繩文・平安
10	海土坂古墳群	古墳	古墳	78	瓜生古墳群	古墳	古墳	146	清水本遺跡	散布地	弥生・古墳
11	古和田遺跡	散布地	古墳・奈良	79	瓜生下砦	城跡	安土桃山	147	北前川遺跡	散布地	古墳・中世
12	三生野油田遺跡	集落跡	弥生・古墳	80	岩内古墳	古墳	古墳	148	南前川豆田遺跡	散布地	弥生・中世
13	西山古墳	古墳	古墳	81	杉山窯跡	窯跡	奈良・平安	149	牛塚古墳	古墳	古墳
14	頭古墳	古墳	古墳	82	小野寺跡	寺院跡		150	勘四郎古墳	古墳	古墳
15	八幡裏古墳	古墳	古墳	83	畦田遺跡	散布地	奈良	151	岡の山古墳群	古墳	古墳
16	頭遺跡	散布地	古墳・中世	84	有田坂遺跡	散布地	奈良・平安	152	下り山古墳	古墳	古墳
17	茶の森古墳群	古墳	古墳	85	神子谷遺跡	散布地	奈良・平安	153	大納言古墳	古墳	古墳
18	光里古墳	古墳	古墳	86	坂尻古墳群	古墳	弥生・古墳	154	道の上古墳	古墳	古墳
19	堂山城	城跡	安土桃山	87	吉田堡	城跡	安土桃山	155	南前川城	城跡	中世
20	七反田遺跡	散布地	繩文・平安	88	下吉田堡	城跡	安土桃山	156	六号神社古墳群	古墳	古墳
21	甲ノ浦遺跡	散布地	中世	89	吉田の寺跡	寺院跡		157	藤井岡三味古墳	古墳	古墳
22	池田遺跡	散布地	弥生・古墳	90	向山砦	城跡	安土	158	松尾谷古墳	古墳	古墳
23	山の鼻古墳群	古墳	古墳	91	向山古墳群	古墳	古墳	159	藤井岡古墳	古墳	古墳
24	鈴ヶ嶽城	城跡	室町	92	向山遺跡	祭祀	弥生・古墳・中世	160	ツガノン古墳	古墳	古墳
25	岩神経塚	経塚		93	坂ノ尻遺跡	散布地	奈良・平安	161	権兵衛古墳	古墳	古墳
26	霧ヶ峰城	城跡	安土桃山	94	五反田遺跡	散布地	奈良・平安	162	高野谷古墳	古墳	古墳
27	霧ヶ峰城出城	城跡	安土桃山	95	中森下遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	163	相田城	城跡	中世
28	大栗遺跡	散布地	奈良・平安	96	内藤氏館	館跡	安土桃山	164	きよしの古墳群	古墳	古墳
29	大鳥羽遺跡	集落跡	弥生	97	箱ヶ岳城	城跡	安土桃山	165	南前川遺跡	散布地	弥生・古墳
30	由留木地蔵遺跡	散布地	古墳	98	堤古墳群	古墳	古墳	166	藤井遺跡	集落跡	繩文・中世
31	稻荷跡遺跡	散布地	奈良・平安	99	下茶屋遺跡	散布地	奈良・平安	167	カフヨヨノキ遺跡	散布地	古墳
32	長江堡星	城跡	安土桃山	100	加茂古墳群	古墳	古墳	168	的場の場遺跡	散布地	古墳・中世
33	長江古墳群	古墳	古墳	101	芝原古墳群	古墳	古墳	169	佐古遺跡	散布地	弥生・中世
34	城山古墳	古墳	古墳	102	堂之前古墳	古墳	古墳	170	佐古古墳群	古墳	古墳
35	皆脇遺跡	散布地	古墳・中世	103	井ノ口古墳群	古墳	古墳	171	大倉見城	城跡	室町
36	持田城	城跡	安土桃山	104	堂角古墳群	古墳	古墳	172	西の坪遺跡	散布地	弥生・古墳
37	有田古墳	古墳	古墳	105	野山の寺跡	寺院跡		173	西の坪古墳群	古墳	古墳
38	新田氏館	館跡	中世	106	上高野古墳	古墳	古墳	174	井崎砦	城跡	室町
39	有田遺跡	集落跡	古墳・平安	107	森下遺跡	散布地	古墳・平安	175	八反田遺跡	散布地	繩文・古墳・中世
40	山内丸山古墳	古墳	古墳	108	十善の森古墳	県史	古墳		(黒田埋没林群集地)		
41	大谷古墳群	古墳	古墳後期	109	丸山塚古墳	古墳	古墳	176	黒田愛宕山砦	城跡	室町
42	山内城	城跡	安土桃山	110	上富遺跡	散布地	古墳・中世	177	田上城	城跡	室町
43	末野西窯跡群	窯跡	奈良・平安	111	天德寺古墳群	古墳	古墳	178	田上遺跡	散布地	弥生・平安
44	末野古墳	古墳	古墳	112	桂森古墳群	古墳	古墳	179	下の坪遺跡	散布地	奈良・平安
45	殿畠遺跡	散布地	奈良・平安	113	下田遺跡	散布地	古墳	180	岩屋遺跡	散布地	平安・中世
46	宮ノ前遺跡	散布地	奈良・平安	114	食見遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	181	向黒遺跡	散布地	奈良・平安
47	寺山遺跡	散布地	奈良・平安	115	紙屋古墳	古墳	古墳	182	江端遺跡	散布地	弥生
48	末野東窯跡群	窯跡	奈良・平安	116	若松さん古墳	古墳	古墳	183	井崎丸山遺跡	散布地	古墳・中世
49	末野遺跡	散布地	奈良・中世	117	上山田古墳	古墳	古墳	184	年清水遺跡	散布地	奈良・平安
50	中田遺跡	散布地	奈良・中世	118	八通遺跡	散布地	平安	185	双子山古墳群	古墳	古墳
51	宮ノ下遺跡	散布地	奈良・平安	119	六通北遺跡	散布地	奈良・平安	186	ダイショウウカウサン古墳	古墳	古墳
52	的場遺跡	散布地	古墳	120	二通遺跡	散布地	古墳・平安	187	千木本遺跡	散布地	弥生・中世
53	神田遺跡	散布地	奈良・平安	121	田井野貝塚	貝塚	繩文・平安	188	植木遺跡	散布地	古墳・中世
54	角田遺跡	散布地	奈良・平安	122	堂谷山城	城跡	室町・近世	189	岩屋城	城跡	室町
55	福成寺跡	寺院跡		123	大上郷遺跡	散布地	弥生・平安	190	畠上遺跡	散布地	古墳・中世
56	下夕古墳群	古墳	古墳	124	城縄手遺跡	散布地	古墳・中世	191	大塚古墳	古墳	古墳
57	見烟丸遺跡	散布地	奈良・平安	125	市港遺跡	散布地	繩文・古墳・中世	192	矢竹古墳群	古墳	古墳
58	寺縄手遺跡	散布地	弥生・奈良・平安・中世	126	郡神遺跡	散布地	弥生・中世	193	能登野城	城跡	中世
59	高賢屋敷	館跡	鎌倉	127	雄子原遺跡	散布地	古墳	194	成願寺砦	城跡	中世
60	藪田遺跡	散布地	奈良・平安	128	吳田遺跡	散布地	弥生・中世	195	白屋北山城	城跡	中世
61	米長堂遺跡	散布地	弥生・中世	129	石田遺跡	散布地	弥生・古墳	196	閻見神社古墳群	古墳	古墳
62	角田遺跡	散布地	古墳・中世	130	鳥浜貝塚	貝塚	繩文	197	白屋北山古墳群	古墳	古墳
63	安賀里城	城跡	安土桃山	131	鳥浜城	城跡	室町	198	勝光庵寺	寺院跡	
64	安賀里古墳群	古墳	古墳	132	ユリ遺跡	集落	繩文	199	白屋遺跡	散布地	平安・近世
65	安賀里坂田遺跡	散布地	奈良・平安	133	牛屋遺跡	散布地	繩文・弥生	200	孤塚古墳	古墳	古墳
66	八丁塚経塚	経塚	近世	134	北寺遺跡	散布地	繩文	201	倉見遺跡	散布地	繩文・中世
67	膳部山城	城跡	安土桃山	135	堂ノ前遺跡	散布地	弥生・古墳	202	保谷遺跡	墓場	中世・近世
68	脇袋北古墳群	古墳	古墳	136	向笠遺跡	散布地	繩文・平安				

中世 鳥羽川流域の丘陵上には山城や砦が多数存在する。谷の奥から田井城跡(4)、麻生野堡跡(6)、堂山城跡(19)、霧が峰城跡(26)、鈴ヶ嶽城跡(24)、長江堡墨跡(32)、山内城跡(42)、安賀里城跡(64)、持田城跡(36)、吉田堡跡(87)、下吉田堡跡(88)、向山砦跡(90)、膳部山城跡(67)、瓜生上砦(76)があり、向山遺跡(92)でも山城の一部を確認している。また、館跡には香川屋敷遺跡(7)、新田氏館跡(38)、高賢屋敷跡(59)があり、寺院跡としては福城寺跡(55)と黒田寺跡(3)が挙げられる。曾根田遺跡の西方にある黒田寺跡は、七堂伽藍を有したとされる天台宗の寺院で、戦国時代に織田信長の兵火により消失したと伝えられており、黒田川改修時には五輪塔や石仏などが多量に出土している。平成19年に埋文センターが発掘調査した際には、建物に関する遺構は検出されなかったが、13世紀代を主体とする遺物が出土した。また、下山古墳群(2)では中世墓と考えられる集石を伴う土坑墓1基を検出している。

鰐川流域には、堂谷山城跡(122)、鳥浜城跡(131)、田名城跡(142)、南前川城跡(155)、相田城跡(163)、黒田愛宕山砦(176)、井崎砦(174)、岩屋城跡(189)、成願寺砦(194)、白屋北山城跡(195)などの山城や砦がみられる。

引用・参考文献

- 永江寿夫 2010 「糠塚古墳」 『第25回福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 上中町教育委員会 1984 『大鳥羽遺跡 I』
- 上中町教育委員会 1985 『大鳥羽遺跡 II』
- 上中町教育委員会 1987 『三生野遺跡』
- 上中町教育委員会 1988 『森の下遺跡・有田坂遺跡』
- 上中町教育委員会 2005 『大谷古墳』
- 斎藤優 1970 『若狭上中町の古墳』
- 清水孝之 2010 「曾根田遺跡」 『年報24 平成20年度』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 三方町教育委員会 1975 『若狭きよしの古墳群』 三方町文化財調査報告1
- 三方町教育委員会 1985 『藤井遺跡』 三方町文化財調査報告書第4集
- 三方町教育委員会 1986 『南前川遺跡』 三方町文化財調査報告書第6集
- 三方町教育委員会 1988 『田名遺跡』 三方町文化財調査報告書第8集
- 三方町教育委員会 1990 『江跨遺跡』 三方町文化財調査報告書第9集
- 三方町教育委員会 1991 『角谷遺跡・仏浦遺跡・江端遺跡・牛屋遺跡』 三方町文化財調査報告書第10集
- 三方町教育委員会 1992 『市港遺跡・北寺遺跡』 三方町文化財調査報告書第11集
- 三方町教育委員会 1996 『ユリ遺跡』 三方町文化財調査報告書第14集
- 三方町教育委員会 2005 『町内遺跡発掘調査 北寺遺跡II発掘調査報告書』 三方町文化財調査報告書第17集
- 三方町教育委員会 1994 『白屋北山古墳群・白屋北山城』
- 若狭三方縄文博物館 2006 『松尾谷古墳』
- 福井県 1986 『福井県史』 資料編13 考古
- 福井県 1993 『福井県史』 通史編1 原始・古代
- 福井県教育委員会 1991 『若狭中核工業団地関係遺跡発掘調査報告書』
- 福井県教育委員会 1997 『若狭地方主要前方後円墳総合調査報告書』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2012 『ユリ遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第128集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2012 『黒田寺跡・下山古墳群』 福井県埋蔵文化財調査報告第130集

第3章 遺構と遺物

今回の調査では、掘立柱建物5棟をはじめとして、溝、土坑、柱穴など複数の遺構を検出することができた。本章では、遺構の概要をまとめた後、各遺構と遺構出土遺物、ついで包含層や盛土などから出土した遺物について報告を行う。なお、各遺構の規模（大きさ・深さなど）や方位（角度）の数値は、すべて遺構確認面を基準に、測量図上で測定・算出した概測値である。出土遺物の詳細については第2～5表を参照されたい。

第1節 遺跡の概要

1 基本層序

調査区内は西から東へと緩やかに傾斜する扇状地地形を呈しており、遺構確認面の標高は西端と東端では約2.50mの差がある。

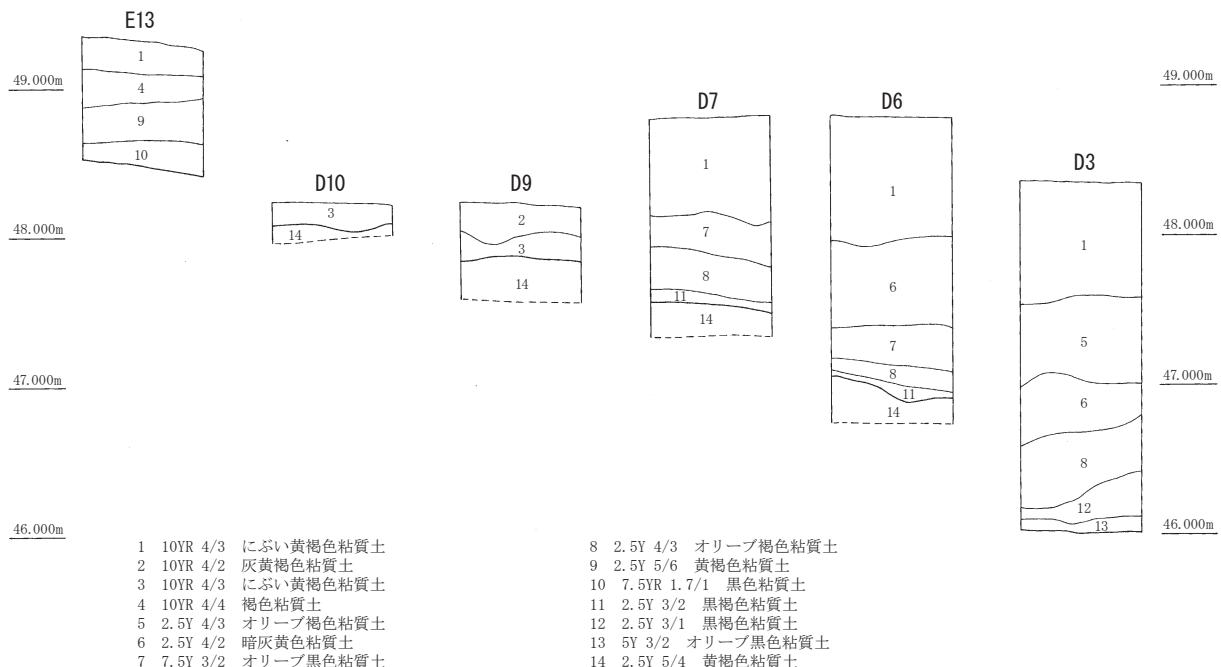
調査区の西側は、現在の耕作土（1～4・9層）直下またはその下層の遺物包含層（10層）の下にある黄褐色粘質土（14層）の上面で遺構を確認している。また、調査区の東側は、現在の耕作土（1層）の下に圃場整備以前の耕作土もしくは盛土と考えられる層（5～8層）が厚く堆積している。その下層に遺物包含層（11～13層）があり、遺構確認面は14層の上面である（第4図）。

2 遺構の概要

調査区全体の遺構配置を示したものが第5図である。

調査区のほぼ中央には黒田川の旧河道と推定される河川1があり、蛇行しながら西から東に向かって流れていたと考えられる。河川1の両側には多数の溝や自然流路がみられ、河川1と並行または直交してはしつていている。

今回検出した掘立柱建物5棟および柱穴列1基は、すべて河川1の南肩部よりも北側にあり、それぞ



第4図 土層概略図（縮尺1/50）

れが重複せずに距離を保って存在している。ただし、今回の調査区においても河川1の南側に柱穴などは確認でき、また舞鶴若狭自動車道建設事業に伴う調査では河川1の南側で竪穴住居や多くの掘立柱建物を検出していることから、河川1は遺跡の境界とはなっていない。

掘立柱建物や柱穴列を構成する柱穴には、柱根や柱痕が遺存するものが多くみられた。また、このほかにも柱根や柱痕を有する柱穴を複数検出したが、建物として復元することはできなかった。

3 遺物の概要

遺物は、河川1からの出土が多数を占め、包含層からの出土はあまり多くない。河川1の出土遺物には縄文時代から平安時代までのものが含まれており、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・製塩土器のほか、木製品や石器も出土している。このなかで、主体となるのは弥生時代後期の土器であり、河川1でも特にC12・C13グリッドに集中がみられた。このほか、溝SD01の上面で完形のガラス小玉2点が出土している。

第2節 遺構と遺構出土遺物

1 掘立柱建物

方形を基調として規則的に配列されている柱穴列を掘立柱建物と認定した。便宜上、柱穴列で構成される四角形の長軸方向を桁行、短軸方向を梁行と規定している。各掘立柱建物の桁行・梁行の長さは、各柱穴列の両端に所在する柱穴の中心を直線で結んだ距離を計測している。また、桁行方向は、座標北に対して、東または西に偏する角度を計測している。

SB01（図版第4、第5～7図）

C8グリッドで検出した側柱建物である。桁行1間(1.72m)、梁行1間(1.23m)の南北棟の建物で、桁行方向はN20°Eである。

柱穴は円形または楕円形を呈し、長軸0.33～0.50m、短軸0.23～0.36m、深さ0.14～0.26mをはかる。柱穴は河川1埋没後に掘削されたもので、すべてに柱根が遺存していた。

柱根は、断面が長方形の厚い板状を呈し、いわゆる「五平柱」状となっている。柱根の断面の大きさは長軸15.3～22.0cm、短軸7.9～12.7cmをはかる。SB01の柱根は、ほかの掘立柱建物の柱根とは異なり、基底部を二方向から斜めに切り取って杭状に尖らせたもので、基底部が柱穴の底部に深く突き刺さった状態で検出された。また、すべての柱根は、断面の長軸を建物の桁行方向と揃えて据えられていた。

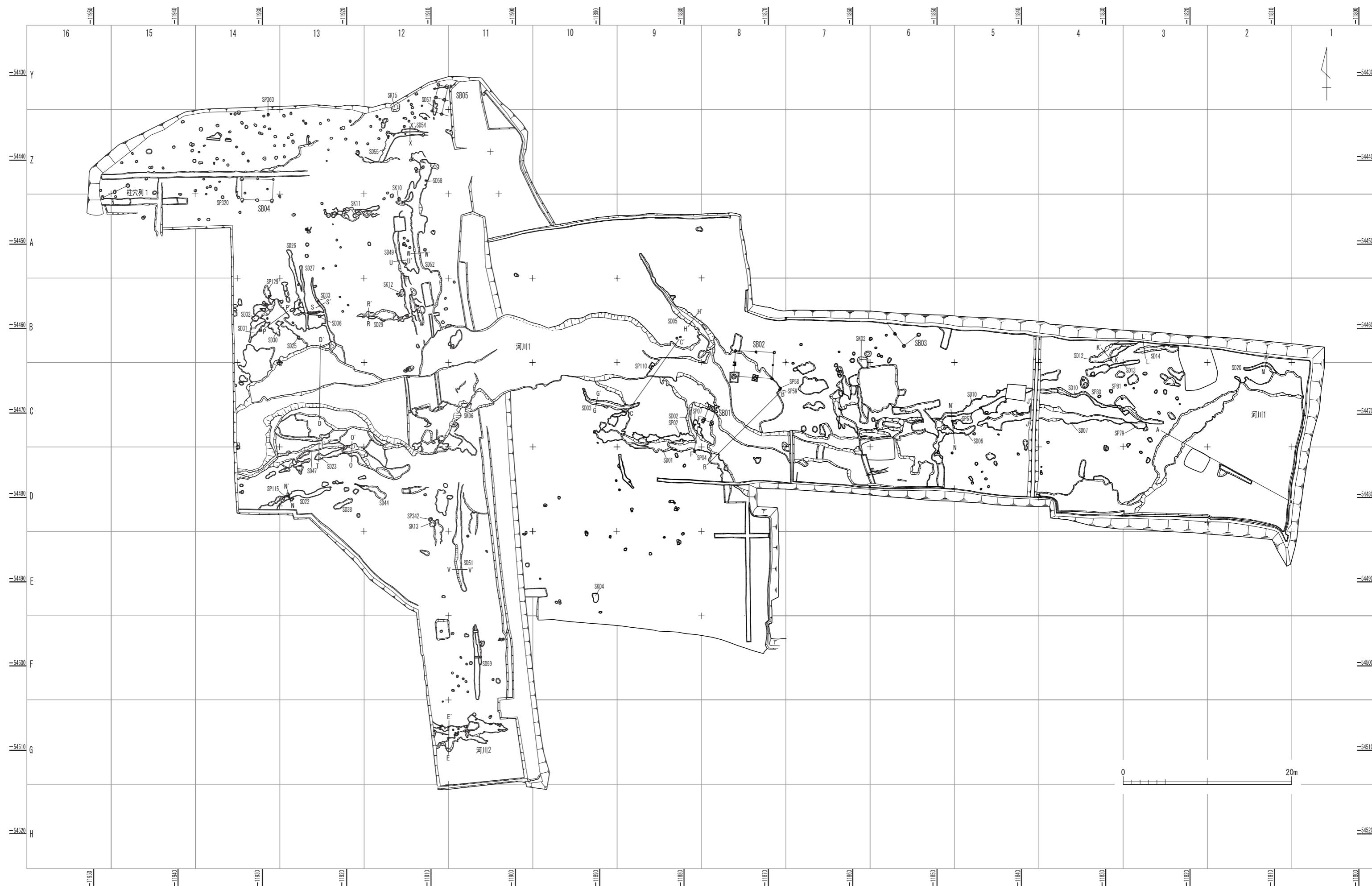
このほか、SP62とSP72で弥生土器片が出土している。

SB02（図版第4、第5・8・9図）

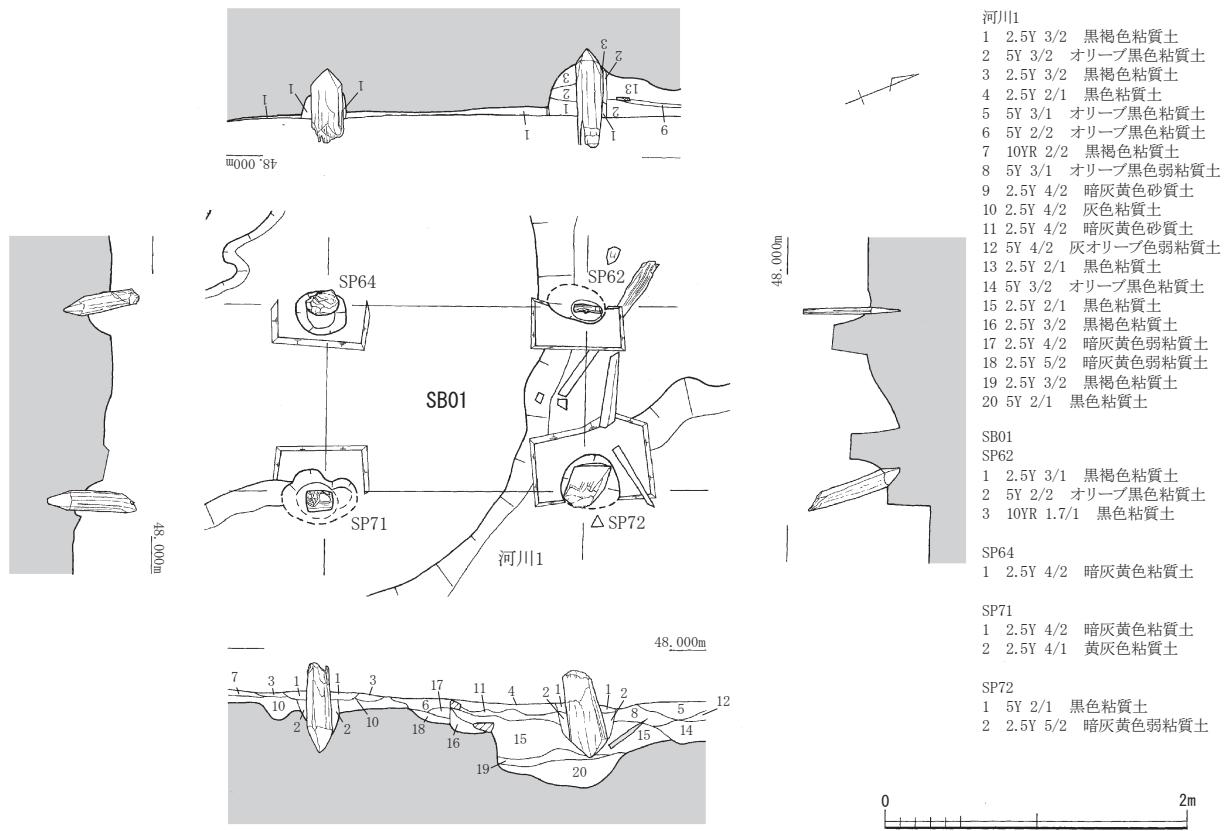
B8・C8グリッドで検出したもので、総柱建物と考えられる。桁行2間(4.52m)、梁行2間(3.11m)の東西棟の建物で、桁行方向はN86°Wである。柱間寸法は、桁行が1.99～2.50m、梁行が1.46～1.63mをはかる。

柱穴は円形または楕円形を呈し、長軸0.21～0.55m、短軸0.15～0.42m、深さ0.13～0.24mをはかる。SP109は掘方を確認できなかったが、これを含めてSP68・69・70・102・104は河川1の埋没後に掘削が行われたと考えられる。また、SP18・19・68・69・70・102・109には柱根が遺存していた。

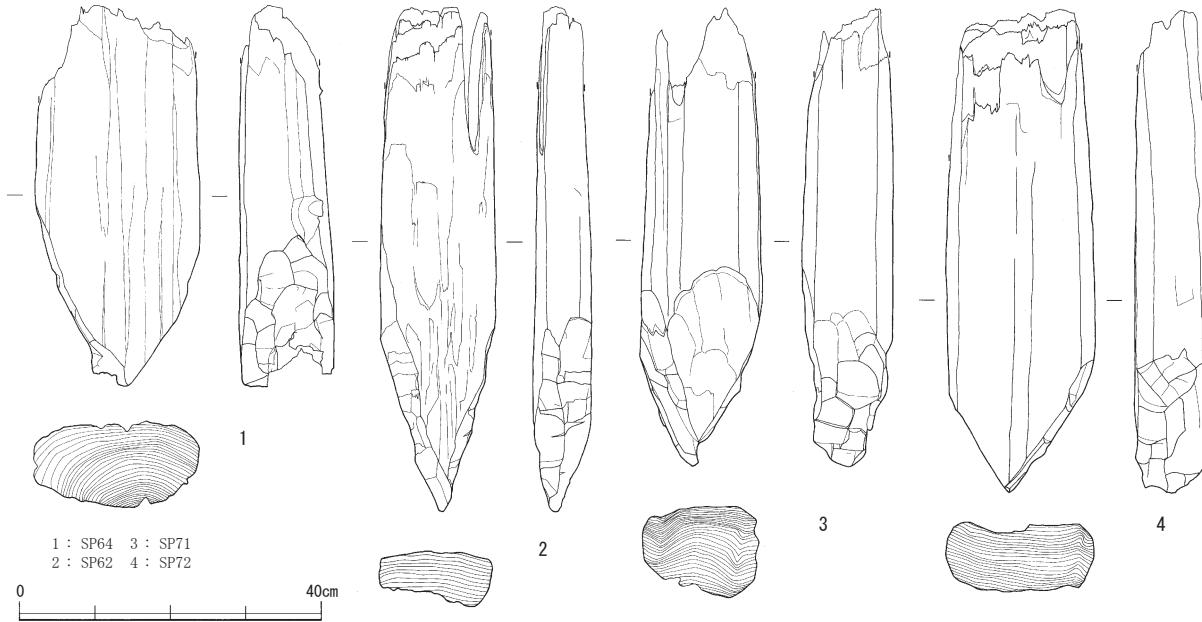
柱根は、SP109のものを除けばすべて断面が長方形を呈する「五平柱」状で、長軸12.0～22.25cm、短軸7.1～10.45cmをはかる。基底部は平坦に整えているが、柱根の基底部が柱穴の底部にめり込んで検出される例が多くみられた。これらの柱根はすべて断面の長軸が建物の短軸方向である南北方向を向くよ



第5図 遺構配置図 (縮尺1/400)



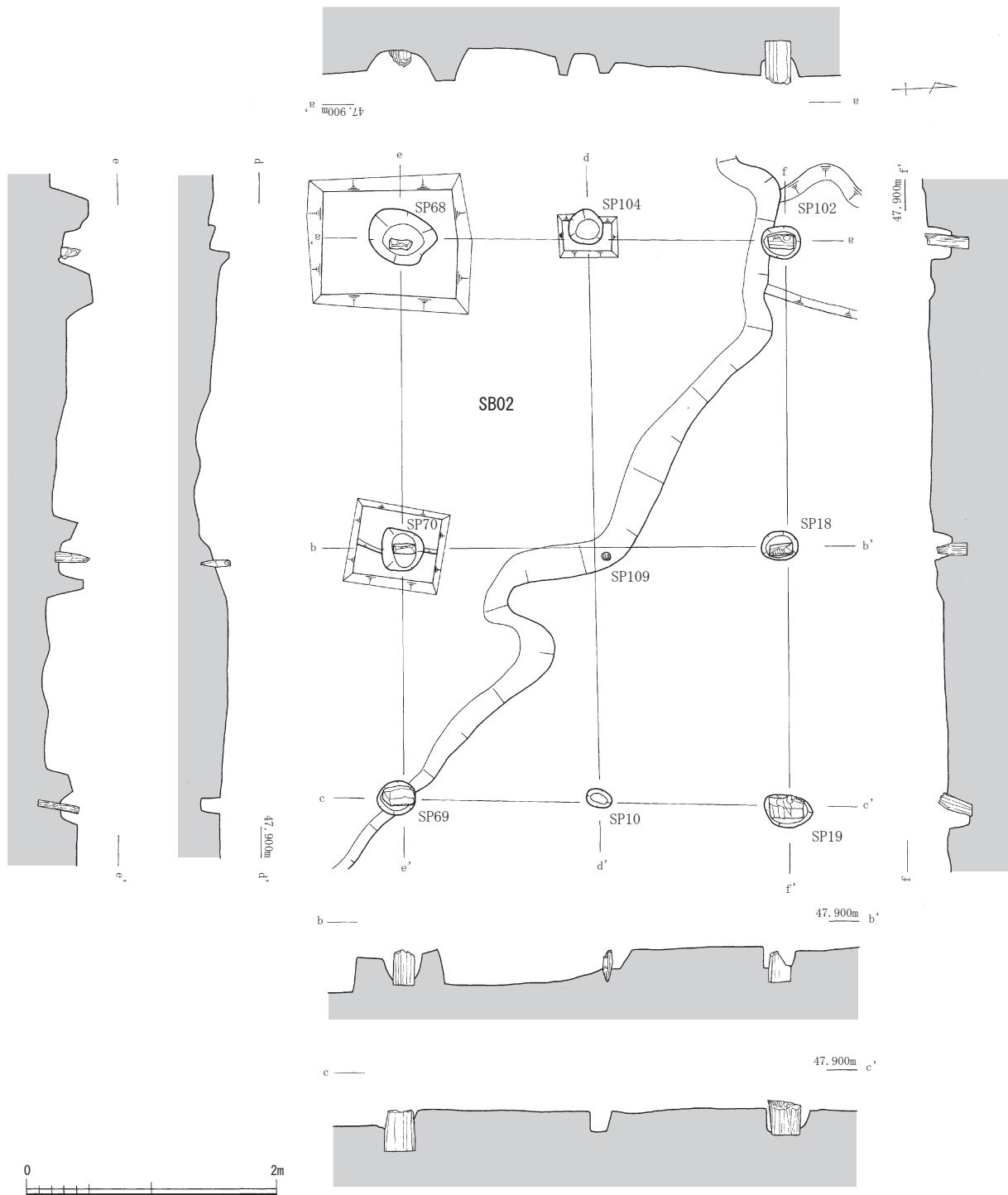
第6図 SB01実測図（縮尺1/50）



第7図 SB01柱根遺物実測図（縮尺1/10）

うに据えられていた。SP109の柱根はSB02で唯一断面が円形の芯持ち材で、直径は6.3cmである。取り上げ時に欠損してしまったが、基底部の中央を杭状に尖らせていたと考えられる。

SP70では弥生土器とみられる小片が出土した。



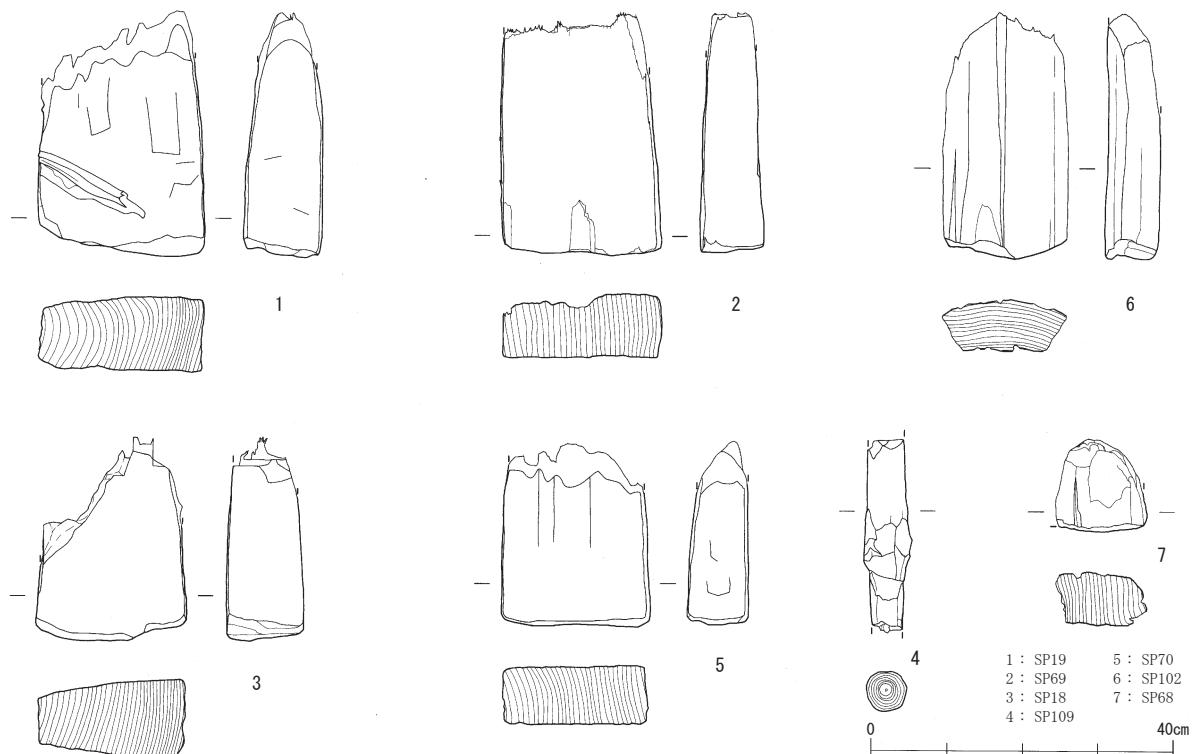
第8図 SB02実測図（縮尺1/50）

SB03（図版第5、第5・10・11図）

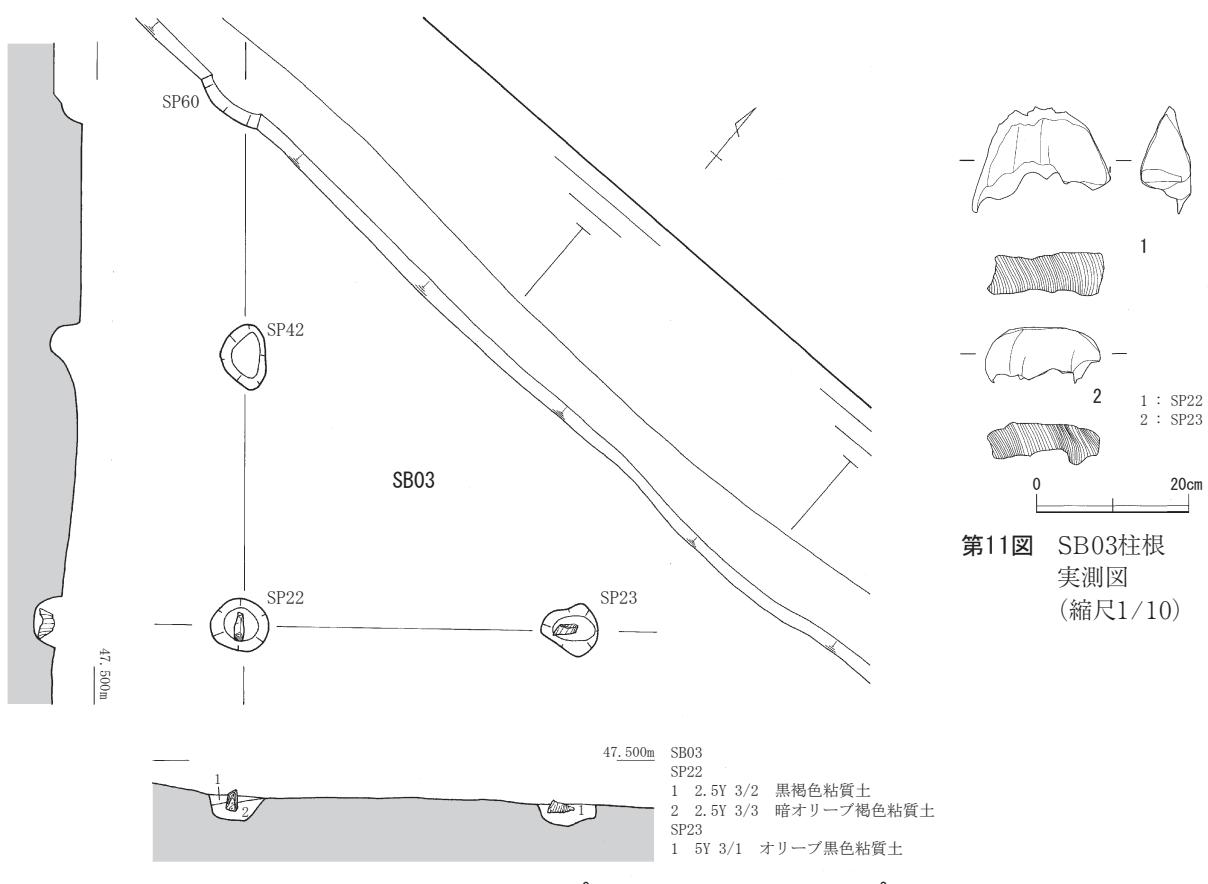
C 6 グリッドで検出した側柱建物で、桁行2間(3.58m)、梁行1間(2.16m)分を確認している。北面および東面が調査区外にのびる可能性があるため確定はできないが、現状では桁行方向がN39°Wとなる南北棟の建物と推測される。桁行の柱間寸法は1.80mである。

柱穴は円形または楕円形を呈し、長軸0.38~0.48m、短軸0.30~0.34m、深さ0.14~0.20mをはかる。柱穴SP22・23には柱根が遺存していた。

第2節 遺構と遺構出土遺物



第9図 SB02柱根遺物実測図（縮尺1/10）



第10図 SB03実測図（縮尺1/50）

柱根は断面が長方形を呈する「五平柱」状で、長軸15.2~18.2cm、短軸5.8~6.55cmをはかる。遺存状態はあまり良くないものの、基底部は平坦に整えられていたとみられる。ほかの掘立柱建物では、柱根断面の長軸を一方向に揃えて据えていたが、SB03ではSP22とSP23の柱根の長軸は直交している。

このほかの出土遺物として、SP23で須恵器片が、SP42で弥生土器片が出土している。

SB04（図版第5、第5・12図）

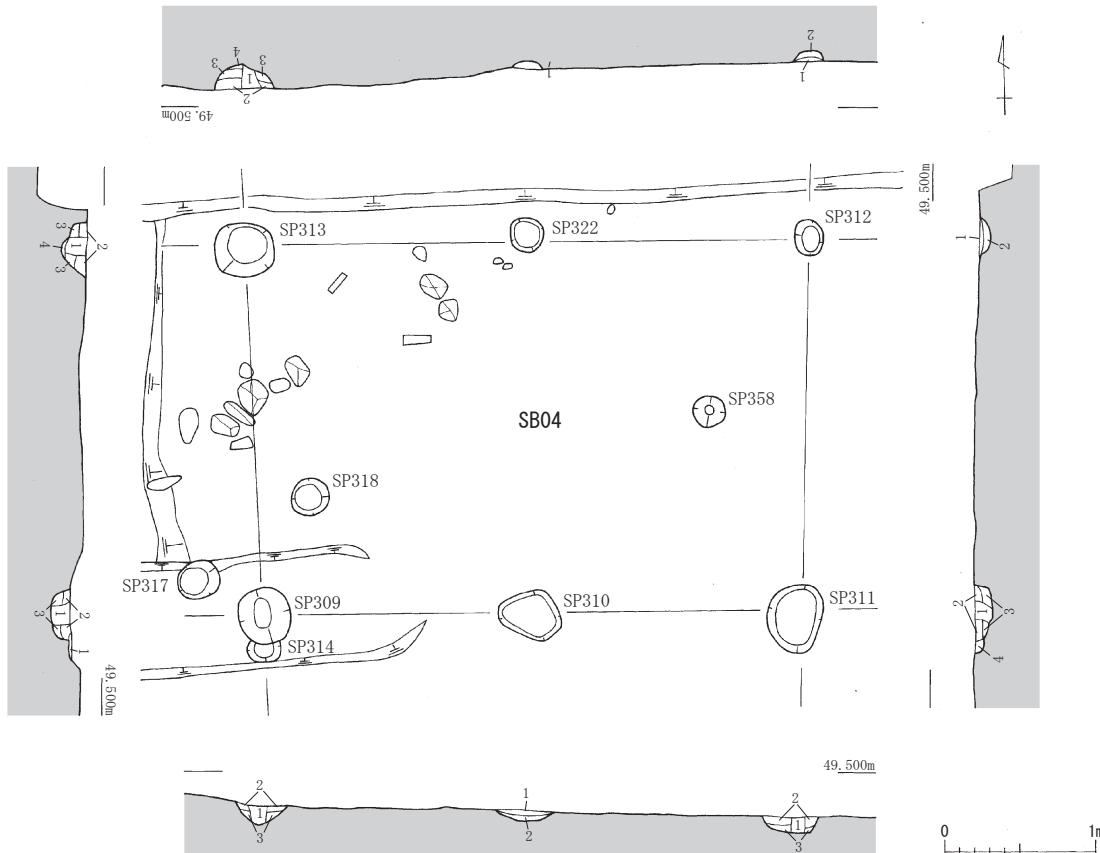
Z・A14グリッドで検出した側柱建物である。桁行2間(3.74m)、梁行1間(2.43m)の東西棟の建物で、桁行方向はN90°Wである。桁行の柱間寸法は、1.78~1.86mをはかる。

柱穴は円形ないし楕円形を呈し、長軸0.22~0.46m、短軸0.18~0.36m、深さ0.06~0.18mをはかる。いずれの柱穴にも柱材は遺存していないが、SP309・311・313の土層断面にその痕跡が認められる。

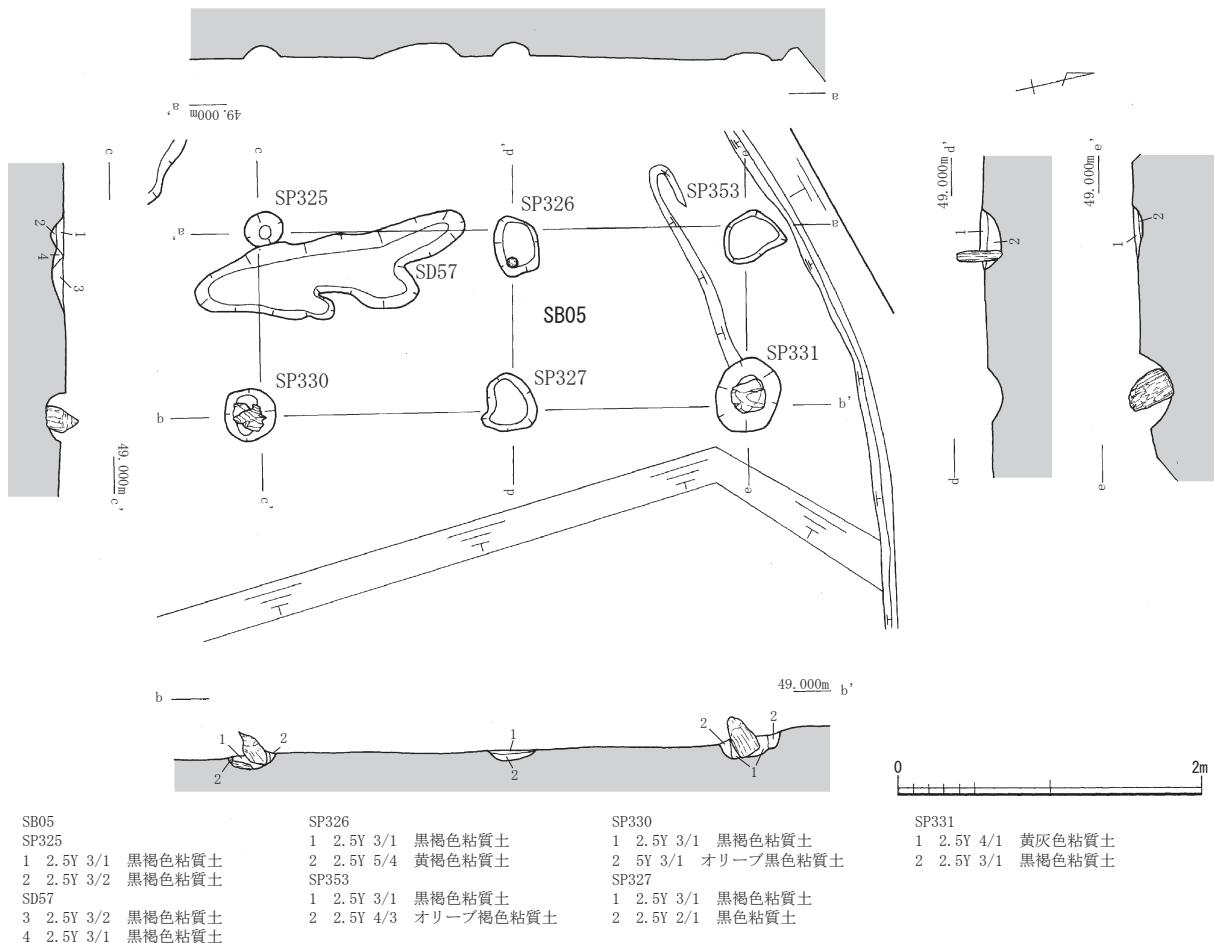
SB05（図版第6、第5・13・14図）

Y・Z12・11グリッドで検出した。桁行・梁行ともに2間以上の総柱建物と考えられるが、東側が削平されており全体規模は不明である。仮に南北棟の建物と想定すると、検出できたのは桁行2間(3.20m)、梁行1間(1.20m)で、桁行方向はN15°Eとなる。

柱穴は円形ないし楕円形を呈し、長軸0.26m~0.50m、短軸0.20~0.40m、深さ0.06~0.20mをはかる。柱穴SP330には柱根が、SP331には柱根と礎板が遺存していた。また、SP326から細い棒材が樹立して



第12図 SB04実測図（縮尺1/50）



第13図 SB05実測図（縮尺1/50）

出土したが、建物との関連は不明である。

柱根はいずれも芯持ちの丸太材で、長径15~20cm、短径14~17cmをはかる。表面がかなり腐朽しており、本来の断面形状を留めていない。

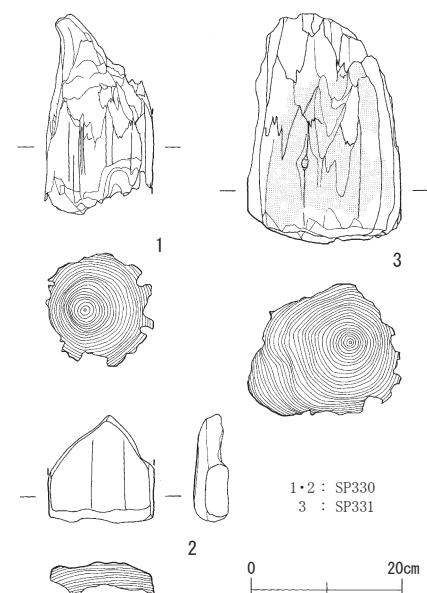
礎板は長さ15cm、幅14cm、厚さ5cmの板目材である。一端が破損あるいは切断され、五角形を呈す。

柱穴列1（第5・15図）

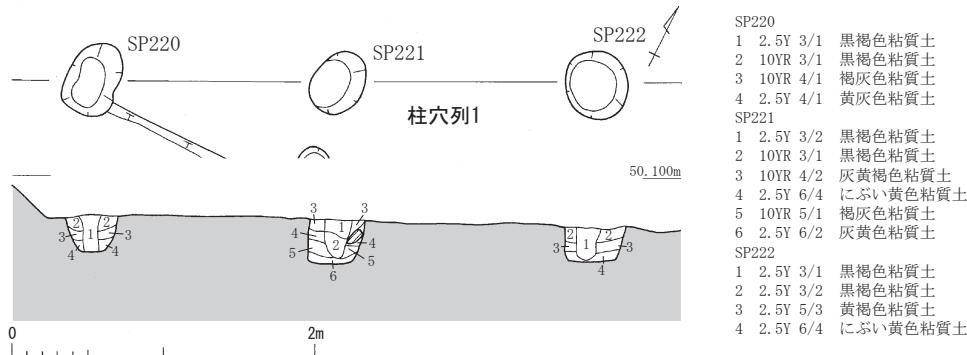
Z15・A16グリッドで検出した。掘立柱建物を構成する可能性もあり、ここで併せて報告する。

遺構は3基の柱穴が直線上でほぼ等間隔に並ぶもので、3.34mをはかり、方位はN60°Eである。北側・南側に搅乱の溝が伸びているため、対になる柱列の有無は不明である。

柱穴は円形ないし橢円形を呈し、長軸0.42~0.50m、短軸0.32~0.42m、深さ0.20~0.30mをはかる。いずれにも柱材は遺存していなかったが、土層断面に径約10cmをはかる腐朽した柱材の痕跡が観察される。



第14図 SB05柱根・礎板実測図（縮尺1/10）



第15図 柱穴列1 実測図（縮尺1/50）

2 土坑

柱穴を除くやや大形の掘り込みを土坑とし、15基検出した。主なものについて記述する。

SK02（第5図）

B7・C7グリッドにまたがって検出した。上面形態は不整橢円をなす。南端を試掘坑に切られており、残存値で南北約1.3m、東西約1.25m、深さ0.1mをはかる。底面は皿状を呈す。埋土は粘質土で、遺物の出土はなかった。

SK04（第5図）

E10グリッドで検出した。上面形態は隅丸長方形をなし、長軸約1.1m、短軸約0.8m、深さ約0.2mをはかる。底面は起伏に富む。埋土は粘質土で、遺物の出土はなかった。

SK06（第5・16図）

C11グリッド、河川1の南肩部で検出した。上面形態は不整形な三角形状を呈し、長辺約3.5m、短辺約2.5m、深さ約0.8mをはかる。埋土は3層に分層される黒褐色の粘質土で、おおよそ水平に堆積している。棒材などの木材が多数出土した。

SK10（第5図）

A12グリッドで検出した。上面形態は細長い橢円形を呈し、長軸約1.1m、短軸約0.5m、深さ約0.3mをはかる。底面は箱状をなす。埋土は粘質土で、弥生土器もしくは土師器の磨滅した小破片が出土した。

SK11（第5・16図）

A13グリッドで検出した。ピットや溝状遺構と切り合っていることもあって形状が判然としないが、上面形態はおおよそ橢円をなすようである。長軸約1.2m、短軸約1.2m、深さ約0.4mをはかる。埋土は上層が粘質土、下層が砂質土および砂礫である。遺物は弥生土器あるいは土師器の磨滅した小破片が複数出土した。

SK12（第5図）

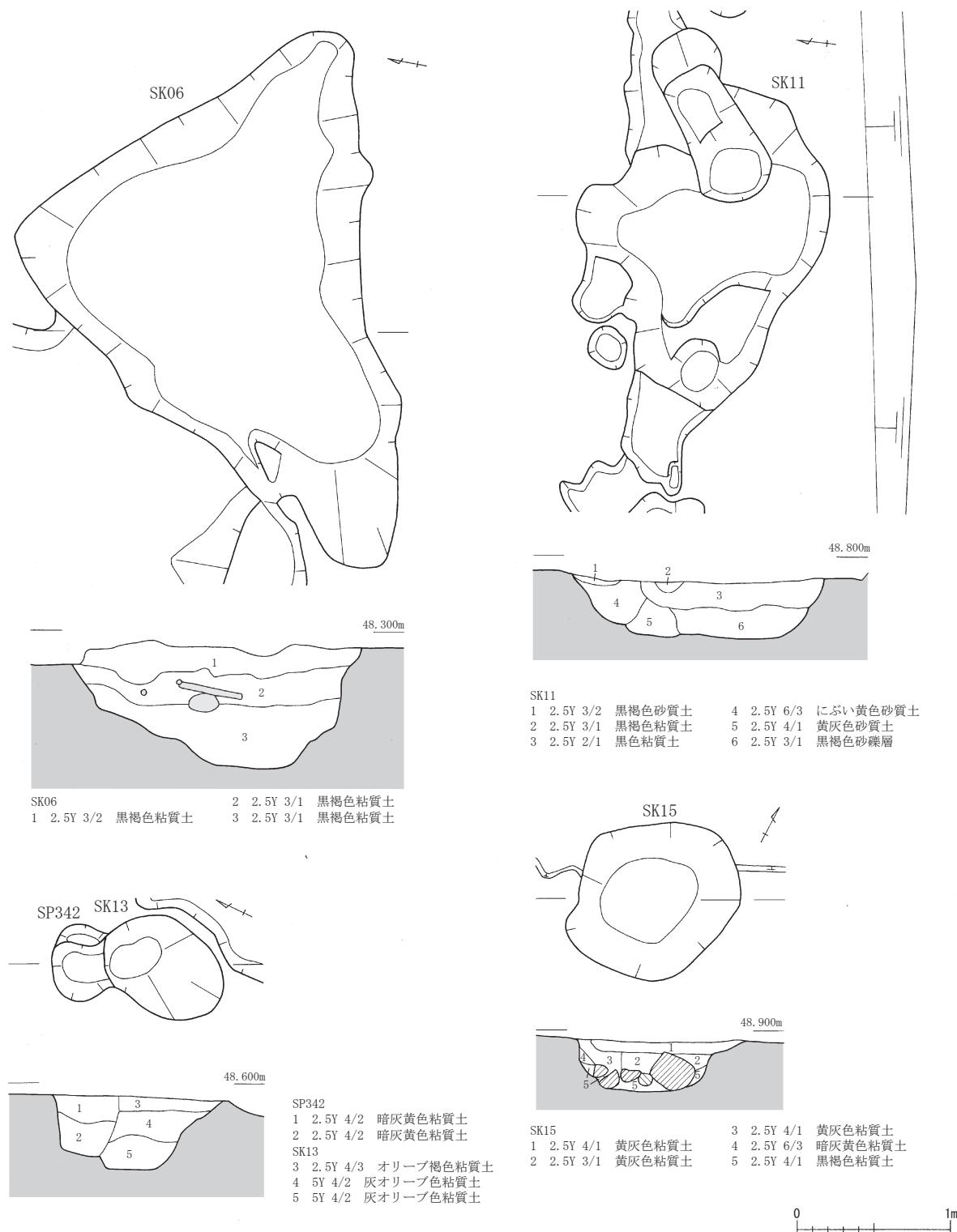
B12グリッド、SD49の西肩で検出した。上面形態は橢円形を呈し、長軸約0.9m、短軸約0.6m、深さ約0.2mをはかる。埋土は粘質土で、遺物は出土していない。

SK13（第5・16図）

D12グリッドで検出した。SP342に切られているが、上面形態はおおよそ橢円をなすようである。長軸0.9m、短軸約0.6m、深さ約0.5mをはかる。埋土は3層に分層される粘質土で、おおよそ水平に堆積している。遺物は出土していない。

SK15（第5・16図）

Y12・Z12グリッド、調査区北壁の際で検出した。上面形態は橢円形を呈し、長軸約1.2m、短軸約1m、深さ約0.3mをはかる。埋土は粘質土である。遺物は出土しなかったが、底面に10~30cm大の自然礫が多数認められた。



第16図 土坑実測図（縮尺1/40）

3 柱穴

多数の柱穴または柱穴状ピットを検出しているが、柱根が遺存するものを中心に記述する。

SP58（第5・17・18図）

C 8グリッドで検出したもので、河川1埋没後に掘削されたSP59を切って構築される。上面形態は橢円形を呈し、長軸0.33m、短軸0.30m、深さ0.07mをはかる。断面形は角が緩やかな逆台形を呈する。柱穴の中央に断面が長方形を呈する「五平柱」状の柱根（第22図1）が遺存する。ほかに遺物は出土していない。

SP79（第5・18図）

C 3グリッドで検出した。深さ数cmと非常に浅く、平面形態は判然としない。埋土は砂質土で、縄文土器が1点出土した（第18図2）。縄文土器は口縁部に沿って低い粘土紐を貼り付けるもので、粘土紐上には刻みが施される。刻目突帯文土器であり、晩期後葉に位置付けられる。

SP80（図版第6、第5・17・18図）

C 4グリッドで検出した。上面形態は橢円形を呈し、長軸0.45m、短軸0.32m、深さ0.08mをはかる。断面形は角が緩やかな逆台形を呈し、柱穴の西寄りに柱根（第18図3）が遺存する。柱根は遺存状態があまりよくないが、芯持ちの円柱と考えられる。ほかに遺物は出土していない。

SP81（図版第6、第5・17・18図）

C 4グリッドで検出した。上面形態は橢円形を呈し、長軸0.49m、短軸0.40m、深さ0.15mをはかる。断面形は角が緩やかな逆台形を呈し、柱穴の南寄りに柱根（第18図4）が遺存する。柱根は断面が円形を呈する芯持ち材で、基底部は平坦に整えている。ほかに遺物は出土していない。

なお、SP80とSP81は近接して存在しており、建物を構成する柱穴と考えられたが、建物を復元するに至らなかった。

SP110（第5・17・18図）

C 9グリッドで検出した。河川1埋没後に掘削される。上面形態は橢円形を呈し、長軸0.24m、短軸0.17m、深さ0.12mをはかる。断面形は浅皿状を呈し、中央に柱根（第18図5）が遺存する。柱根は断面が長方形を呈する「五平柱」状を呈し、基底部を二方向から斜めに切り取って尖らせていている。ほかに遺物は出土していない。

SP129（第5・17・18図）

B14グリッドで検出した。上面形態は橢円形を呈し、長軸0.28m、短軸0.22m、深さ0.23mをはかる。断面形はU字状を呈し、柱穴の中央に柱根（第18図7）が遺存する。柱根は、断面が橢円形を呈する芯持ち材で、基底部は平坦に整えている。ほかに遺物は出土していない。

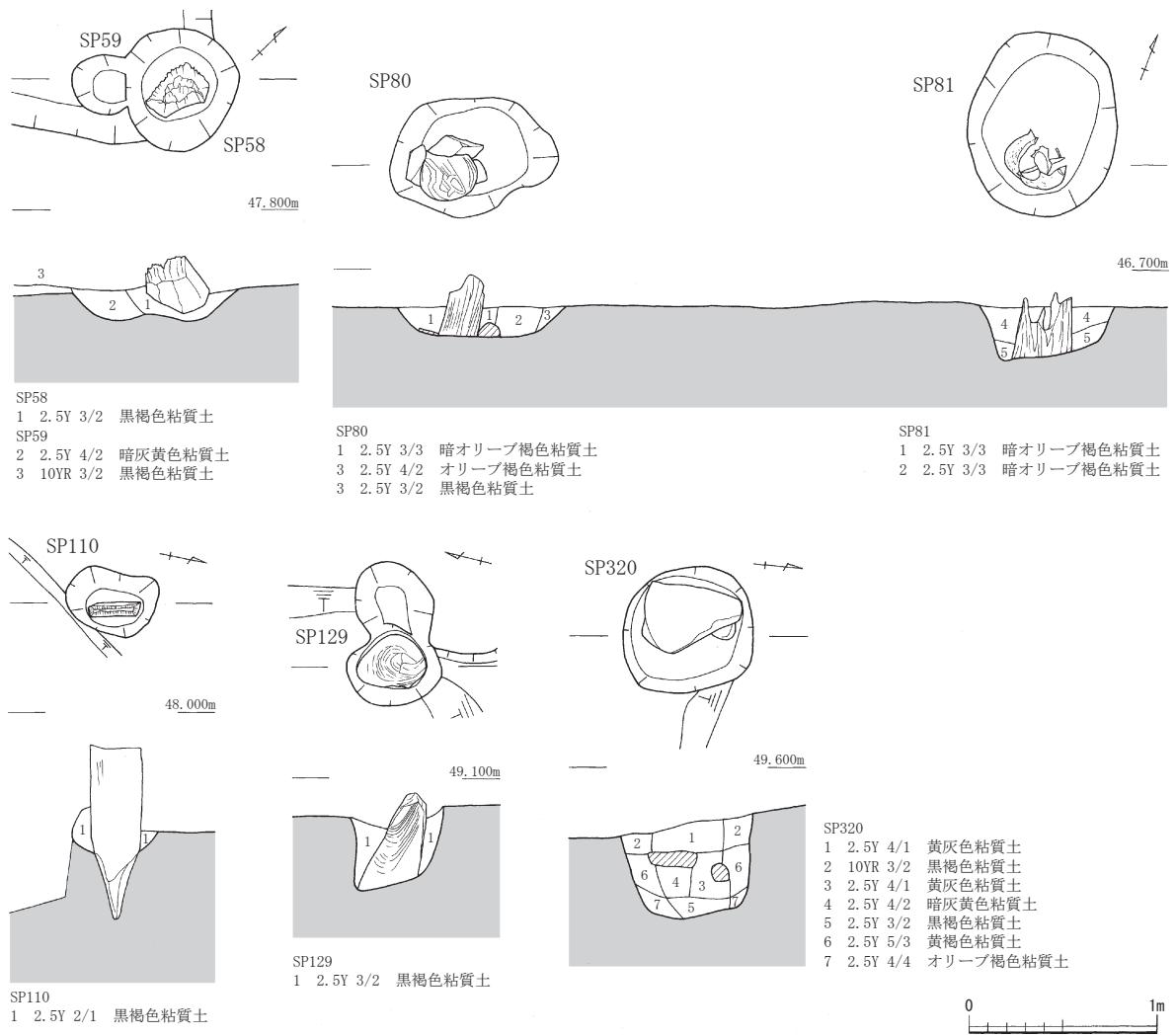
SP320（第5・17図）

A14グリッドで検出した。上面形態は円形を呈し、径約0.35m、深さ0.24mをはかる。断面形はU字状を呈す。埋土は粘質土で、1・2層直下から大型の板石が平置きの状態で出土した。ほかに遺物は出土していない。

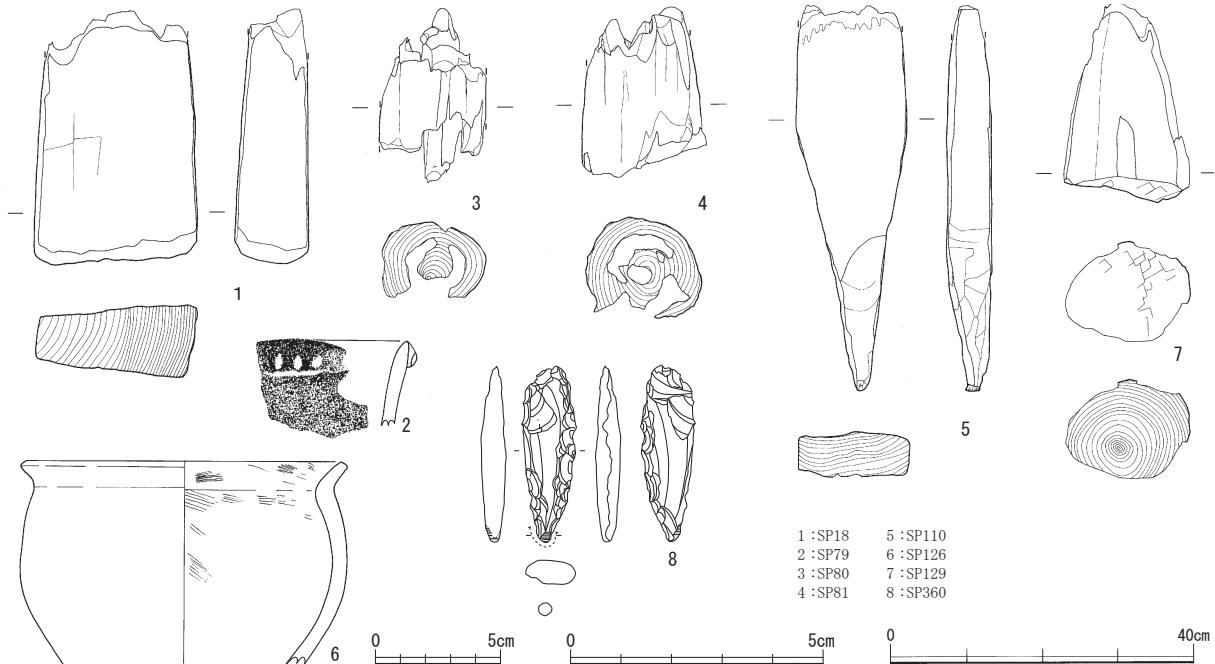
SP360（第5・18図）

Z14グリッドで検出した。上面形態は円形を呈し、径約0.35m、深さ0.11mをはかる。断面形は逆台形を呈する。埋土は粘質土で、遺物はガラス質安山岩製の石錐1点が出土した（第18図8）。錐部先端は使用により摩耗している。

第2節 遺構と遺構出土遺物



第17図 柱穴実測図（縮尺1/20）



第18図 柱穴出土遺物実測図（縮尺1:3~6:1/10、2:7:1/3、8:2/3）

4 溝・自然流路

多数の溝および自然流路を検出している。このうち、主要なものについて記述する。

SD01（第5・19・21図）

C 8～C 10グリッドにかけて検出した。河川1を切り、SP02・SP04・SD02に切られる。西から東方向に流れていたと想定される。幅0.33～1.43m、深さ0.03～0.33mをはかり、断面形は浅皿状を呈する。上面でガラス小玉2点が出土している（第21図1・2）。ガラス小玉はいずれも完形で、引き伸ばし技法で製作されている。長さが短く、扁平な形状を呈する。このほか、弥生土器または土師器の小片と須恵器片が出土している。

SD02（第5・19・21図）

D 8～C 9グリッドで検出したもので、南から北方向に流れていたと想定される。河川1およびSD01を切る。SP07に切られる。幅0.40～0.60m、深さ0.11～0.39mをはかり、断面形は浅皿状を呈する。弥生土器または土師器の小片が少量と石製品（第21図3）が1点出土している。石製品は石刀状のものである。風化により表面が剥落しており、加工痕は明らかでない。頁岩製。

SD03（第5・19図）

C 9・C 10グリッドで検出した。河川1を切り、西から東方向に流れていたと推測される。SD01と平行してはしる。幅0.20～0.69m、深さ0.20～0.32mをはかり、断面形はU字状を呈する。弥生土器または土師器の小片が少量出土している。

SD05（第5・19図）

B 8～A 9グリッドにかけて検出した。北西から南東方向に流れ、河川1に注いでいたと考えられる。幅0.64～1.20m、深さ0.27～0.32mをはかり、断面形は角が緩やかな逆台形を呈する。遺物は確認していない。

SD06（第5・19図）

C 5・C 6グリッドで検出したもので、西から東方向に流れていたと想定される。現状では途切れているが、SD07の一部であった可能性が高い。SP61に切られる。幅0.44～1.02m、深さ0.08～0.21mをはかり、断面形は浅皿状を呈する。弥生土器または土師器片が出土している。

SD07（第5・19図）

C 3～C 5グリッドにかけて検出したもので、SP57を切る。弧を描いて西から東方向に流れていたと推測される。現状では途切れているが、河川1に注いでいた可能性が高く、河川1氾濫時の流路とみられる。幅0.12～1.86m、深さ0.04～0.30mをはかり、断面形は浅皿状を呈する。弥生土器または土師器片が出土している。

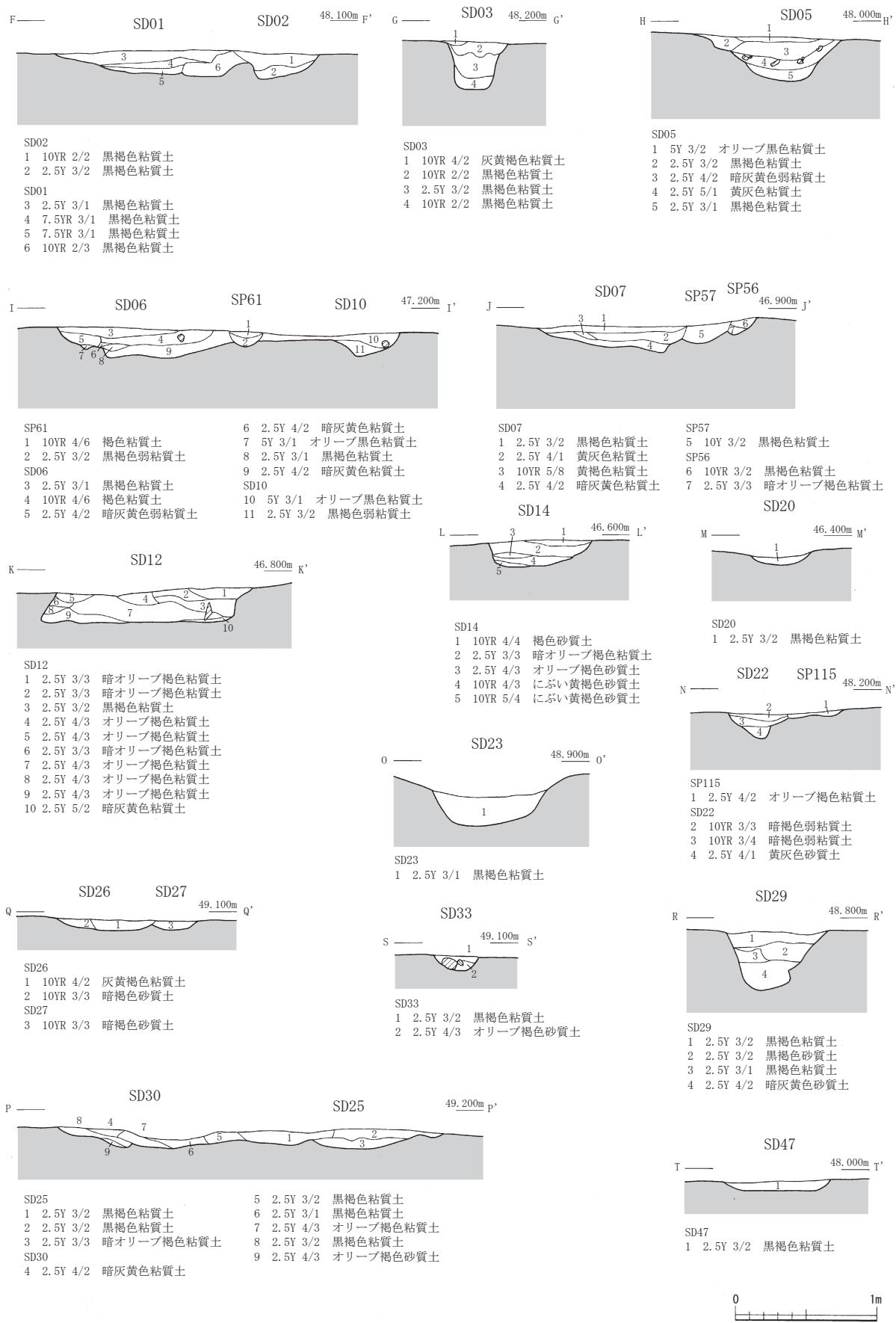
SD10（第5・19図）

C 3～C 6グリッドにかけて検出したもので、西から東方向に弧を描いて流れていたと想定される。SD06・SD07と並行してはしり、SP61に切られる。現状では途切れているが、河川1に注いでいた可能性が高く、河川1氾濫時の流路とみられる。幅0.25～1.30m、深さ0.05～0.19mをはかり、断面形は浅皿状を呈する。弥生土器または土師器片と、平安時代の須恵器片が出土している。

SD12（第5・19・21図）

B 3～C 4グリッドにかけて検出したもので、南西から北東方向に流れていたと想定される。幅0.70～1.56m、深さ0.10～0.34mをはかり、断面形は箱形を呈する。弥生土器または土師器片および石器が

第2節 遺構と遺構出土遺物



第19図 溝・自然流路土層断面図1（縮尺1/40）

出土した。第21図4は弥生土器の甕、同図5・6は敲石である。

SD14（第5・19図）

B3～C4グリッドにかけて検出した。西から東方向に流れていたと想定される。東側は試掘坑による搅乱を受けている。幅0.26～0.75m、深さ0.09～0.20mをはかり、断面形は角が緩やかな逆台形を呈する。弥生土器または土師器の小片と、平安時代の土師器片および須恵器片が少量出土している。

SD20（第5・19図）

C2グリッドで検出した。西から東方向に流れて河川1に注いでいたと考えられる。幅0.30～0.50m、深さ0.04～0.12mをはかり、断面形は浅皿状を呈する。弥生土器または土師器の小片が少量出土した。

SD22（第5・19図）

D13・D14グリッドで検出したもので、南西から北東方向に流れていたと想定される。SP115に切られる。幅0.44～1.18m、深さ0.03～0.17mをはかり、断面形は浅皿状を呈する。平安時代の須恵器片がわずかに出土している。

SD23（第5・19図）

D12・D13グリッドで検出したもので、西から北東方向に流れていたと想定される。河川1・SD47と並行してはしり、河川1の氾濫時の流路と考えられる。幅0.26～1.72m、深さ0.04～0.36mをはかり、断面形は角が緩やかな逆台形を呈する。須恵器片がわずかに出土している。

SD25（第5・19・21図）

B13・B14グリッドで検出した。北西から南東方向に流れていたと想定され、SD30を切る。幅0.40～1.38m、深さ0.05～0.14mをはかり、断面形は浅皿状を呈する。微量の須恵器片のほか、柱根（第21図7）が出土している。柱根は断面が円形を呈する芯持ち材で、基底面は平坦に整えている。

SD26（第5・19・21図）

A13・B13グリッドで検出したもので、北から南方向に流れていたと想定される。SD33と並行してはしり、SD36に切られる。また、SD27を切る。幅0.28～0.76m、深さ0.05～0.10mをはかり、断面形は浅皿状を呈する。須恵器の壊蓋（第21図8）と木製品（第21図9）が出土している。木製品は柱根もしくは杭と考えられ、断面長方形の板状を呈する。基底部は二方向から斜めに切り取って尖らせている。このほか、須恵器片がわずかに出土している。

SD27（第5・19図）

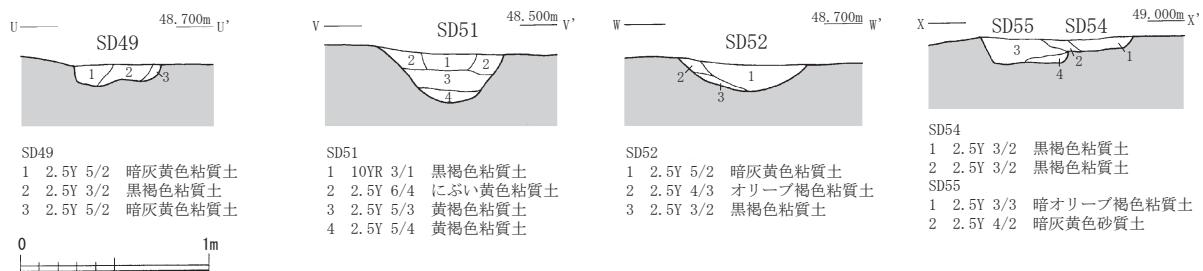
A13・B13グリッドで検出した。北から南方向に流れてSD25に合流していたと想定される。SD26およびSD36に切られる。幅0.25～0.38m、深さ0.04～0.10mをはかり、断面形は浅皿状を呈する。須恵器片がわずかに出土している。

SD29（第5・19図）

B12・B13グリッドで検出した。西から東方向に流れていたと想定され、東側でSD49に合流する。幅0.22～1.25m、深さ0.12～0.44mをはかり、断面形は角が緩やかな逆台形を呈する。平安時代の須恵器片がわずかに出土している。

SD30（第5・19図）

B13グリッドで検出した。西から東方向に流れていたと想定され、SD25に切られる。幅0.36～1.03m、深さ0.09～0.14mをはかり、断面形は浅皿状を呈する。古墳時代後期の須恵器片がわずかに出土した。



第20図 溝・自然流路土層断面図2（縮尺1/40）

SD33（第5・19図）

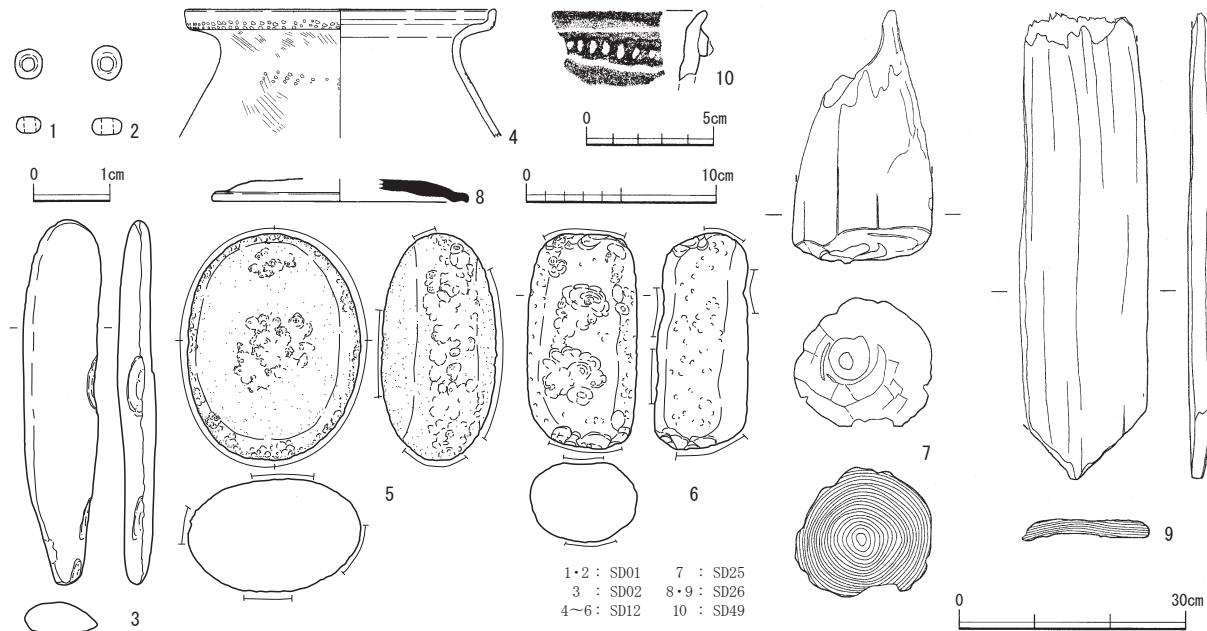
B13グリッドで検出した。北から南方向に流れていると想定され、SD36に切られる。SD26・SD27と並行してはしり、河川1に注いでいたと考えられる。幅0.24～0.61m、深さ0.08～0.17mをはかり、断面形は浅皿状を呈する。土師器片がわずかに出土している。

SD47（第5・19図）

C13～D14グリッドにかけて検出したもので、西から東方向に流れていると想定される。河川1およびSD23と並行してはしり、現状では途切れているが、河川1の氾濫時の流路と考えられる。幅0.60～1.37m、深さ0.04～0.09mをはかり、断面形は浅皿状を呈する。出土遺物は確認していない。

SD49（第5・20・21図）

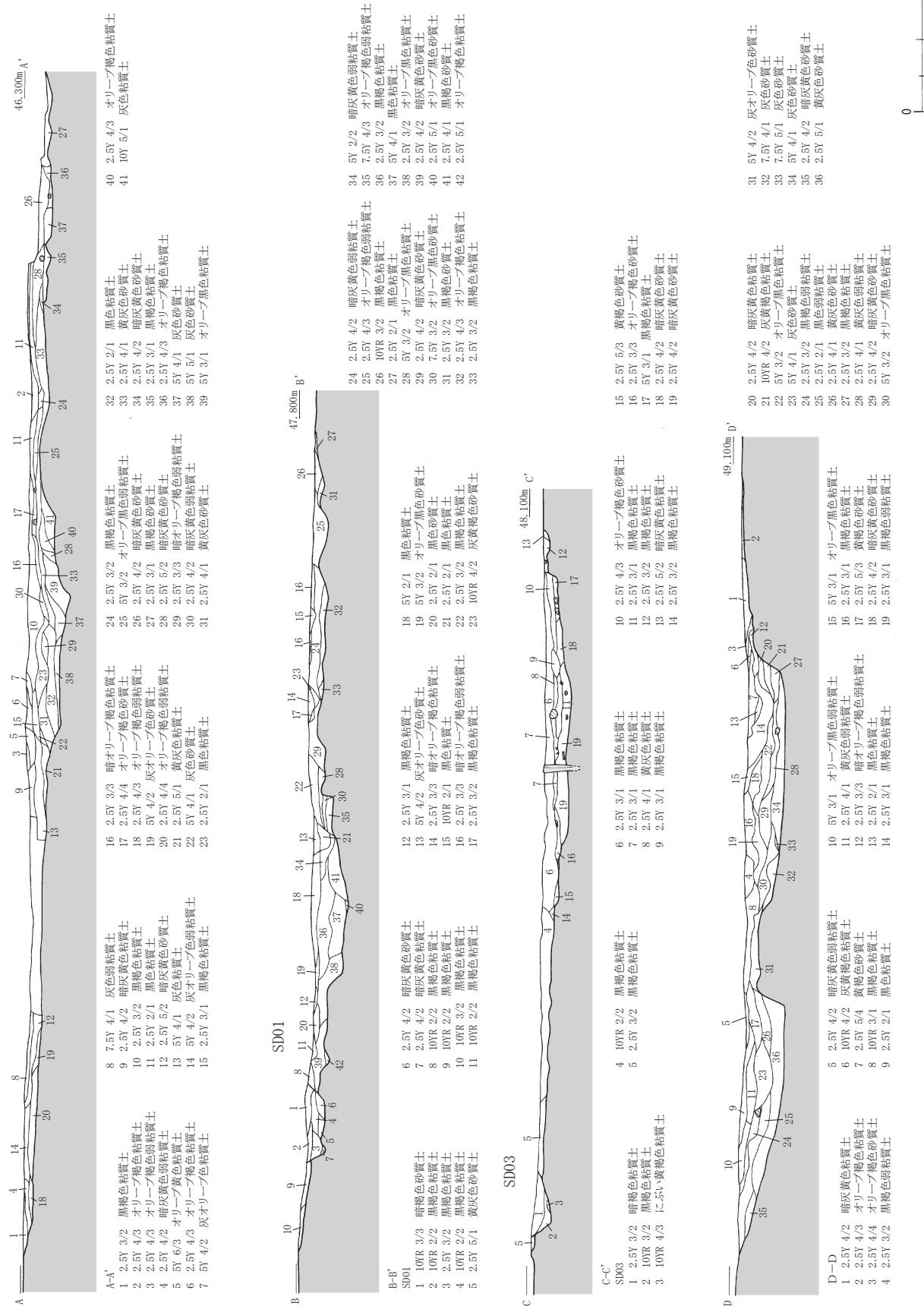
A12・B12グリッドで検出した。幅0.3m～0.7m、深さ0.1～0.15mをはかる。遺物は縄文時代晩期後葉に位置付けられる刻目突帯文土器（第21図10）や磨石が出土している。



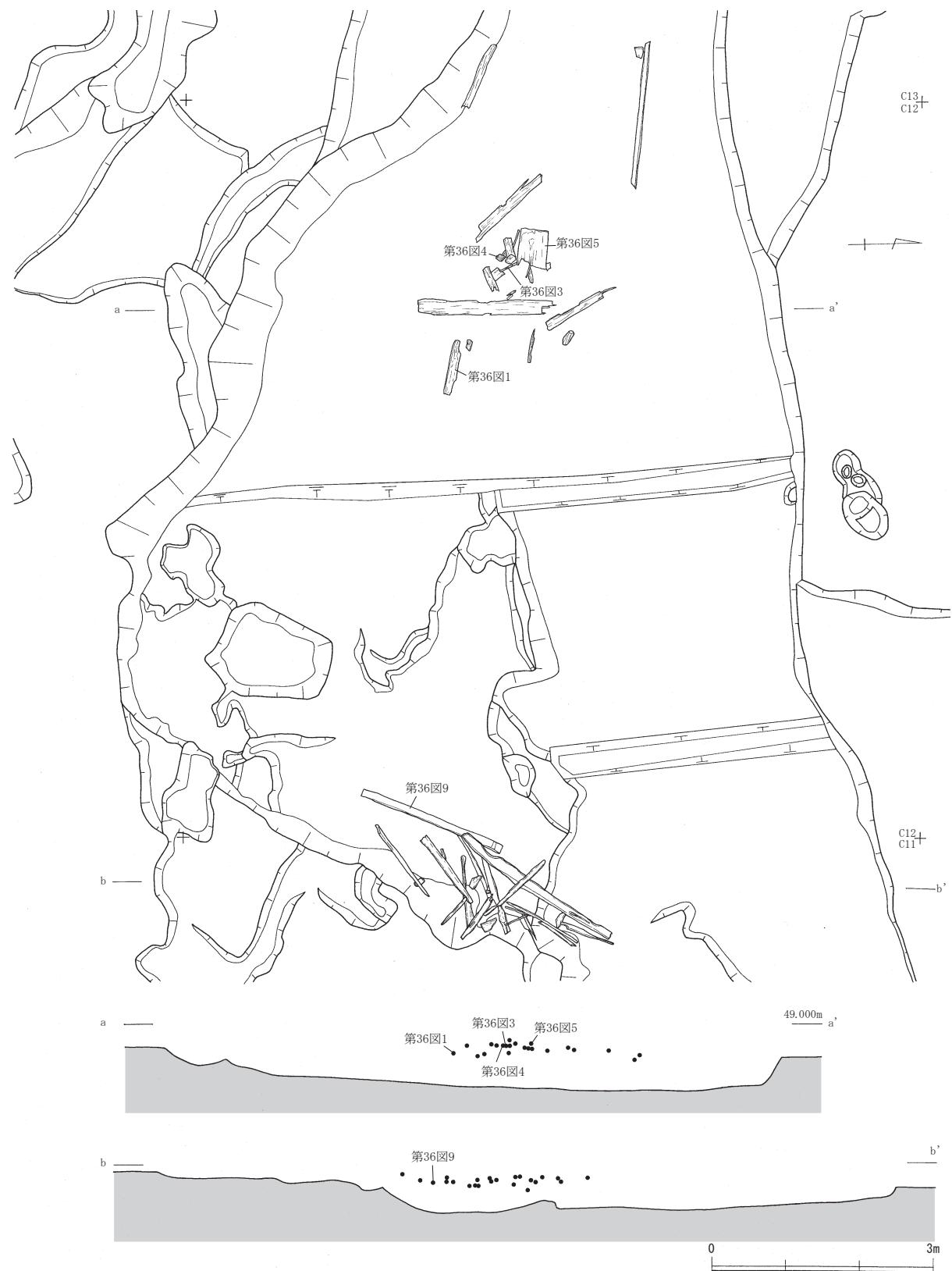
第21図 溝・自然流路出土遺物実測図（縮尺1・2：1/1、3～6：1/4、7・9：1/10、10：1/3）

5 旧河道

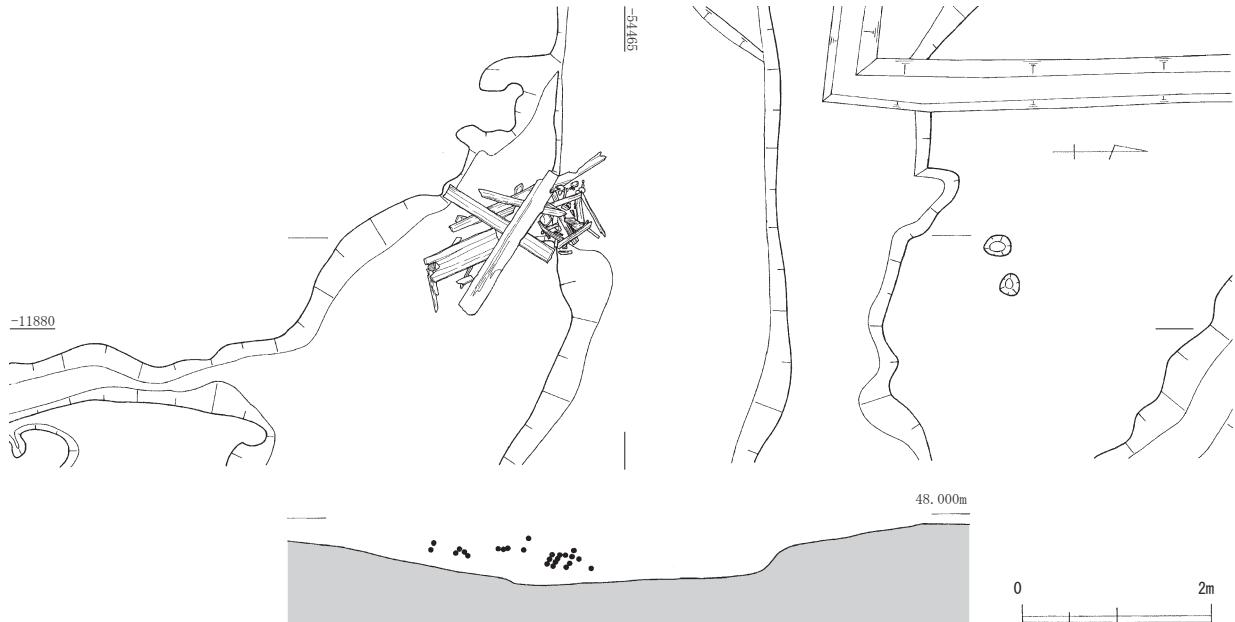
旧河道は2条を検出した。いずれも西から東に流れていると想定される。北側から河川1、河川2と呼称した。今回の調査における出土遺物のほとんどは、これら旧河道、特に河川1からのものである。便宜上、ここでは両旧河道の概略を述べた後、出土遺物について種類ごとに説明する。



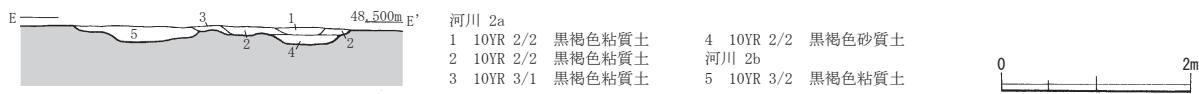
第22図 河川1 土層断面図（縮尺1/80）



第23図 河川1木製品出土状況図1 (縮尺1/80)



第24図 河川1木製品出土状況図2（縮尺1/80）



第25図 河川2土層断面図（縮尺1/80）

1) 概略

河川1（第5・22~24・26~37図）

C 1～D 4、D 6～B14グリッドにかけて検出した。西から東方向に蛇行しながら流れていると想定され、黒田川の旧流路と考えられる。幅6.50～8.00m、深さ0.04～0.56mをはかり、断面形は浅皿状を呈する。出土遺物は非常に多い。土器は縄文時代から平安時代までのものが含まれており、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・製塩土器のほか、木製品や石器も出土している。このなかで、主体となるのは弥生時代後期の土器であり、特にC12・C13グリッドに集中がみられた。

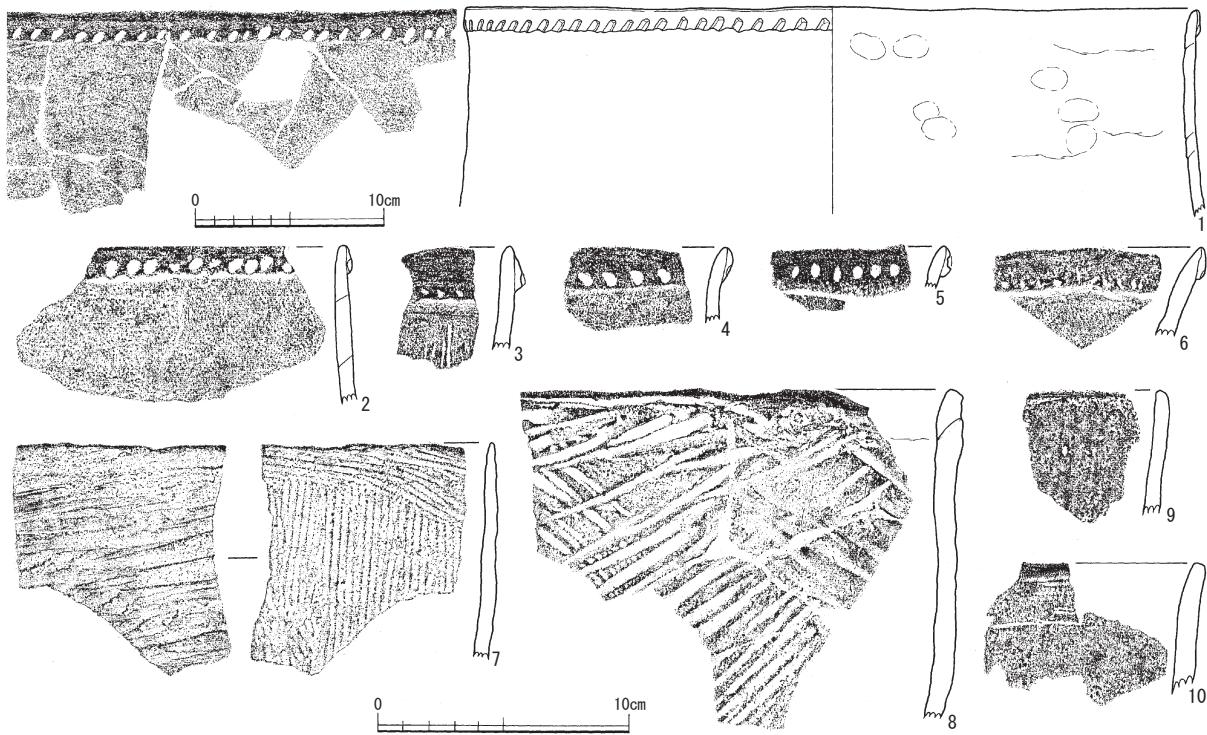
河川2（第5・25・35・36図）

G11・12グリッドにかけて検出した。削平により遺存状態が悪く、調査区東端に至る前に途切れている。幅は最大で約3.2m、同じく深さ約0.15mをはかる。流路は2条が切り合っている。出土遺物は主に平安時代の須恵器と製塩土器で、弥生時代以前の遺物は明らかでない。

2) 出土遺物

縄文土器（第26図）

河川1の主に下層・最下層とした砂礫層から出土した。縄文時代晩期後葉に位置付けられる突帯文土器とそれに伴うと考えられる条痕文・無文土器である。いずれも深鉢とみられる。突帯文土器として抽出できたのはすべて口縁部破片である。突帯は口縁端部に接し、概して幅広で低い。断面三角形で垂れ下がった例もある(3)。突帯上には刻みないし刺突を施す。刻みや刺突は突帯下縁に沿うものが多く、橢円形や楔形を呈す比較的しっかりとしたもの(1・2・4・5)と線・点状をなす軽いもの(3・6)がある。前者には竹管状工具を用いる例がある(5)。口縁端部は面取りせず、刻みも施さない。



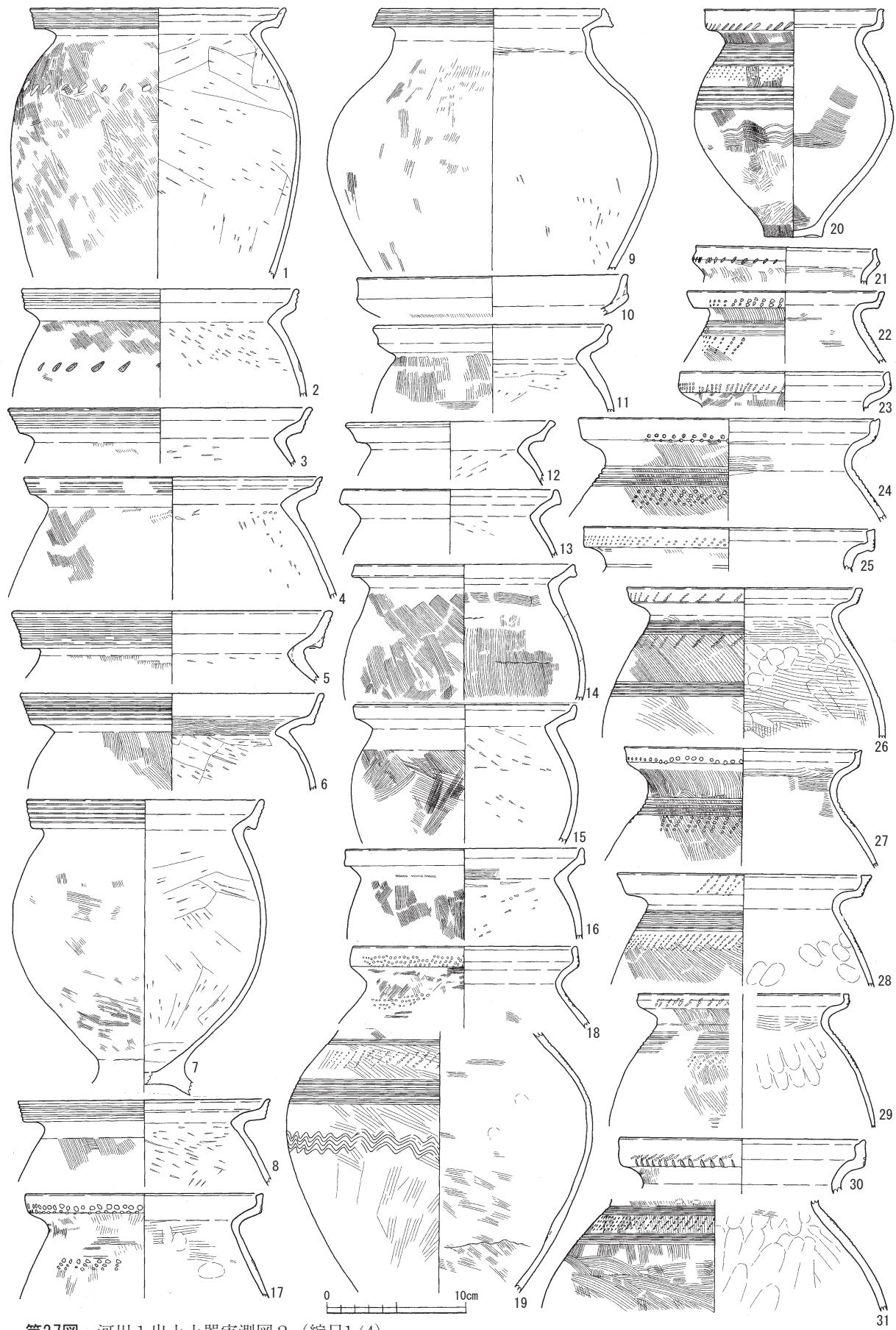
第26図 河川1出土土器実測図1（縮尺1:1/4、2~10:1/3）

条痕文土器には薄手で口端が先細りとなるもの(7)と厚手で口端が丸みを帯びるかやや面をもつもの(8・10)がある。胎土には雲母の混入が目立つ(7・8)。

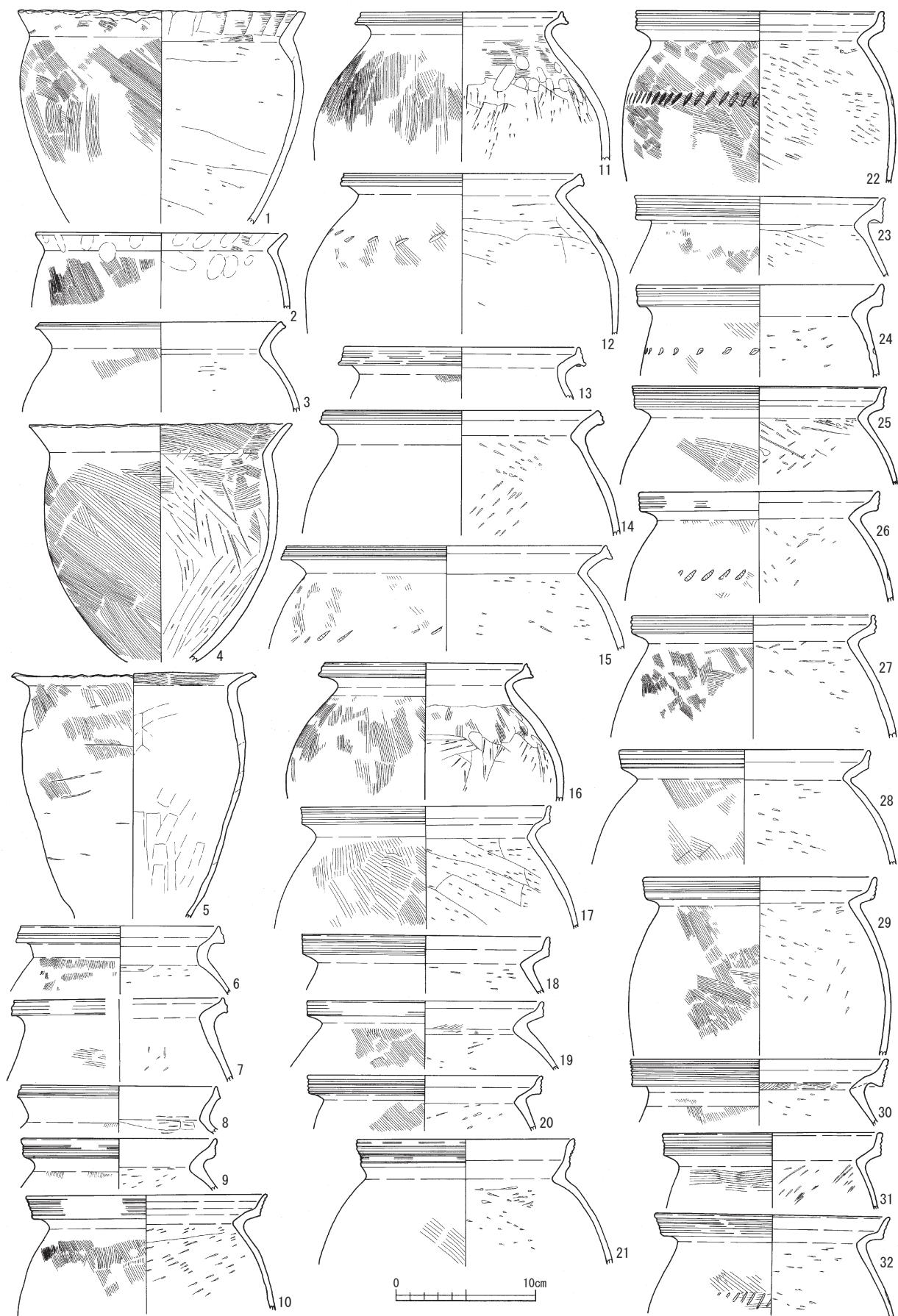
弥生土器（第27～34図）

甕は口縁部があるものを中心に83点を図化した（第27～29図、第31図28・31・33～35）。甕には有段口縁と受口状口縁に、「く」の字口縁の3種類ある。口縁部だけのものが多く、底部まで復元できたものは、図上で復元できた有段口縁のもの（第29図12）1点しかない。これは甕の胴部下半の煮沸効果を高めるため器壁を薄くする行為をいずれの器種も徹底し、復元ができなかつたためである。口縁部のあるものは73点あるが、このうち13点が受口状口縁（第27図17・18、20～30）、「く」の字口縁が5点（第28図1～5）で、残り54点が有段口縁と圧倒的に多い。その比率は受口状口縁が18%、「く」の字口縁が7%、有段口縁が74%以上と高い。またここでは受口状口縁と有段口縁の折衷となるもの（第29図11）が1点だけある。口縁の長さと胴部上半の刺突列点文は有段口縁の、口縁部の立ち上がりに施文される刺突は受口状口縁の特徴を示す。有段口縁の54点のうち、口縁に擬凹線文を施文しない無文のもの（第27図10～16）が7点で、残りの47点の口縁部には擬凹線文がある。擬凹線文のある有文の比率は90%近い。

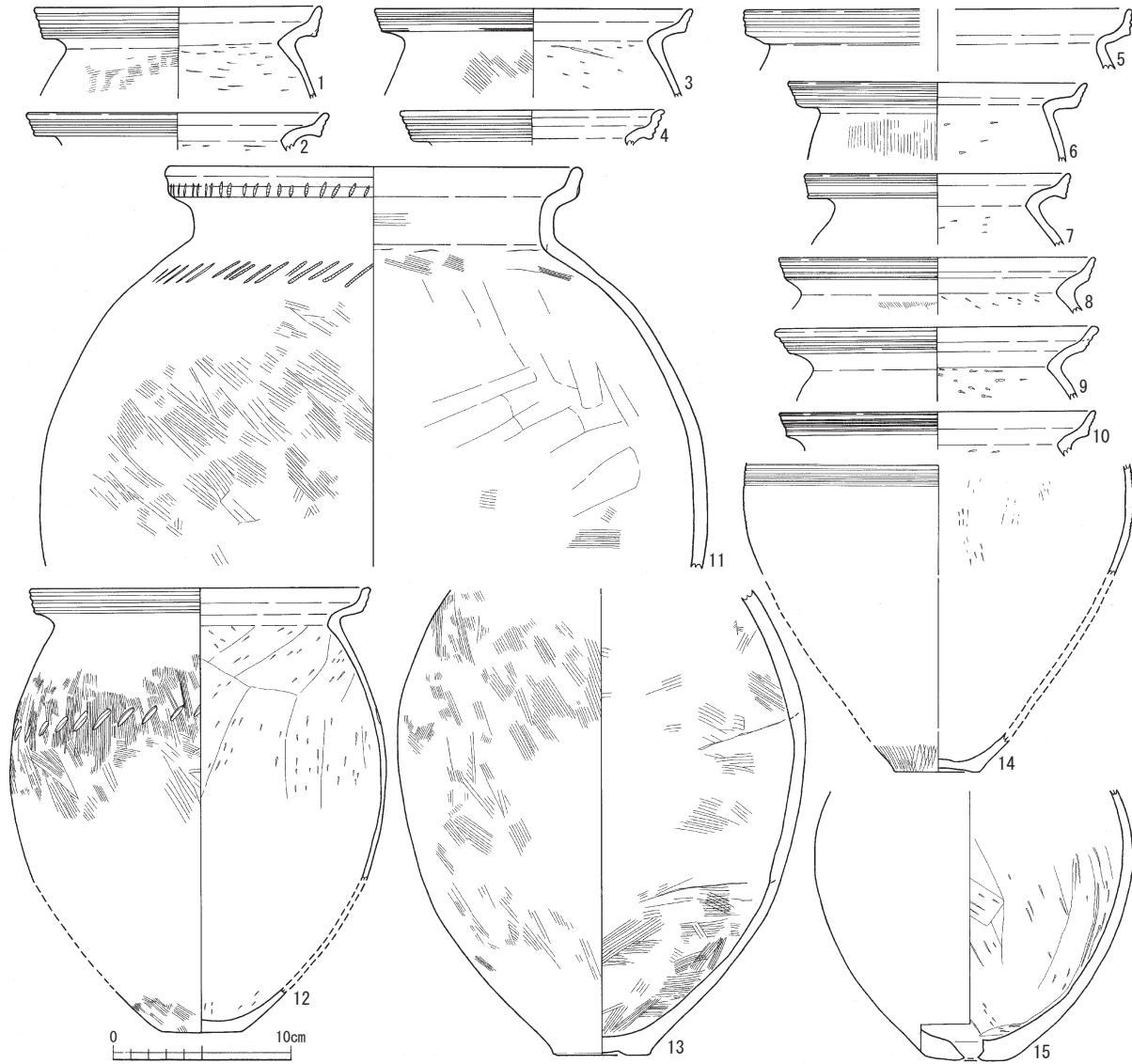
有段口縁の多くは、その立ち上がりがほぼ直立するものと、立ち上がりから直線に斜めに立ち上がるものの2種類である。この2種類についてはどうちらかを明確にすることが難しいものも多くあり、前者の典型的なものには擬凹線文が多いもの（第27図5～7）が目立つが、その違いは両者では明確に指摘することはできない。ただ口縁の立ち上がりが直立に近く、口縁の先端が細くならず有段の口縁帶の厚みが均一なものには、胴部上半に刺突列点文があるもの（第27図1・2、第28図12・22・24・26・32、第29図11・12）があり、これは丹後から北陸の日本海沿岸の有段口縁に施文され、ある一定の時期を示す指標でもある。擬凹線文が施文されない無文のもの（第28図13～16）は口縁があまり長くならない。また若干長いもの（第27図11・12）は口縁が斜めに立ち上がるか、頸部にハケ調整が残るため甕とした



第27図 河川1出土土器実測図2 (縮尺1/4)



第28図 河川1出土土器実測図3 (縮尺1/4)

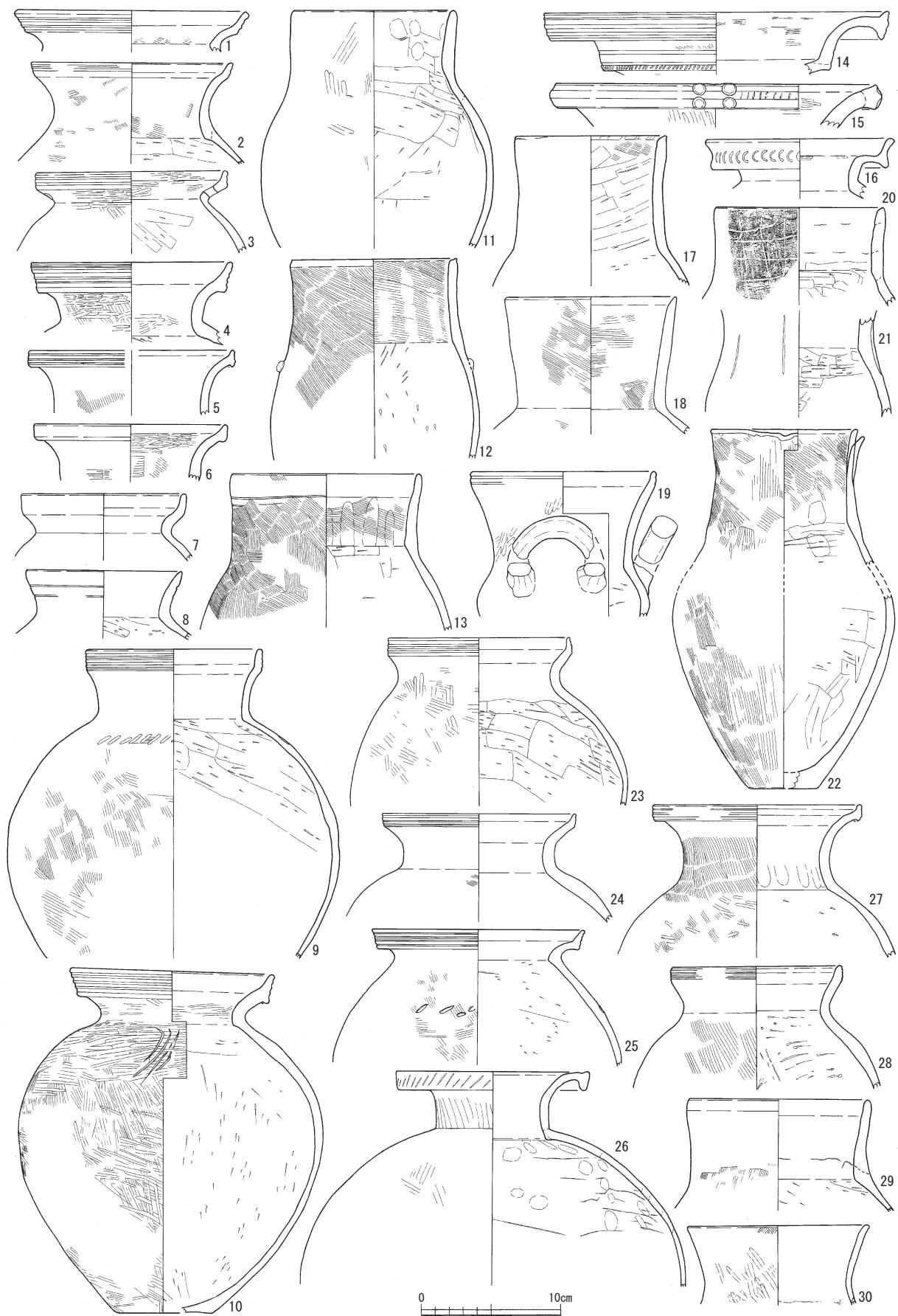


第29図 河川1出土土器実測図4（縮尺1/4）

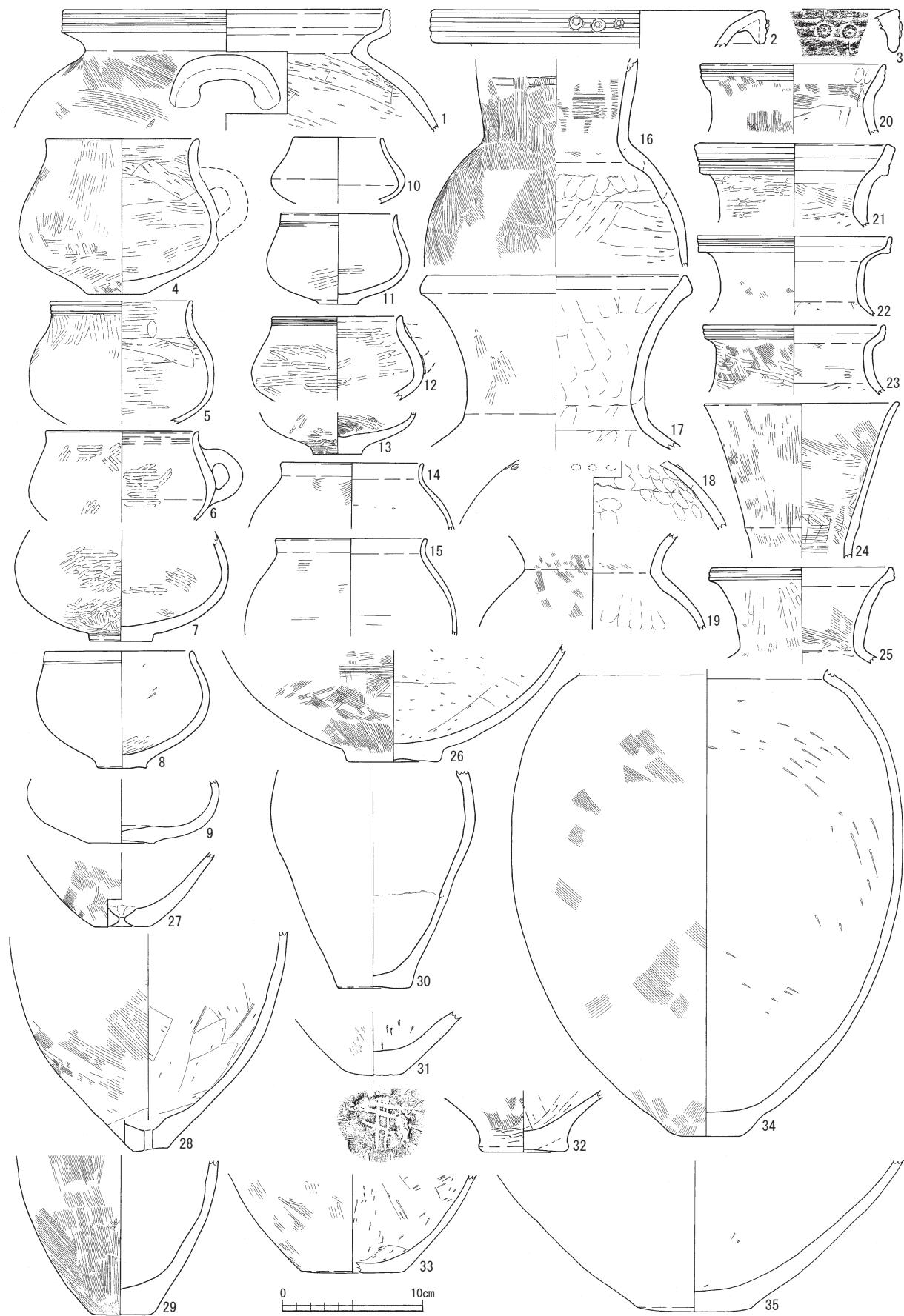
が、有段口縁の典型ではない立ち上がりに接合するもの（第27図10）などごく少数である。また脚台がつく、いわゆる台付甕は1点（第27図7）あるが、若狭では例外となる。口縁が内傾して立ち上がるもの（第27図9、第28図11）には、口縁が立ち上がる有段口縁とするより端部を上下に拡張したものと言え、胴部から頸部へ間延びしてから屈曲する。口径に対して胴部が大きく、主体となる有段口縁とは異なる。この土器については壺としてもできるが、甕で中期末に遡る可能性を指摘しておきたい。この2点のように、有段口縁でも口縁の拡張が小さいもの（第28図12～16）は、先に説明した多くの有段口縁とは形式上、若干時期的に先行する。

受口状口縁の甕は立ち上がった口縁の外側に施文するのが特徴で、櫛状工具で刺突列点文を加えるもの（第27図18・20～26・28・29）がほとんどで、竹管文を巡らすもの（第27図27）や、刺突列点文を羽状にするもの（第27図27）などは少ない。SD12から出土している受口状口縁の甕（第20図4）も、胴部上半の加飾が少ないが、ここでは比較的典型に近い。

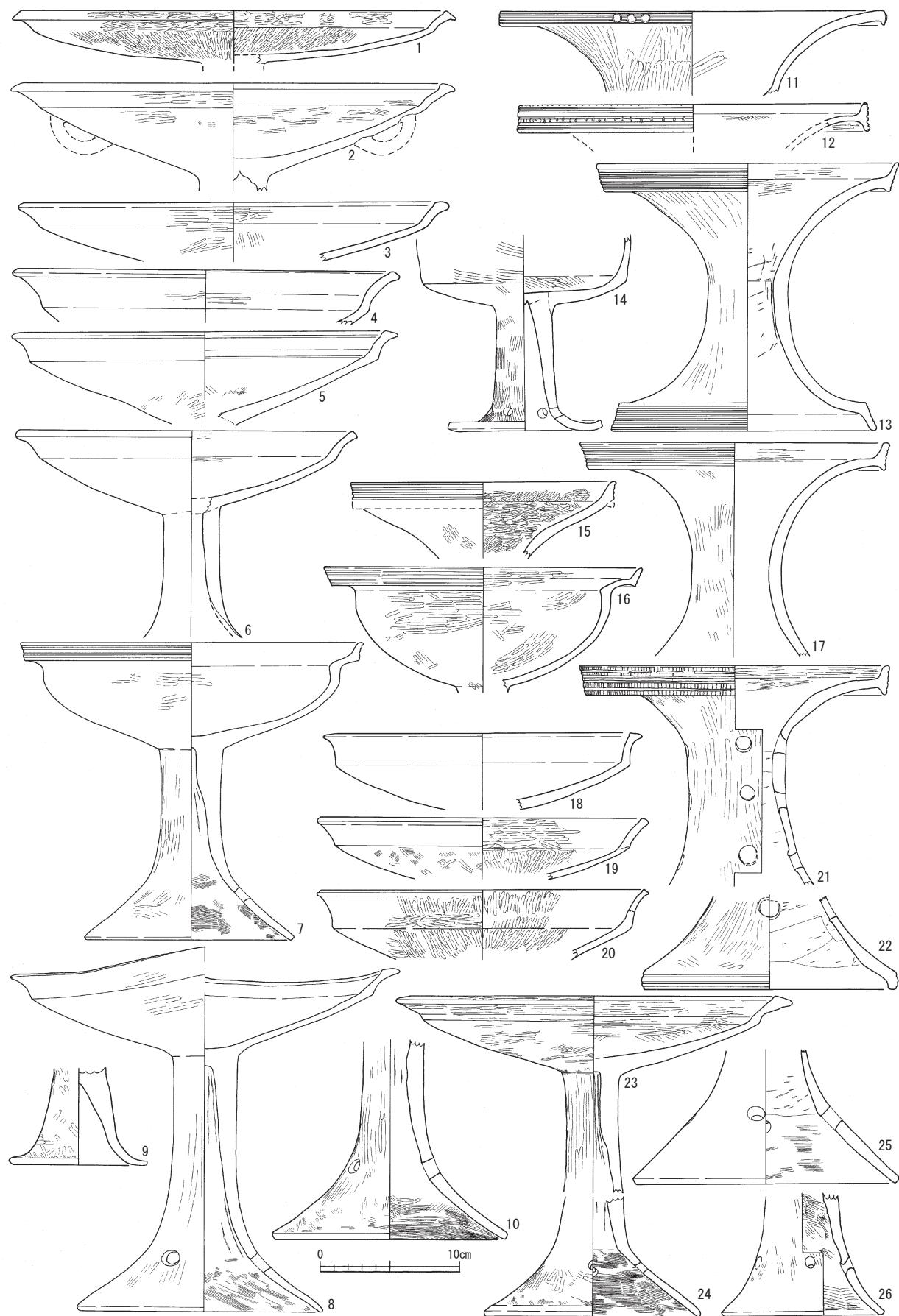
「く」の字甕の5点のうち1点は、口縁端部に1条の擬凹線文があるが、有段とはならず頸部は



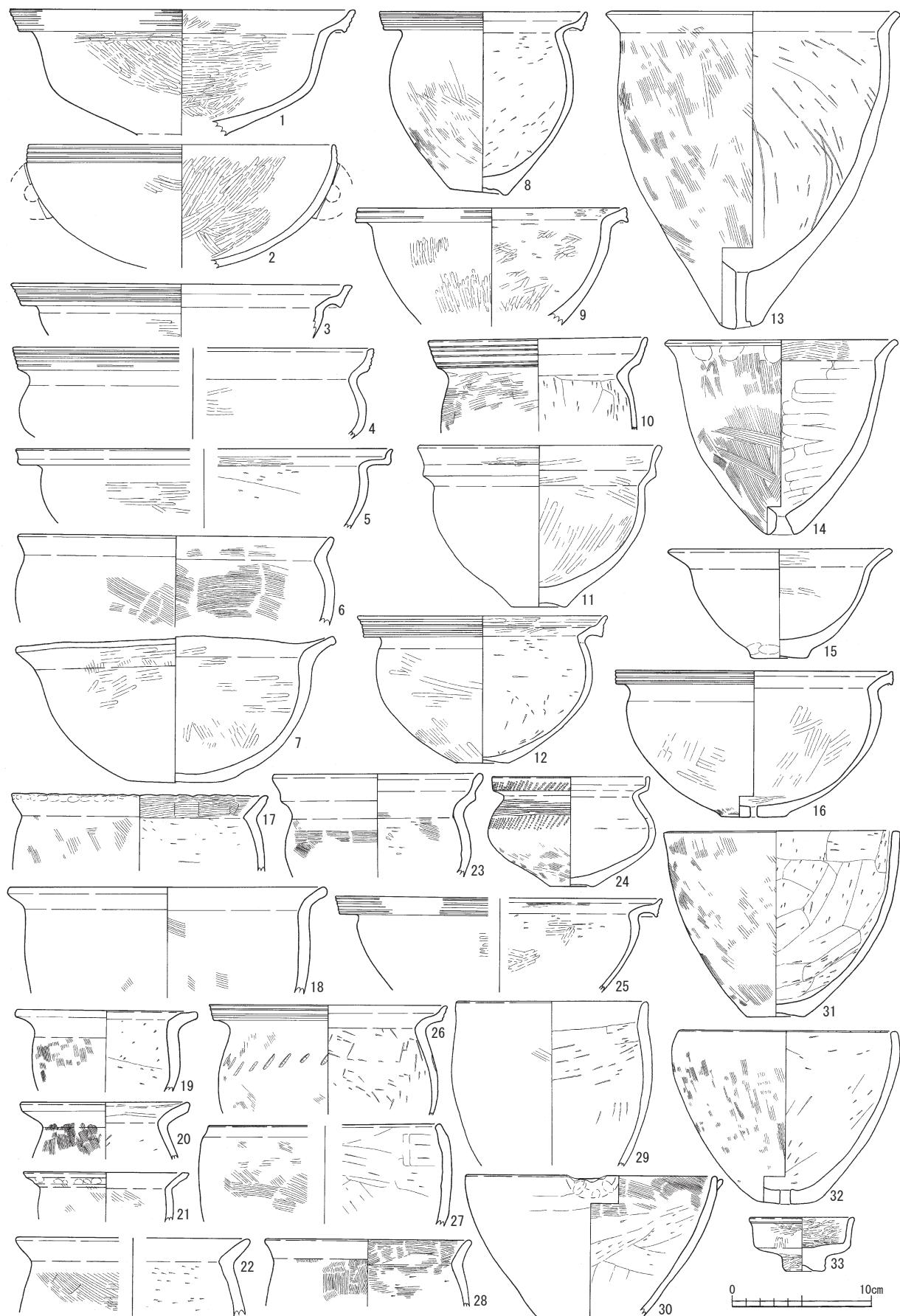
第30図 河川1出土土器実測図5 (縮尺1/4)



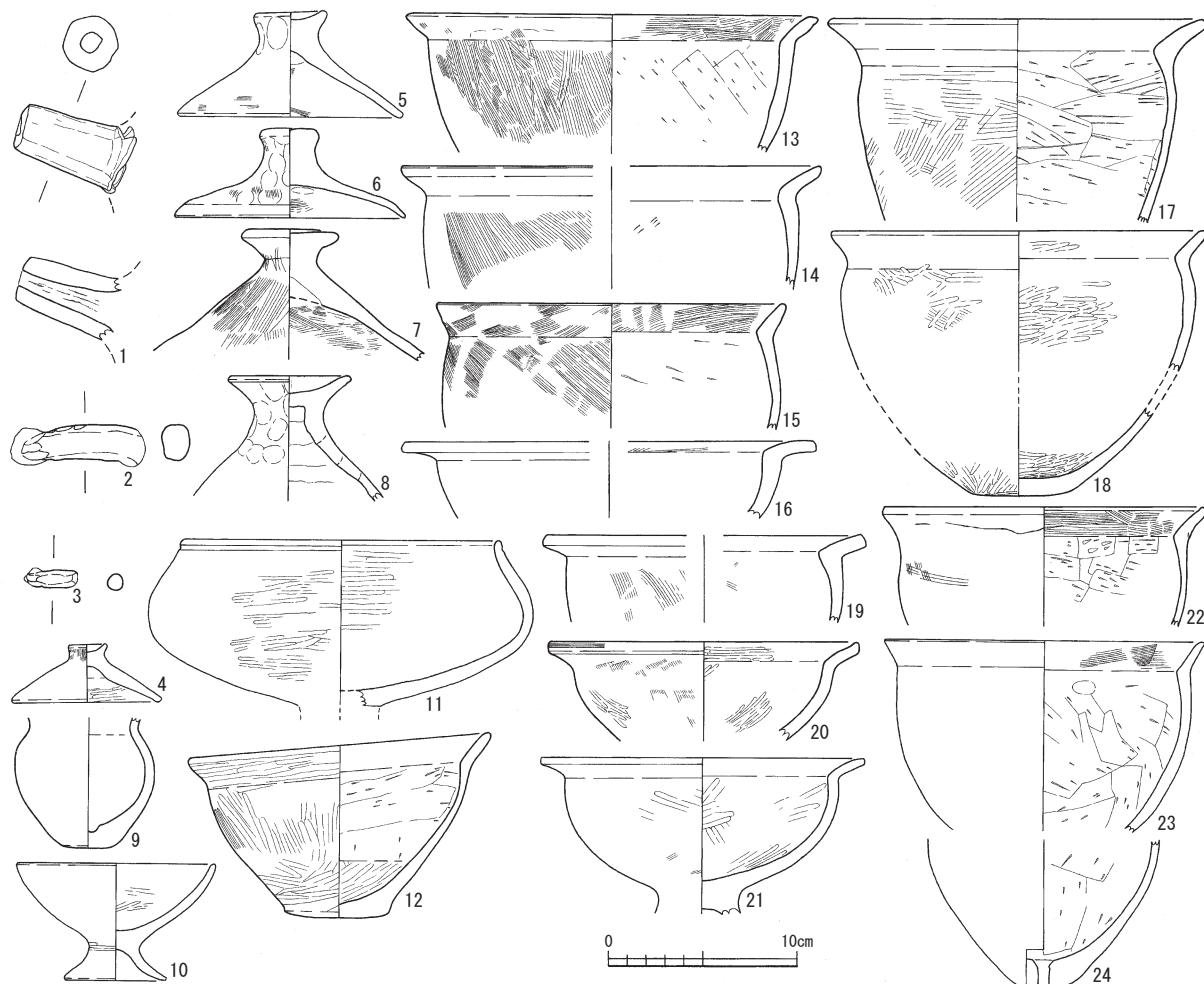
第31図 河川1出土土器実測図6（縮尺1/4）



第32図 河川1出土土器実測図7 (縮尺1/4)



第33図 河川1出土土器実測図8（縮尺1/4）



第34図 河川1出土土器実測図9（縮尺1/4）

「く」の字である（第28図3）。残りの4点（第28図1・2・4・5）は胴部の最大径が口縁と同じか、それより小さいもので、この後に述べる鉢に近いが、胴部が口径より長くなると想定されたため、ここでは甕とした。その口縁に越前の「く」の字甕によくある、指押さえを連続する。また外面タテハケの長胴に、内面ヨコハケの口縁部が外反するもの（第28図5）は、中期のものである可能性がある。

底部を欠く胴部のみ図化したのは、文様のある受口状口縁甕のもの（第27図19・31）2点だけである。二帶の櫛描直線文の間に刺突列点文を加える、受口状口縁の甕に典型的なものである。底部のみ、または底部を含む胴部下半のもののうち、1点は底部と胴部が接合していないが、胎土・色調から同一個体と判断した受口状口縁甕である。胴部の櫛描直線文の下に施文はないが、薄い底部を上げ底とする、近江に典型的なもの（第29図14）である。他のものは内面のケズリ調整や形状から有段口縁甕のもの（第29図12・13・15、第31図28・31・33～35）と考えられる。なかには焼成前に先行したもの（第29図15、第31図28）もあるが、有孔鉢より底部がやや大きかったり、胴部上半の形状からここでは甕の底部とした。

壺には有段口縁のものと、広口壺・長頸壺・直口・二重口縁の系譜になる可能性のある5種類に分類される。有段口縁の壺であるが、屈曲する頸部が伸びないで口縁となるもの（第30図3・25）は少ない。頸部がやや伸びるのは甕と同じく擬凹線文がある有文のもの（第30図1・2・4・5・9・23・24・27・28、第31図20～23）、無文のもの（第30図6～8、17・18）と最も多く、壺の中心となる。胴部

は復元されたものから推定してみると、立ち上がりのしっかりしたもの（例えば第30図4など）は、頸部が伸びずに球形に近い胴部（第30図10）となり、立ち上がりのあまいもの（例えば第30図1など）は、頸部が伸びて長胴気味の胴部（第30図9）になると考えられる。広口壺には頸部が長くなり口縁が垂下するもの（第31図2・3）と、口縁が垂下しないもの（第30図15）があるが、いずれも口縁に浮文の貼り付くものが多い。また、壺としては類例が見当たらず、装飾性の高い高坏の可能性があるもの（第30図14）もある。長頸壺は長胴から口縁がそのまま伸びるもので、頸部の屈曲が明瞭なもの（第30図18、第31図16）と、屈曲が不明瞭なもの（第30図11～13・17）に分けることができる。後者には口縁付近をヨコナデして不明瞭な段を作るもの（第30図12・13）がある。また井桁状の線刻があるもの（第30図20）や、胴部上半に横位の把手が付き水差しの壺となるもの（第30図19）も長頸壺の一種であろう。直口のものは2点あるが、長頸壺に近いもの（第30図18）と、頸部との境に小さな段を設けるもの（第31図24）と、それぞれ違うタイプである。二重口縁の系譜としたもの（第30図16）には半截竹管文が巡る。底部は突出する底部で球形の胴部のもの（第31図26）は広口か二重口縁の壺、細長い胴部の最大径が上となりそうなもの（第31図30）は中期の可能性がある。

高坏は大きな坏部から短く立ち上がる口縁端部に面を設けるもの（第32図1～6・8・23）と、口縁が直立気味に立ちあがる大型のもの（第32図18～20）、有段口縁で擬凹線文が巡るもの（第32図7・16）の3種類である。大型のものには坏部に環状の把手が付いていた痕跡を残すもの（第32図2）がある。高坏の脚は復元されたもの（第32図7・8）などからは、有段とならないラッパ状に「ハ」の字に開くもの（第32図23～25）である。「ハ」の字にまでは大きく開かないもの（第32図9・26）は、脚も小さく小型になるとされるが、どのような坏部となるかはわからない。また脚部から口縁部を欠く坏部までが図化できたもの（第32図14）は、どのような口縁となるかも不明である。

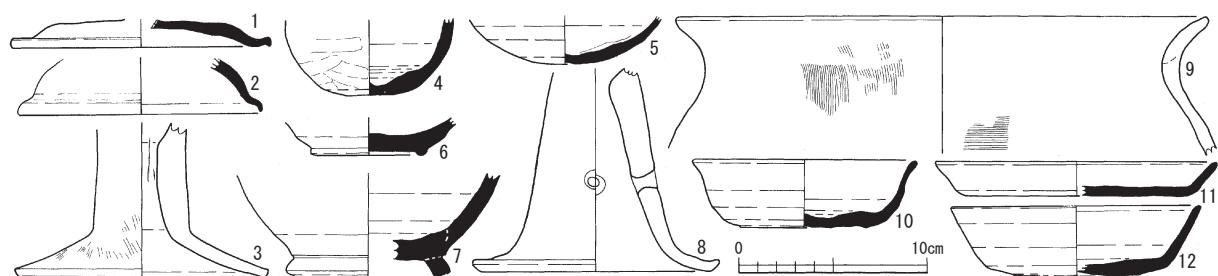
器台は広がる受け部口縁が有段となる（第32図15）か、上下に拡張して端面を作る（第32図12・13・17・21）の2種類で、いずれも擬凹線文を巡らす。擬凹線文の上に円形浮文を貼り付けるもの（第32図11）は、口縁を垂下させただけで、端面が狭い。これらの器台の脚部は有段になるもの（第32図13・22）しか確認できていない。

鉢は有段口縁、「く」の字口縁、直口口縁（単純口縁）に、本来は鉢とするよりも無頸の壺に分類されるべきものなど3種類がある。有段口縁の鉢は大型で口径が胴部の器高よりも明らかに大きいもの（第31図1、第33図1～5・25）と、中型で口径と器高が同じか大きいもの（第33図8～13・16・26）となる。前者には脚台が付いて高坏となるもの（第32図7）や、胴部に横位の把手が付くもの（第31図1）もある。また大型も中型も、擬凹線文のあるものが多いが、擬凹線文のない無文のもの（第33図5・11・17）も少數ある。口縁が有段となっていないもの（第33図2）は、口縁に擬凹線文があり、胴部に把手が付いていた痕跡があることから、有段口縁のものが変形したと考える。「く」の字口縁の鉢にも大型のものと中型のものがあり、前者は10点（第33図6・7・18、第34図13～17・18）とやや少なく、後者はいくつかバリエーションがあるようで点数が多い（第33図14・15・19～24、第34図12・19～23）。SP126から出土した鉢（第18図6）もこのタイプである。後者には有孔鉢となるもの（第33図15・16）がある。直口口縁のものは胴部から屈曲しないでそのまま口縁端部へと至る砲弾形のもの（第33図29～32）である。有孔鉢となるもの（第33図32）が基本であるが、下半部分のもの（第34図24）もあり明確にはできない。片口となるもの（第33図30）が1点ある。無頸壺と呼ぶべき鉢にも、その違いは微妙であるが、中型（第31図4～9・14・15）と小型（第31図10～13）の2種類がある。口縁部に数条の沈

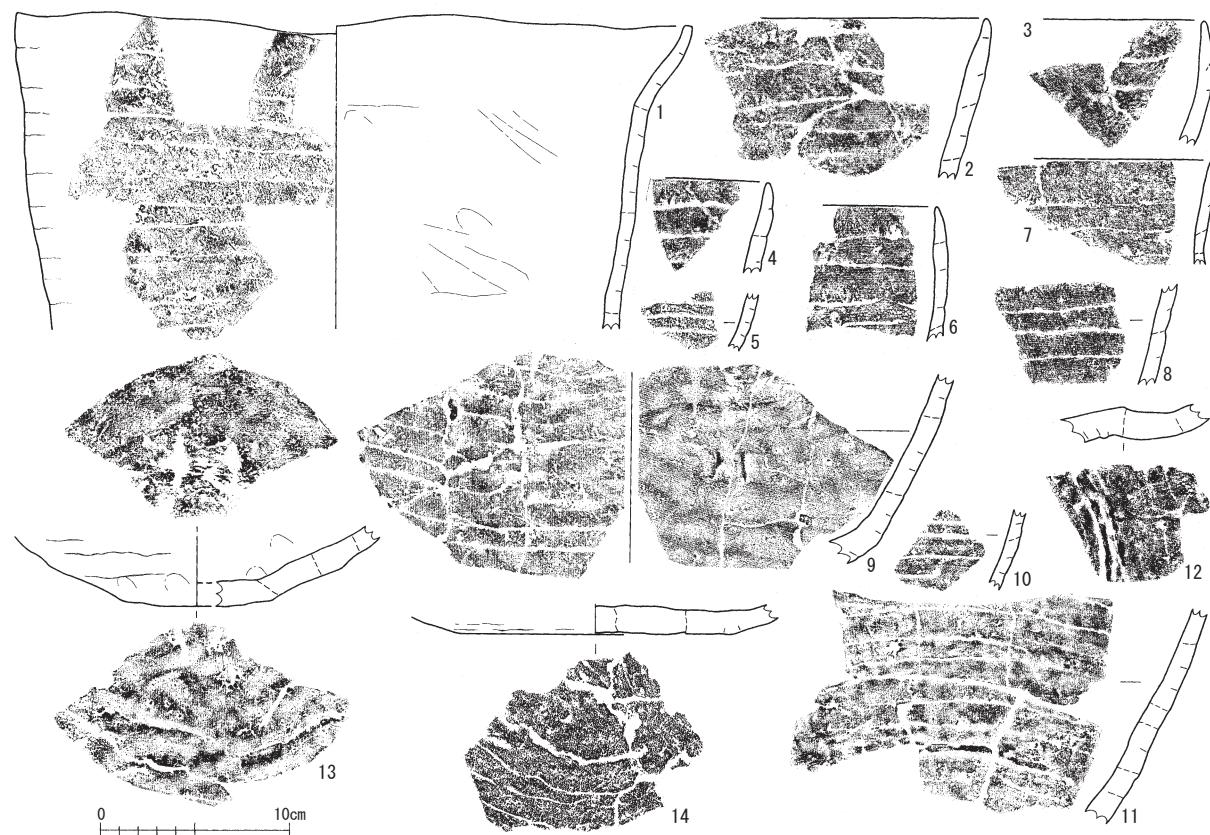
線を巡らせたり（第31図5・8・11・12）、把手を付けるもの（第31図4・6・12）はいずれにもある。前者には大型で脚が付く高壺と呼べるもの（第34図11）がある。鉢でも底部に焼成前に孔をあけるものが有段口縁（第33図16）、「く」の字口縁（第33図13・14）、直口口縁（第33図32）のそれぞれにあり、口縁だけでは有孔であるかは判断がつかないため、すべて鉢とした。このほかに受口状口縁の鉢（第33図24）が1点、内外面ともに丁寧なミガキで壺などの蓋である可能性があるものの（第33図33）もある。

蓋はハの字状に開く覆部に小さな摘部が付く1種類のみ図化できた。甕のものと考えられるもの（第34図5～8）と、壺のものと考えられる小型のもの（第34図4）である。

その他に小型の壺（第34図9）や非常に小型の台付鉢（第34図10）など、実用的ではないものもある。壺につくと考えられる注口（第34図1）や、鉢や壺に付く把手（第34図2・3）などは一部分であるが、この時期の時代と特徴を示すものである。



第35図 河川1・2出土土器実測図（縮尺1/4）



第36図 河川1・2出土製塙土器実測図（縮尺1/4）

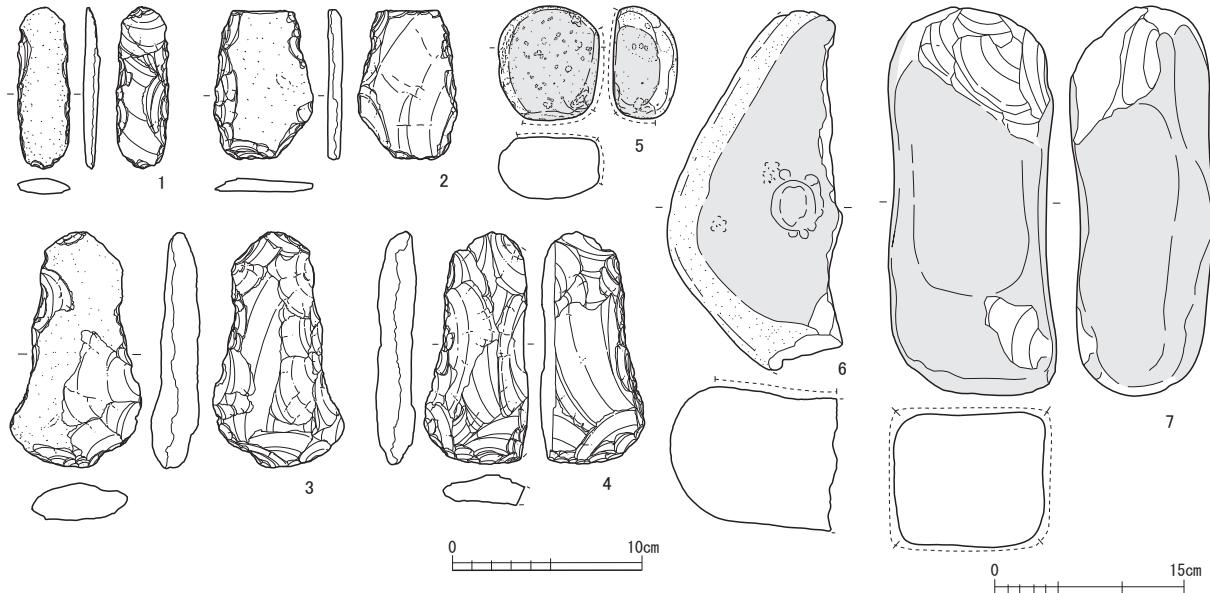
古墳時代以降の土器（第35・36図）

須恵器、土師器、そして製塙土器が出土している。須恵器には蓋（第35図1）、高台杯（第35図2）、無台坏（第35図10・12）、壺の高台部分（第35図7）、塊？の底部（第35図6）、皿（第35図11）、甌の底部（第35図4）などがある。SD26から出土した坏蓋（第21図8）も河道のものと同じである。土師器には甌の口縁部（第35図9）、鉢の口縁部（第35図5）、高坏の脚部（第35図3・8）の3点がある。高坏の脚部は、弥生土器である可能性も考えたが、色調や器形から古墳時代以降のものと判断した。

製塙土器は器形を明確に復元できたものはない。口縁部を中心に図化した。胴部から口縁部が若干開き、上半の器形がわかるもの（第36図1）もあるが、そのほかは端部のみである。口縁端部はいずれも内傾気味に終わるもの（第36図2～7）で、輪積みの幅などからも、浜瀬II式と呼ばれるものである。胴部については5点（第36図7～11）図化したが、底部付近まであるもの（第36図9）は1点のみである。底部は3点図化したが、大きな平底になるもの（第36図14）と丸底に近いもの（第36図12・13）がある。これら底部、または底部付近のものは、底部の形状と器壁の厚さから、従来の船岡式と呼ばれるものに近い。

石器（第37図）

1はスクレイパー類である。短冊形でヘラ状を呈す。2～4は打製石斧である。2は薄い板状の剥片を素材とし、周縁にのみ二次加工を施す。刃部には土擦れによるとみられる摩耗と線状痕が観察される。5は軽石製石製品で、研磨により平坦面を2面形成している。6は石皿、7は砥石である。



第37図 河川1出土石器実測図（縮尺1~4:1/4、6・7:1/6）

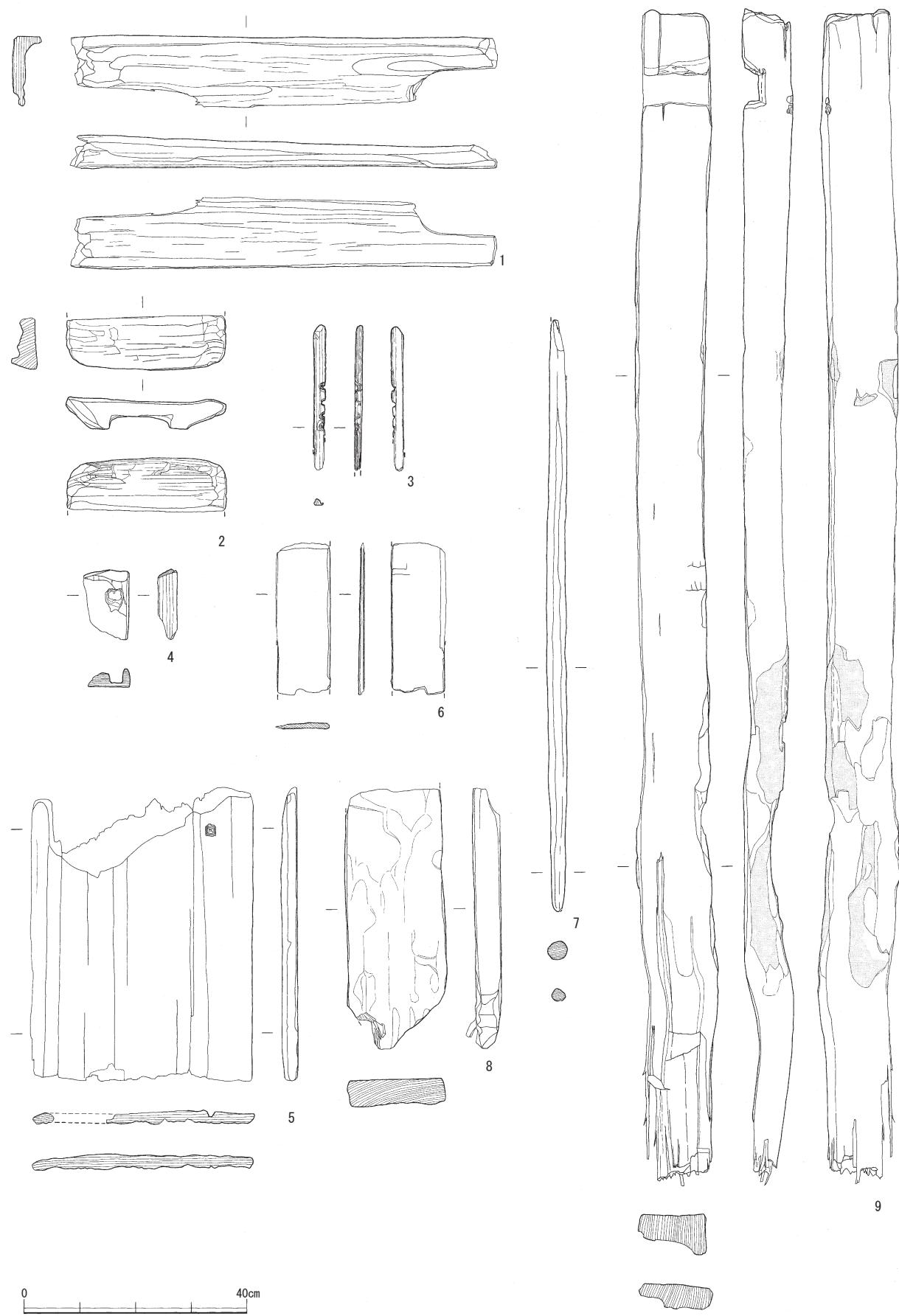
木製品（第38図）

容器（1・2） 1は方形の槽である。剖物で、底部は平坦である。2は平面が方形を呈する剖物の盤である。四脚の台脚をもつ。樹種はいずれもスギ。

発火具（3） 3は火鑽臼である。火鑽穴は4つみられる。樹種はスギ。

板状具（4～6） 4・5は板目取りの板材で、長方形の挟りを1箇所有する。6は柾目取りの板材である。4の樹種はスギ。

棒状具（7） 7は割り材を削り出した棒材である。



第38図 河川1出土木製品実測図（縮尺1/10）

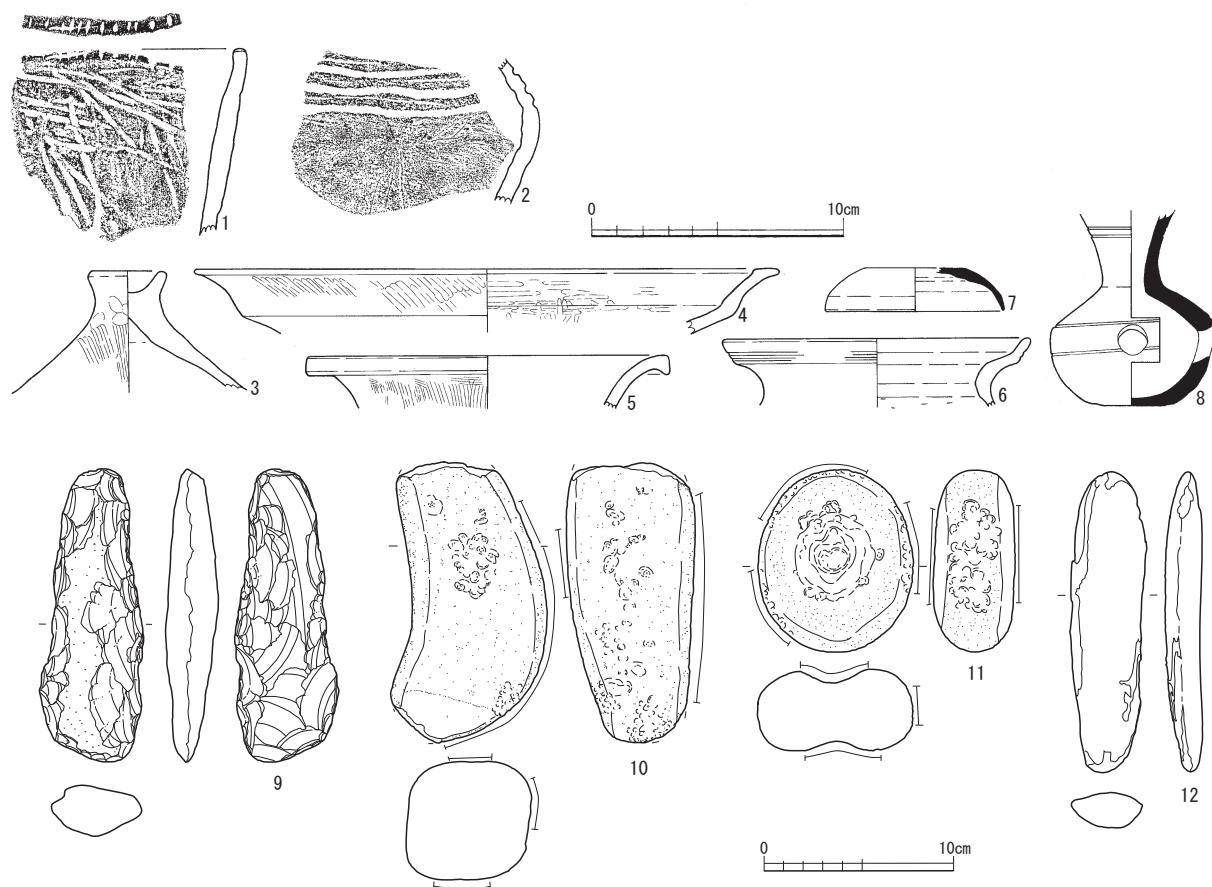
建築部材(8・9) 8は柱根または杭である。断面長方形の板状を呈し、基底部は二方向から斜めに切り取って尖らせてている。9は五平形の平梁で、欠き込み仕口をもつ。部分的に炭化が認められる。樹種はスギである。

第3節 遺構外出土遺物（第39図）

1・2は縄文土器である。1は条痕を施文する深鉢の口縁部。口縁端部には刻みが施される。2は鉢の体部で、幅3mm程の沈線が3条巡り、各沈線間に幅1mmに満たない細い沈線を配す。これらは河川1などから出土した土器と同様、晩期後葉に位置付けられよう。

弥生土器には河道から出土したものと同様な、蓋の摘み部(3)、高坏の口縁(4)、壺の口縁(5)、甕の口縁(6)の4点を図化した。4点とも弥生時代後期である。須恵器は坏蓋(7)と甕の胴部(8)の2点を図化した。2点とも7世紀代のものである。

9～12は石器・石製品である。9は短冊形の打製石斧。風化が著しい。10は敲石で、敲打痕は両主面と片側面に認められる。11は凹石で、両主面の中央部に大きく深い凹みを有す。周縁には敲打痕が認められる。12は石劍状の石製品。風化による表面の剥落が著しく、加工痕は明らかでない。



第39図 遺構外出土遺物実測図（縮尺1・2：1/3、3～12：1/4）

第2表 土器観察表

採団番号	グリッド	出土地	種別・器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率/12 口縁部 底部	調整・施文・施釉			色調	胎土	焼成	備考
								外面	内面	底部				
第 18 団 2		SP79	縄文土器	深鉢				ナデ・刻目突変	ナデ		10YR5/2 黄褐色	10YR5/2 灰黄褐色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	やや不良
第 18 団 6		SP126	弥生土器	甕	12.5		2.8	ナデ・摩滅	ハケ		5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良
第 21 団 4		SD12		甕	16.3		2.3	ナデ・刺突列点文・ハケ・ ハケのち刺突列点文	ナデ・ナデか		10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	良 外面ス付着
第 21 団 8		SD24	須恵器・蓋					回転ヘラ切りのちナデ・ 回転ナデ	回転ナデ		5Y7/1 灰白色	5Y7/1 灰白色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	やや不良
第 21 団 10	A11	SD49	縄文土器	深鉢				ナデ・刻目突変	ナデ		25Y7/2 灰黄色	25Y7/2 灰黄色	1~2mm程度の砂粒少量含む	良
第 26 団 1	C8	河 1 上層		深鉢	39.5		2.4	ナデ・刻目(刺突)突 帶	ナデ・指頭圧痕		10YR6/3 にぶい黄褐色	10YR6/3 にぶい黄褐色	1~2mm程度の砂粒多量含む	良
第 26 団 2	C10	河 1 トレンチ		深鉢				ケズリのちナデ・刻目 (刺突)突帶	ケズリ		10YR5/2 灰黄褐色	10YR4/2 灰黄褐色	1~2mm程度の砂粒多量含む	良
第 26 団 3	C10	河 1 下層		深鉢				条痕・刻目突変	ナデ		10YR5/2 灰黄褐色	10YR4/1 褐灰色	1mm以下の砂粒多量含む	良
第 26 団 4	C11	河 1 下層		深鉢				ナデ・刻目(刺突)突 帶	ナデ		10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	2mm以下の砂粒中量含む	良
第 26 団 5	C11	河 1 下層		深鉢				刻目(刺突)突帶	ナデ		10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR4/2 灰黄褐色	1mm以下の砂粒中量含む ナデの右	良 刻目は竹管状の刺突列
第 26 団 6		河 1 最下層		深鉢				ナデ・刻目突変	ナデ		25Y6/3 にぶい黄色	25Y6/3 にぶい黄色	4mm程度の小石含む	良 外面ス付着
第 26 団 7	C11	河 1 最下層		深鉢				条痕	条痕		10YR6/3 にぶい黄褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	2mm程度の石英含む ナデの左	良 内外面ス付着
第 26 団 8	B11	河 1 最下層		深鉢				条痕	条痕・ナデ		10YR7/3 にぶい黄褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	2~4mmの石英含む ナデの右	良
第 26 団 9	B11	河 1 最下層		深鉢				条痕	ナデ		25Y6/3 にぶい黄色	25Y6/3 にぶい黄色	2mm程度の小石含む	良
第 26 団 10	C8	河 1		深鉢				条痕のちナデ	ナデ		25Y4/1 灰灰色	25Y6/2 灰黄色	1~2mm程度の砂粒中量含む	良 外面ス付着
第 27 団 1	C13	河 1 土器集中区 ベルト 2	縦凹線	甕	18.3		1.2	ナデ・縦凹線(4)・ハケ・ ハケのち刺突列点文	ナデ・ケズリ		7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良 外面ス付着
第 27 団 2	C13	河 1 土器集中区		甕	19.8		2	ナデ・縦凹線(3)・ハケ・ 刺突列点文	ナデ・ケズリ		5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良
第 27 団 3	C13	河 1 土器集中区		甕	21.7		6.2	擬凹線(4)・ハケのち ナデ	ナデ・ケズリ		5YR6/4 にぶい橙色	10YR6/3 にぶい黄褐色	1~3mm程度の砂粒を多量含む	良 外面ス付着
第 27 団 4	C12	河 1		甕	21.4		1.8	擬凹線(3)・ナデ・ハ ケ	ナデ・ケズリ		7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良 外面ス付着
第 27 団 5	C13	河 1 土器集中区		甕	22.8		2.5	ナデ・擬凹線(7)・ハ ケ	ナデ・ケズリ		10YR7/3 にぶい黄褐色	10YR7/3 にぶい黄褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良
第 27 団 6	C13	河 1 土器集中区		甕	21.9		4	ナデ・擬凹線(7)・ハ ケ	ナデ・ハケ・ケ ズリ		10YR5/3 にぶい黄褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良 外面ス付着
第 27 团 7	C13	河 1 土器集中区		甕	17		7.8	擬凹線(5)・ナデ・ハ ケ	ナデ・ケズリ		10YR7/2 にぶい黄褐色	7.5YR8/4 浅黄褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良
第 27 团 8	C13	河 1 土器集中区		甕	18.1		2.4	ナデ・擬凹線(4)・ハ ケ	ナデ・ケズリ		7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良 外面ス付着
第 27 团 9	C11	河 1 下層		甕	16		9	ナデ・擬凹線(4)・ハ ケ	ナデ・ハケ・ケ ズリ		7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良 外面ス付着
第 27 团 10	C11	河 1 下層		甕	19.2		2.3	ナデ・ハケ	ナデ		10YR6/3 にぶい黄褐色	10YR6/3 にぶい黄褐色	1mm以下の砂粒を微量含む ナデの左	良
第 27 团 11	C13	河 1 土器集中区		甕	16.7		2.6	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		7.5YR7/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良 外面ス付着
第 27 团 12	C13	河 1 下層		甕	14.7		1.6	摩滅・ナデ	ナデ・ケズリ		10YR6/3 にぶい黄褐色	10YR7/3 にぶい黄褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良 外面ス付着
第 27 团 13	C13	河 1 土器集中区		甕	15.5		10.8	ナデ	ナデ・ケズリ		7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR7/6 橙色	1~3mm程度の砂粒を多量含む	良 外面ス付着
第 27 团 14	C10・C11	河 1 最下層		甕	15.7		2.9	ナデ・ハケ	ナデ・ハケのち ナデ・ハケ		10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	1mm以下の砂粒多量含む	良
第 27 团 15	C13	河 1 土器集中区		甕	15.9		3.1	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良 外面ス付着
第 27 团 16	C13	河 1 土器集中区		甕	17		1.4	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ・ケ ズリ		5YR6/4 にぶい橙色	10YR6/3 にぶい橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良 外面ス付着
第 27 团 17	C9	河 1 下層・ベルト 1		甕	17		8.1	ナデ・刻み・ハケ・直 線文(2)	ナデ・ハケ・指 頭圧痕		5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	良 外面ス付着
第 27 团 18	C11	河 1 最下層		甕	16		2.1	ナデ・刺突列点文・ハケ・ 摩滅・直線文(2)	ナデ・ハケ		10YR8/4 浅黄褐色	2.5Y7/2 灰黄色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良
第 27 团 19	C11	河 1 下層		甕				ハケ・ハケのち横 直線文(2)・ハケのち刺 突列点文・ハケのち横 直線文(7)・ハケの ち横直線波状文(5)	ハケのちナデ・ ハケ		10YR7/2 にぶい黄褐色	2.5Y7/2 灰黄色	1~2mm程度の砂粒を多量含む ナデの左	良 外面ス付着
第 27 团 20		河 1A 下層	弥生土器	甕	12.9	4.2	16.4	ナデ・刻み・ハケ・横 直線文(6)・(7)・ ハケのち刺突列点文・ ハケのち横直線波状文 (5)・ハケのちミギカ	ナデ・摩滅・ハ ケ		7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR7/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良 外面ス付着
第 27 团 21	C9	河 1 下層		甕	13		4.5	ナデ・刻み・ハケ	ナデ・ハケ		2.5Y8/3 赤褐色	10YR7/3 にぶい橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良 外面ス付着
第 27 団 22	D7	河 1 上層		甕	14		2.5	刺突列点文・ハケ・ ハケのち横直線波状文 (5)	ナデ・ハケ		5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良 外面ス付着
第 27 团 23	C11	河 1 最下層		甕	15		3.1	ナデ・刺突列点文・ハ ケ	ナデ		2.5Y7/2 灰褐色	10YR7/3 にぶい橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良 内外画ス付着
第 27 团 24	C11	河 1 下層		甕	21.6		2.4	ナデ・刺突列点文・ハ ケ・(ナデのち横直線 波状文(5)・ハケの ち横直線波状文(5))	ナデ・ハケ		7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良
第 27 团 25	C10	河 1 トレンチ		甕	20.9		2.1	ナデ・ハケ・刺突列点文・直 線文(1)	ナデ		10YR7/3 にぶい黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良
第 27 团 26	C10・C11	河 1 最下層		甕	16.8		2	ナデ・(ナデのち横直 線波状文(5)・ハ ケのち横直線波状文 (5))	ナデ・ハケ・ 指頭圧痕		10YR7/3 にぶい黄褐色	10YR7/3 にぶい黄褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む ナデの左	良
第 27 団 27	C12	河 1		甕	16.9		5.8	ナデ・刺突列点文・ハ ケ・(ナデのち横直線 波状文(5)・ハ ケのち横直線波状文 (5))	ナデ・ハケ		7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	1~3mm程度の砂粒を少量含む	良 外面ス付着
第 27 団 28	B10・C10	河 1B 下層・トレンチ最下層		甕	18.2		1.3	ナデ・刺突列点文・ハ ケ・(ナデのち横直線 波状文(6)・ハ ケのち刺突列点文・ハ ケ)	ナデ・指頭圧痕		10YR8/4 浅黄褐色	10YR7/2 にぶい黄褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良
第 27 团 29	C9	河 1 下層		甕	15.2		3	ナデ・刺突列点文・ハ ケ・(ナデのち横直線 波状文(8)・ハ ケのち刺突列点文・ハ ケ)	ナデ・ハケ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR7/2 にぶい黄褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む ナデの左	良 外面ス付着
第 27 团 30	C9	河 1 下層		甕	17.6		2.2	ナデ・刺突列点文・刻 み・(ナデのちナ デ)	ナデ		10YR7/3 にぶい黄褐色	10YR7/3 にぶい黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む ナデの左	良
第 27 团 31	C13	河 1 土器集中区		甕				ハケ・(ナデのち横直 線波状文(4)・ハ ケのち刺突列点文・ハ ケ)	ハケ・ナデ		7.5YR8/4 浅黄褐色	10YR7/3 にぶい黄褐色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良
第 28 団 1	C13	河 1 土器集中区		甕	20.7		3.6	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	良
第 28 団 2	C13	河 1 土器集中区		甕	17.8		9.1	ナデ・ハケのちナデ・指 頭圧痕	ナデ		7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR6/6 橙色	1mm以下の砂粒を微量含む	良 外面黒斑あり
第 28 団 3	C11	河 1 下層		甕	18.1		2.0	沈線(1)・ナデ・ハ ケ	ナデ・ケズリ		7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR6/6 橙色	1mm以下の砂粒を微量含む	良
第 28 団 4	C14	河 1		甕	19.0		1.8	ナデ・ハケ	ナデ・ナデ		10YR7/3 にぶい黄褐色	10YR7/3 にぶい黄褐色	1~3mm程度の砂粒を少量含む	良
第 28 団 5	C13	河 1 土器集中区		甕	17.0		3.8	ナデ・ハケ・摩滅	ナデ・ナデ		10YR7/4 にぶい黄褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	1mm以下の砂粒を少量含む	良 内面黒斑あり
第 28 団 6	D7	河 1 下層		甕	14.2		3.7	擬凹線(2)・ナデ・ハ ケ	ナデ・ケズリ		2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y7/2 灰黄色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良 外面ス付着

第3章 遺構と遺物

探査番号	グリッド	出土地	種別・器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率/12 口縁部 底部	調整・施文・施袖			色調		胎土	焼成	備考
								外面	内面	底部	外面	内面			
第 28 図 7	C9	河1下層	甕	15.0		2.2	擬四線(2)・ナデ・ハケ ズリ	ナデ・摩滅・ケ ズリ	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	1~3mm程度の砂粒を多量含む	良			
第 28 図 8	C13	河1土器集中区		14.0		1.5	ナデ・擬四線(3)・ハケ	ナデ・ケズリ	10YR7/4 にぶい黃橙色	10YR7/4 にぶい黃橙色	1mm以下の砂粒を少量含む	良			
第 28 図 9	C13	河1土器集中区		14.2		12.0	ナデ・擬四線(4)・ハケ	ナデ・ケズリ	5YR6/8 橙色	5YR7/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	やや 不良	外表面ス付着		
第 28 図 10	C13	河1ベルト2上層		17.3		0.8	擬四線(5)・カ・ナデ・ ハケ	ナデ・ケズリ	10YR6/2 灰黃褐色	10YR6/3 にぶい黃橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 11	C9	河1~B11-1・ベ ルト2		14.4		3.5	ナデ・擬四線(2)・ハケ ズリ	ナデ・ハケ・ハ ケのち剥離斑 痕・ケズリ	7.5YR6/4 にぶい黃橙色	10YR6/3 にぶい黃橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む 妻母を微量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 12	D7	モリ土・河1トレ ンチ		17.0		5.8	ナデ・擬四線(2)・摩滅・ ハケ・ハケのち剥離 斑・ケズリ	ナデ・ケズリ	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 13	C11	河1下層		16.8		2.2	擬四線(2)・カ・ナデ・ ハケ・摩滅	ナデ・摩滅	10YR7/4 にぶい黃橙色	5YR6/6 橙色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 14	C13	河1土器集中区		19.8		4.0	擬四線(2)・ナデ・摩滅	ナデ・ケズリ	7.5YR6/4 にぶい黃橙色	7.5YR6/4 にぶい黃橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 15	B9・B11	河1上層・下層		23.0		4.0	ナデ・擬四線(3)・ハケ・ ハケのち剥離突列点文・ 摩滅	ナデ・ケズリ	5YR6/6 橙色	5YR7/6 橙色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 16	C12	河1		14.5		2.9	ナデ・擬四線(2)・ハケ	ナデ・ハケ・指 頭丘痕・ケズリ	10YR7/4 にぶい黃橙色	10YR6/4 にぶい黃橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む 妻母を微量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 17	B10	河1上層・下層		18.0		5.5	ナデ・擬四線(3)・ハケ	ナデ・ケズリ	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 18	C13	河1土器集中区		17.8		2.4	擬四線(4)・ナデ	ナデ・ケズリ	7.5YR7/4 にぶい黃橙色	7.5YR6/4 にぶい黃橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 19	C10	河1・1B下層		17.0		3.4	擬四線(2)・ナデ・ハケ ズリ	ナデ・ハケ・ケ ズリ	5YR6/6 橙色	10YR6/2 灰黃褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 20	C10	河1B		16.9		2.9	擬四線(4)・ハケ	ナデ・ケズリ	7.5YR5/4 にぶい褐色	5YR6/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 21	C12	河1		15.6		3.2	ナデ・擬四線(6)・カ・ ハケ	ナデ・ケズリ	5YR6/6 橙色	2.5YR6/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む 5mm以上の小石を2石含む	良			
第 28 図 22	C13	河1土器集中区		17.7		5.1	ナデ・擬四線(3)・ハケ・ 刺突列点文	ナデ・ケズリ	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 23	C8	河1下層		18.0		3.8	擬四線(4)・ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	10YR7/4 にぶい黃橙色	10YR7/4 にぶい黃橙色	1mm以下の砂粒を多量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 24	C13	河1土器集中区		17.7		2.2	ナデ・擬四線(2)・ハケ・ 摩滅・ハケのち剥離突 列点文	ナデ・ケズリ	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 25	C13	河1土器集中区		18.3		6.6	ナデ・擬四線(4)・ハケ	ナデ・ケズリ	10YR7/3 にぶい黃橙色	10YR7/4 にぶい黃橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 26	C13	河1土器集中区		17.2		1.2	ナデ・擬四線(3)・ハケ・ 摩滅・ハケのち剥離突 列点文	ナデ・摩滅	7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 にぶい褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 27	C10	河1B		17.4		3.9	擬四線(3)・ハケ	ナデ・ケズリ	10YR6/3 にぶい黃橙色	10YR6/3 にぶい黃橙色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 28	B11	河1下層		18.0		0.6	擬四線(3)・ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	7.5YR6/6 橙色	10YR6/4 にぶい黃橙色	1mm程度の砂粒を多量含む 妻母を微量含む	良			
第 28 図 29	C13	河1土器集中区		16.8		0.8	ナデ・擬四線(3)・ハケ	ナデ・ケズリ	10YR7/4 にぶい黃橙色	10YR7/3 にぶい黃橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 30	C13	河1土器集中区		18.5		12.0	ナデ・擬四線(6)・ハケ	ナデ・ケズリ	10YR7/3 にぶい黃橙色	10YR7/4 にぶい黃橙色	1mm以下の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 31	C13	河1土器集中区		15.7		4.8	擬四線(4)・ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	7.5YR5/4 にぶい褐色	10YR6/4 にぶい黃橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良	外表面ス付着		
第 28 図 32	C13	河1土器集中区		16.8		5.6	ナデ・擬四線(4)・ハケ・ ハケのち剥離突列点文	ナデ・ケズリ	5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	1~3mm程度の砂粒を多量含む	良	外表面ス付着		
第 29 図 1	C13	河1土器集中区	甕	16.1		10.7	ナデ・擬四線(4)・ハケ	ナデ・ケズリ	7.5YR7/4 にぶい褐色	7.5YR7/4 にぶい褐色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良			
第 29 図 2	C13	河1土器集中区		16.7		2.9	ナデ・擬四線(3)	ナデ・ケズリ	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良			
第 29 図 3	C11	河1最下層		17.8		2.1	ナデ・擬四線(4)・ハケ	ナデ・ケズリ	5YR7/6 橙色	5YR6/6 橙色	1mm母を少量含む	良	外表面ス付着		
第 29 図 4	C11	河1イコウ面		14.7		2.2	ナデ・擬四線(4)	ナデ	10YR7/4 にぶい黃橙色	10YR6/3 にぶい黃橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良	外表面ス付着		
第 29 図 5	C13	河1土器集中区		21.6		1.5	ナデ・擬四線(3)	ナデ	10YR8/3 浅い黃橙色	10YR7/3 にぶい黃橙色	1mm程度の砂粒を微量含む	良			
第 29 図 6	C13	河1土器集中区		16.8		2.0	ナデ・擬四線(4)・ハケ	ナデ・ケズリ	10YR6/3 にぶい黃橙色	7.5YR7/3 にぶい黃橙色	1mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第 29 図 7	C13	河1土器集中区		14.8		2.8	ナデ・擬四線(3)	ナデ・ケズリ	10YR7/4 にぶい黃橙色	10YR7/3 にぶい黃橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第 29 図 8	C11	河1最下層		17.8		3.4	擬四線(4)・ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第 29 図 9	C13	河1土器集中区		17.8		3.8	ナデ・擬四線(3)・摩滅	ナデ・ケズリ	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第 29 図 10	C13	河1土器集中区		17.8		2.1	擬四線(5)・ナデ	ナデ・ケズリ	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第 29 図 11	C13	河1土器集中区		22.9		8.0	ナデ・刻み・ハケ	ナデ・ハケ	7.5YR8/4 浅い黃橙色	10YR7/4 にぶい黃橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第 29 図 12	C13	河1土器集中区		19.0	4.5	25.0	擬四線(3)・ナデ・ハケ・ 刻み	ナデ・ケズリ	10YR6/3 にぶい黃橙色	7.5YR7/6 橙色	1mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第 29 図 13	C13	河1土器集中区		5.5		6.0	ハケ	ハケ	10YR7/4 にぶい黃橙色	5YR6/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む 妻母を微量含む	良	外表面ス付着		
第 29 図 14	C10+C11	河1最下層		4.7		12.0	擬四線(6)・ハケ・ 鈴接液状文(8)	ナデ・ケズリ	7.5YR6/3 にぶい褐色	5YR6/3 にぶい褐色	1mm程度の砂粒を中量含む	良	内面ス付着		
第 29 図 15	C13	河1土器集中区		5.0		12.0	ナデ	ケズリ	10YR8/4 浅黃褐色	2.5YV6/2 灰黃褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む 妻母を微量含む	良	底部最大6.0cmの横円 形		
第 30 国 1	C13	河1土器集中区		16.6		4.2	ナデ・擬四線(3)	ナデ・ハケ・ケ ズリ	7.5YR5/4 にぶい褐色	10YR6/4 にぶい黃橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第 30 国 2	C13	河1土器集中区		14.4		2.9	擬四線(2)・ハケのちミ ガキ	ナデ・ハケ・ケ ズリ	7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	1~3mm程度の砂粒を多量含む	良			
第 30 国 3	B11+C11	河1下層		13.7		10.5	擬四線(2)・ミガキ・摩 滅	ミガキ・ケズリ	7.5YR5/4 にぶい褐色	5YR5/6 明赤褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	孔(2)		
第 30 国 4	C13	河1土器集中区		14.4		5.9	擬四線(5)・ミガキ	ナデ・ハケのち ミガキ・ケズリ	10YR7/3 にぶい黃橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良			
第 30 国 5	C13	河1土器集中区		14.6		3.4	ナデ・擬四線(3)・ハケ	ナデ	10YR7/3 にぶい黃橙色	5YR6/6 橙色	1mm以下程度の砂粒を少量含む 妻母を中量含む	良			
第 30 国 6	C13	河1土器集中区		13.8		1.8	ナデ・ハケ	ナデ・ミガキ・ ハケ	10YR7/3 にぶい黃橙色	10YR7/3 にぶい黃橙色	1mm以下の砂粒を少量含む 妻母を中量含む	良			
第 30 国 7	C14	河1		11.7		10.1	ナデ・摩滅	ナデ・摩滅	10YR7/4 にぶい黃橙色	10YR7/4 にぶい黃橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良			
第 30 国 8	C2	河1		11.1		3.9	ナデ・沈線(2)	ハケのちナデ・ ケズリ	10YR8/4 淡黃褐色	10YR8/4 淡黃褐色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	良			
第 30 国 9	C13	河1		12.3		6.2	ナデ・擬四線(4)・ハケ のち剥離点文・ハケ	ナデ・ケズリ	2.5Y7/3 淡黃色	10YR6/3 にぶい黃橙色	1~3mm程度の砂粒を中量含む 妻母を微量含む	良	列点文は1/4~1/6の み		
第 30 国 10	C13	河1土器集中区		14.3	7.0	24.75	ナデ・擬四線(4)・ハケ のちミガキ	ナデ・ハケ・ケ ズリ	7.5YR6/4 にぶい褐色	7.5YR7/4 にぶい褐色	1mm程度の砂粒を少量含む	良			
第 30 国 11	C13	河1土器集中区		11.5		7.6	ナデ・ミガキ・摩滅	ナデ・指頭丘 痕・ケズリ	7.5YR7/6 橙色	10YR6/4 にぶい黃橙色	1mm以下の砂粒を少量含む	良			
第 30 国 12	C13	河1土器集中区		11.8		9.0	ナデ・ハケ	ハケ・ケズリ	7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/4 にぶい褐色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	良	円形容文1対		
第 30 国 13	C11	河1下層		13.4		12.0	ナデ・擬四線(4)・指 頭丘痕・ハケ・刺突列点文	ナデ・ハケ・ケ ズリ	10YR6/3 にぶい褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	外表面ス付着		
第 30 国 14	C10	河1下層		24.8		1.7	ナデ・擬四線(4)・指 頭丘痕・ハケ・刺突列点文	ナデ・ハケのち ナデ・ケズリ	10YR6/3 にぶい褐色	2.5Y5/1 黄灰色	1~2mm程度の砂粒を少量含む 妻母を中量含む 2~3mmの孔あり	良	外表面赤彩		
第 30 国 15	C9	河1下層		23.0		1.5	押圧・ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR6/4 にぶい褐色	10YR6/4 にぶい褐色	1~2mm程度の砂粒を少量含む 妻母を少量含む	良			
第 30 国 16	C11	河1下層		13.3		4.8	ナデ・半裁骨管文	ナデ・ミガキ・ 摩滅	7.5YR7/4 にぶい褐色	7.5YR7/4 にぶい褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		

押岡番号	グリッド	出土地	種別・器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率/12 口縁部 底部	調整・施文・施袖			色調		胎土	焼成	備考		
								外面	内面	底部	外面	内面					
第30回17	C13	河1土器集中区		壺	10.8		4.8	ナデ・ハケのちナデ	ハケのちケズリ・ケズリ		7.5YR7/6 橙色	5YR6/6 橙色	1mm以下の砂粒を中量含む	良			
第30回18	C8	河1上層		壺	12.2		1.7	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ		2.5Y6/3 にぶい黄色	10YR6/4 にぶい黄橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良	内面黒斑あり		
第30回19	D14	河1		壺	13.2		2.2	摩滅・擬四線(2)・ミガキ	摩滅・ケズリ		5YR6/6 橙色	5YR5/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良			
第30回20	C11	河1下層		壺	12.0		4.0	ペラ描き・ナデ	ナデ・ケズリ		5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	1mm以下の砂粒を微量含む	良			
第30回21	C12	河1		壺				摩滅	ナデ・ケズリ		10YR7/6 明黄褐色	2.5Y6/2 灰黄色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着 垂線あり		
第30回22	C13	河1土器集中区		壺	10.3	5.0	6.0	11.0	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ・指頭痕・ケズリ	ハケ	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を少量含む	良		
第30回23	C13	河1土器集中区		壺	13.0		4.6	ナデ・擬四線(3)・ハケのちミガキ・ハケ	ナデ・ケズリ		10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	1mm程度の砂粒を中量含む	良			
第30回24	B9	河1下層		壺	13.8		1.9	擬四線(3)・ナデ・ハケ	ナデ・摩滅		5YR7/6 橙色	10YR7/4 灰黄褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良			
第30回25	C10	河1下層		壺	15.2		2.5	ナデ・擬四線(4)・ハケ・ハケのち剥突列点文	ナデ・ケズリ		10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良	外表面ス付着		
第30回26	C12・C13	河1土器集中区・河1		壺	13.75		7.5	列点文・摩滅・ミガキ	ナデ・指頭痕		7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	良			
第30回27	C12・C13	河1・河1土器集中区		壺	14.8		4.2	擬四線(3)・か・ナデ・ハケ・ハケのちミガキ	ナデ・ケズリ		2.5YR6/6 橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	1mm程度の砂粒を少量含む	良			
第30回28	C13	河1土器集中区		壺	12.2		7.3	ナデ・擬四線(4)・ハケ	ナデ・摩滅・ケズリ		5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	良			
第30回29	C13	河1土器集中区		壺	12.8		12.0	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		7.5YR7/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	1~3mm程度の砂粒を多量含む	やや不良			
第30回30	C11	河1下層		壺	13.0		3.1	ナデ・ハケのちミガキ	ナデ・ハケ		10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良			
第31回1	C13	河1土器集中区		鉢	23.2		4.0	ナデ・擬四線(4)・ハケ・ハケのち剥突列点文	ナデ・ケズリ		2.5Y7/3 淡黄色	2.5Y7/3 淡黄色	1~3mm程度の砂粒を少量含む	良	外表面ス付着内面黒斑あり環状把手(残1)		
第31回2	C9	河1下層		壺	23.4		2.0	摩滅・擬四線(3)・ナデ	摩滅		10YR5/3 にぶい黄橙色	10YR5/3 にぶい黄橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	円形洋文(3) 生卵形筋土		
第31回3	C6	河1		壺				擬四線(4)	ナデ		2.5Y5/2 暗灰褐色	1mm以下の砂粒を少量含む		良	円形洋文(2) 生卵形筋土		
第31回4	C13	河1土器集中区		壺	10.8	4.5	11.15	6.9	10.1	摩滅・ハケのちミガキ	ケズリのちミガキ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙色	5YR6/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良	外表面ス付着
第31回5	C13	河1土器集中区		壺	10.1		4.2	擬四線(3)・ミガキ・モリ	モリ		10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	外表面ス付着		
第31回6	C12	河1		壺	10.8		3.8	ナデ	ナデ・沈線(4)・か		10YR6/3 にぶい黄橙色	5YR6/6 橙色	1mm程度の砂粒を微量含む	良	外表面ス付着		
第31回7	C13	河1土器集中区		壺	4.4		10.6	ミガキ	ミガキ		10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を少量含む	良			
第31回8	C13	河1土器集中区		壺	10.4	3.5	8.4	8.0	12.0	摩滅・沈線(1)	モリ・ケズリ・ミガキ	ナデ	7.5YR7/6 橙色	5YR6/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良	外表面ス付着
第31回9	B9	河1下層		壺		4.7		12.0	モリ	モリ	ナデ	7.5YR6/8 橙色	5YR6/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良		
第31回10	C8	河1上層		壺	6.3		1.3	モリ	モリ		7.5YR6/6 橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良			
第31回11	C13	河1土器集中区		壺	8.3	2.8	6.45	1.9	12.0	モリ・擬四線(2)・ミガキ	モリ・ミガキ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	砂粒をほとんど含まない	良	外表面黒斑あり
第31回12	C13	河1土器集中区		鉢	9.2		7.3	拟四線(3)・ミガキ	ミガキ		5YR5/3 にぶい赤褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良	環状把手(残1)		
第31回13	C11	河1下層		壺		3.6		12.0	ハケのちミガキ	ハケのちミガキ	ハケのちミガキ	5YR6/4 にぶい橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を少量含む	良		
第31回14	C11	河1下層		鉢	10.0		6.0	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良			
第31回15	C11	河1下層		鉢	10.8		1.2	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良			
第31回16	C13	河1土器集中区		鉢				ハケ	ハケ・ナデ・ケズリ		5YR6/4 にぶい橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良	外表面黒斑あり		
第31回17	D7	河1上層		鉢		18.5		3.8	ナデ・ミガキ	ナデ	10YR4/3 にぶい黄橙色	10YR4/3 にぶい黄橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良			
第31回18	B9・C10	河1・下層		鉢				モリ	指頭痕		10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	1mm程度の砂粒を少量含む	良	円形浮文3脚×4		
第31回19	C9	河1下層		鉢				モリ・ハケ	ハケ・ナデ		7.5YR8/4 淡黄色	7.5YR8/6 淡黄色	1mm程度の砂粒を中量含む	やや不良	外表面黒斑あり		
第31回20	C13	河1土器集中区		鉢	13.0		3.5	ナデ・擬四線(3)・ハケのちナデ・モリ・ハケ	ナデ・ハケ・指頭痕・ケズリ		10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良			
第31回21	C13	河1土器集中区		鉢	13.5		5.5	ナデ・擬四線(4)・ミガキ	ナデ・ハケ・ケズリ		10YR7/4 にぶい黄橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	1mm程度の砂粒を中量含む	255と同一個体			
第31回22	C13	河1土器集中区		鉢	13.8		7.1	ナデ・モリ	ナデ・ケズリ		5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	1mm程度の砂粒を中量含む	良			
第31回23	C13	河1土器集中区		鉢	12.9		9.7	ナデ・擬四線(4)・ハケのちミガキ	ナデ・ハケ・ケズリ		5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	1mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第31回24	C8	河1上層		鉢	13.7		2.8	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ		7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良			
第31回25	B10・C9	河1・下層		鉢	12.7		3.8	擬四線・ナ・ミガキ・ハケ	ナデ・ハケ・ケズリ		10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良			
第31回26	C13	河1土器集中区		壺	6.8		10.5	ハケ・ハケのちナデ	ケズリ	ハケのちナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良	底部黒斑あり 底部記号(6.8~7.3cm)		
第31回27	C10	河1Bトレチ・ナ・上層		鉢	4.2		6.5	モリ	モリ	ナデ	7.5YR7/6 橙色	5YR6/6 橙色	1mm程度の砂粒を微量含む	良	ヘラ記号「一」あり		
第31回28	C13	河1土器集中区		壺	2.3		12.0	ハケ・ナデ	ナデ・ケズリ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙色	2.5YR7/4 暗灰褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	孔は一辺0.6cmの方 を呈する		
第31回29	C13	河1土器集中区		壺	4.3		12.0	モリ	モリ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙色	2.5YR7/4 暗灰褐色	1mm以下の砂粒を中量含む	良			
第31回30	C8	河1		壺	5.2	16.6	10.0	モリ	ナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐色	10YR6/4 にぶい黄橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第31回31	B10	河1A下層		壺	3.9		6.1	ナデ	ケズリ	ナデ	2.5Y5/2 暗灰褐色	2.5Y5/2 暗灰褐色	1~3mm程度の砂粒を少量含む	良	外表面ス付着 ヘラ記号あり		
第31回32	C11	河1下層		壺	6.5		6.8	ハケのちミガキ	ケズリ	ハケのちミガキ	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良			
第31回33	C13	河1土器集中区		壺	7.4		4.5	ミガキ	ケズリ	ケズリ	2.5Y6/4 にぶい橙色	2.5Y6/2 灰黄色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第31回34	C10	河1B下層		壺	5.0		12.0	モリ	ナデ	ナデ	2.5Y6/2 灰黄色	2.5Y6/2 灰黄色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外表面ス付着		
第31回35	C6	河1カタ・西カタ・北カタ上層		壺	8.2		6.0	モリ	モリ	モリ	2.5Y4/3 オリーブ褐色	2.5Y4/3 オリーブ褐色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	良	8mm位の小石あり		
第32回1	D7	河1上層		高坏	30.6		5.2	ミガキ	ミガキ	ミガキ	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y6/2 灰黄色	1mm以下の砂粒を微量含む	良			
第32回2	D7	河1上層・モリ土		高坏	32.1		6.8	ミガキ	ミガキ	ミガキ	10YR7/3 にぶい橙色	10YR7/3 にぶい橙色	1mm以下の砂粒を少量含む	良			
第32回3	C13	河1土器集中区		高坏	30.4		9.0	ナデ・ミガキ	ミガキ	ミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/6 橙色	1mm程度の砂粒を少量含む	良			
第32回4	C13	河1土器集中区		高坏	27.0		2.4	モリ・ミガキ	モリ・ミガキ	モリ・ミガキ	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y7/2 灰黄色	1mm以下の砂粒を微量含む	良			
第32回5	C13	河1土器集中区・下層		高坏	27.9		10.4	モリ・ミガキ	モリ・ミガキ	モリ・ミガキ	2.5YR5/4 にぶい褐色	5YR6/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良	外表面黒斑あり		
第32回6	C13	河1ベルト2上層		高坏	23.9		9.6	モリ	モリ	モリ	5YR6/6 橙色	5YR7/3 にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を少量含む	良			
第32回7	C13	河1土器集中区・下層		高坏	24.6	14.7	21.4	7.9	6.5	モリ・擬四線(4)・ミガキ	モリ・擬四線(4)・ミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	小孔残存(1)	
第32回8	C13	河1土器集中区		高坏	28.0	17.35	24.6	12.0	9.0	モリ・モリ	モリ・モリ	5YR6/6 橙色	5YR7/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良	外表面黒斑あり	

第3章 遺構と遺物

鉢・壺番号	グリッド	出土地	種別・器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率/12 口縁部 底部	調整・施文・施釉		色調 外部 内部	胎土	焼成	備考			
								外面	内部							
第32回9	C13	河1土器集中区	甌生土器	高壺	10.0		8.6	ミガキ	摩滅	5YR6/4 に赤い橙色	7.5YR6/6 橙色	1~3mm程度の砂粒を多量含む	良	外面スス付着		
第32回10	C13	河1土器群		高壺	16.6		8.3	ミガキ	しほり・ナデ・ ハケ	5YR6/6 橙色	5YR6/4 に赤い橙色	砂粒をほとんど含まない	良	小孔(3) 内面スス付着		
第32回11	D8	河1		高壺	27.9		1.5	擬四線(4)・ミガキ	ミガキ	7.5YR6/6 橙色	10YR5/4 に赤い黄褐色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良	円形浮文3列1対×3か4		
第32回12	B10	河1A下層		高壺	25.0		3.4	刺突・擬四線(5)・ ⁽⁹⁾ のち刺突列点文・ミガキ	ミガキ	10YR7/3 に赤い黄褐色	10YR6/3 に赤い黄褐色	1mm以下の砂粒を微量含む	良			
第32回13	C13	河1		高壺	21.6	18.9	19.25	6.0	4.0	ナデ・ミガキ・摩滅 しほり・ケズリ	7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	1~3mm程度の砂粒を中量含む 芸母を微量含む	良	外面黒斑あり 外面口 縁部擬四線(6)~(7)	
第32回14	C11	河1下層		高壺		11.2		8.3	ハケ・ナデ	ナデ・ハケ	10YR7/4 に赤い黄褐色	10YR7/4 に赤い黄褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	小孔(6)	
第32回15	C11	河1イコウ面		器台	19.0		2.6	ミガキ・擬四線(3)・ ハケのちミガキ	ミガキ	5YR6/4 に赤い橙色	5YR6/6 橙色	1mm程度の砂粒を少量含む	良			
第32回16	C13	河1土器集中区		器台	22.8		7.0	ミガキ・擬四線(4)・ ナデ	ミガキ	10YR6/3 に赤い黄褐色	10YR6/3 に赤い黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良			
第32回17	C13	河1土器集中区		器台	22.0		10.0	ナデ・擬四線(5)・ミ ガキ	ナデ・ミガキ・ 摩滅	2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y7/3 浅黄色	1mm以下の砂粒を少量含む	良			
第32回18	C8	河1		器台	23.0		1.5	摩滅	摩滅	10YR6/3 に赤い黄褐色	7.5YR7/6 橙色	1~3mm程度の砂粒を中量含む 芸母を微量含む	良			
第32回19	C11	河1最下層		器台	23.0		2.1	ナデ・ハケのちミガキ	ミガキ	7.5YR6/4 に赤い橙色	10YR7/4 に赤い黄褐色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良			
第32回20	B10	河1A下層		器台	23.3		2.5	ミガキ	ミガキ	10YR7/3 に赤い黄褐色	10YR7/3 に赤い黄褐色	1~2mm程度の砂粒を少量含む 芸母を中量含む	良			
第32回21	C12・ C13	河1土器集中区・ 河1・下層		器台	22.2		12.0	刺突列点文のち擬四線 (4)・ナデ・ミガキ	ミガキ・摩滅・ ケズリ	7.5YR7/4 に赤い橙色	7.5YR7/4 に赤い橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む 芸母を微量含む	良	孔3段×4		
第32回22	B9・ C12・ C13	河1土器集中区・ 下層		高壺	17.9		10.0	ミガキ・擬四線(3)・ ナデ	ケズリ・ナデ	10YR7/4 に赤い黄褐色	10YR7/4 に赤い黄褐色	1~3mm程度の砂粒を多量含む 芸母を少量含む	良	小孔(4) 外面黒斑あ り		
第32回23	C13	河1土器集中区		高壺	28.7		10.3	ミガキ・ハケ	ミガキ・しほ り・ナデ	2.5Y6/3 に赤い黄色	2.5Y6/2 灰黄色	1~3mm程度の砂粒を少量含む 芸母を多量含む	良	外面黒斑あり		
第32回24	C13	河1土器集中区		高壺	15.4		10.6	摩滅・ハケのちミ ガキ・ナデ	しほり・ハケ	5YR6/8 橙色	5YR6/6 橙色	1mm以下の砂粒を少量含む	良			
第32回25	C13	河1土器集中区		高壺	18.7		4.8	モ滅	ケズリ・ハケ	5YR7/6 橙色	7.5YR6/4 に赤い橙色	1~3mm程度の砂粒を中量含む 芸母を少量含む	やや 不良	小孔(4)		
第32回26	C9	河1下層		高壺	11.8		2.1	ミガキ・ナデ	ハケ	2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y7/3 浅黄色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	孔5か(残3)		
第33回1	C13	河1土器集中区		鉢	24.9		2.5	擬四線(5)・ミガキ・ 摩滅	ミガキ	7.5YR7/4 に赤い橙色	7.5YR6/4 に赤い橙色	1mm以下の砂粒を少量含む	良			
第33回2	D7	河1上層・下層・トレンチ 南カベ溝		鉢	21.8		3.4	擬四線(4)・摩滅	摩滅・ミガキ	10YR7/4 に赤い黄褐色	10YR7/4 に赤い黄褐色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良	環状把手(残1)		
第33回3	C13	河1土器集中区		鉢	24.0		1.5	ナデ・擬四線(5)・ミ ガキ	ナデ	10YR7/4 に赤い黄褐色	7.5YR7/4 に赤い橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む 芸母を微量含む	良			
第33回4	C10	河1トレンチ		鉢	26.0		1.9	ナデ・擬四線(5)・摩 滅	ナデ・のちミガキ・ ナデ	7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む 芸母を少量含む	良			
第33回5	C13	河1土器集中区		鉢	26.9		0.8	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ・ ケズリ	2.5Y6/2 灰黄色	2.5Y6/2 灰黄色	1~2mm程度の砂粒を中量含む 芸母を中量含む	良			
第33回6	C14	河1下層		鉢	22.3		1.3	ナデ・ハケ	ハケのちナデ・ ハケ	10YR7/3 に赤い黄褐色	10YR6/3 に赤い黄褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良			
第33回7	C13	河1土器集中区		鉢	22.6	6.8	10.4	5.2	摩滅・ハケのちミガキ	摩滅・ミガキ	5YR6/6 橙色	10YR6/3 に赤い黄褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面黒斑あり	
第33回8	C13	河1土器集中区		鉢	14.8	4.1	13.0	6.5	10.0	ナデ・擬四線(4)・ハ ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ	5YR5/6 明赤褐色	5YR5/6 明赤褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス付着
第33回9	C13	河1土器集中区		鉢	19.3		4.2	擬四線(2)・ナデ・ミ ガキ	ミガキ・ケズリの ちミガキ	5YR7/6 橙色	10YR6/4 に赤い黄褐色	1mm程度の砂粒を多量含む	良			
第33回10	C13	河1土器集中区		鉢	15.6		10.0	ナデ・擬四線(5)・ハ ナ	ナデ・ケズリ	7.5YR5/3 に赤い褐色	7.5YR5/3 に赤い褐色	1~3mm程度の砂粒を中量含む 芸母を多量含む	良	外面スス付着		
第33回11	C13	河1・イコウ面 直上		鉢	17.1	4.0	11.6	3.5	11.2	摩滅・ミガキ	摩滅・ミガキ	2.5Y7/2 灰黄色	1mm程度の砂粒を少量含む	良	外面黒斑あり	
第33回12	C13	河1土器集中区		鉢	17.9	3.7	10.55	11.1	12.0	ナデ・擬四線(4)・ミ ガキ	ナデ・ミガキ・ケ ズリのちミガキか ナ	10YR7/4 に赤い黄褐色	10YR7/4 に赤い黄褐色	1mm程度の砂粒を少量含む 芸母を中量含む	良	外面黒斑あり
第33回13	C13	河1土器集中区		鉢	20.4	3.2	22.95	3.7	12.0	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	7.5YR7/6 橙色	10YR6/3 に赤い黄褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	底部に孔をあけよう とした痕跡あり
第33回14	C14	河1下層		鉢	16.4	2.0	14.0	1.6	12.0	ハケのち指捺え・ハ ケ	ハケ・ナデ	10YR7/3 に赤い黄褐色	10YR7/3 に赤い黄褐色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良	
第33回15	C13	河1土器集中区		鉢	15.7	4.2	7.8	10.0	12.0	摩滅・ハケのちミガキ	ミガキ・摩滅	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む 芸母を微量含む	良	
第33回16	C13	河1土器集中区		鉢	19.8	4.6	10.5	6.3	11.2	擬四線(3)・ナデ・ モ滅・ミガキ・ハ ケ	ミガキ・モ滅・ミ ガキ・ハケ	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	外面黒斑あり
第33回17	C13	河1土器集中区		鉢	18.2		4.5	指頭圧痕・ナデ・ ハケ	ハケ・ケズリ	7.5YR6/4 に赤い橙色	7.5YR6/4 に赤い橙色	1mm以下の砂粒を微量含む	良			
第33回18	C14	河1下層		鉢	22.4		0.8	摩滅・ハケ	摩滅・ハケ	10YR7/4 に赤い黄褐色	10YR5/2 灰黄色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良			
第33回19	C13	河1土器集中区		鉢	12.8		6.6	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	10YR7/3 に赤い黄褐色	10YR7/4 に赤い黄褐色	1mm程度の砂粒を少量含む 芸母を中量含む	良			
第33回20	C13	河1土器集中区		鉢	12.0		3.3	ナデ・のちハケ・ 剝離	ハケ・ケズリ	10YR7/4 に赤い黄褐色	10YR7/3 に赤い黄褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良			
第33回21	C11	河1下層		鉢	11.8		2.8	ナデ・指頭圧痕・ハ ケのちナデ	ナデ・のちハ ケのちケズリ	7.5YR5/4 に赤い褐色	7.5YR5/4 に赤い褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス付着		
第33回22	C13	河1土器集中区		鉢	16.6		1.8	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	10YR7/2 に赤い黄褐色	10YR7/2 に赤い黄褐色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良			
第33回23	C9	河1下層		鉢	14.9		2.2	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ・ハ ケのちケズリ	7.5YR6/4 に赤い橙色	7.5YR6/4 に赤い橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む 芸母を少量含む	良			
第33回24	C13	河1土器集中区		鉢	11.2	3.2	7.9	4.8	12.0	ナデ・刺突列点文・直 鉛文(9)・ナデ	ナデ	7.5YR6/6 橙色	10YR5/2 灰黄色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス付着
第33回25	C13	河1土器集中区		鉢	12.0		4.7	ナデ・擬四線(4)・カ ミガキ・摩滅	ミガキ・摩滅・ケ ズリのちミガキ	7.5YR6/4 に赤い褐色	7.5YR5/4 に赤い褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む 芸母を少量含む	良			
第33回26	C12・ C13	河1土器集中区・ 河1・ベルト2		鉢	17.0		12.0	ナデ・擬四線(3)・ハ ケ・ハケのち刺突列点文	ナデ・ケズリ	7.5YR7/4 に赤い黄褐色	10YR6/4 に赤い黄褐色	1mm以下の砂粒を微量含む	良			
第33回27	C13	河1土器集中区		鉢	18.2		2.1	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	10YR7/4 に赤い黄褐色	10YR7/4 に赤い黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良			
第33回28	C13	河1土器集中区		鉢	14.6		7.0	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	7.5YR6/6 橙色	10YR7/3 に赤い黄褐色	1~3mm程度の砂粒を多量含む 芸母を中量含む	良			
第33回29	D7	河1下層		鉢	13.6		3.9	ナデ	ナデ・ケズリ	10YR7/4 に赤い黄褐色	2.5Y7/4 灰暗黄色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良			
第33回30	C13	河1土器集中区		鉢	18.0		5.5	摩滅	ハケ・ケズリ	7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/4 に赤い橙色	1mm以下の砂粒を少量含む	良			
第33回31	C13	河1		鉢	16.0	4.1	13.3	10.2	10.0	ナデ・ハケ	ケズリ	5YR5/4 に赤い褐色	5YR4/6 に赤い褐色	1~3mm程度の砂粒を多量含む	良	
第33回32	C13	河1土器集中区・ 下層		鉢	15.3	4.2	12.6	8.2	10.5	刺突・ハケ	ケズリ・ナデ	10YR6/3 に赤い黄褐色	5YR6/3 に赤い橙色	1mm程度の砂粒を少量含む	良	
第33回33	C12・ C13	河1下層		鉢	7.4	2.9	3.9	9.5	12.0	ミガキ	ミガキ	10YR7/3 に赤い黄褐色	10YR7/2 に赤い黄褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	
第34回1	C6	河1北カタ上層		注口		6.1			摩滅	しほり	10YR7/4 に赤い黄褐色	10YR7/4 に赤い黄褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面黒斑あり	
第34回2	C13	河1土器集中区		把手				ミガキ			7.5YR7/6 橙色		1mm以下の砂粒を少量含む	良		
第34回3	C13	河1土器集中区		把手				摩滅			7.5YR6/6 橙色		1mm程度の砂粒を中量含む	良		
第34回4	C13	河1下層		蓋	7.7	3.1	11.0	ナデ・ハケ・摩滅	ナデ・ミガキ		7.5YR7/6 橙色		1mm程度の砂粒を中量含む	良		
第34回5	C13	河1		蓋	11.7	5.6	9.1	ナデ・指頭圧痕・摩 滅・ハケ	ナデ・ハケ		7.5YR6/6 橙色		1~2mm程度の砂粒を多量含む	良		
第34回6	C12・ C13	河1下層		蓋	12.2	4.8	6.4	ナデ・ハケのちナ デ・ナデ・摩滅	指頭圧痕・ハケのち ナデ・ナデ・摩滅		7.5YR7/6 橙色		1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	つまみ径3.2cm	
第34回7	C8	河1下層		蓋	5.1		12.0	ナデ・ハケ	ハケ		7.5YR6/6 橙色		1mm以下の砂粒を微量含む	良		

鉢・図番号	グリッド	出土地	種別・器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率/12 口縁部 底部	調整・施水・施釉			色調		胎土	焼成	備考	
								外面	内面	底部	外面	内面				
第 34 図 8	C12	河1	甕生土器	蓋				指頭圧痕・ナデ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄褐色	10YR7/3 にぶい黄褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	つまみ径6.6cm		
第 34 図 9	C13	河1土器集中区		壺	2.6		10.5	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	良			
第 34 図 10	C13	河1土器集中区		台付鉢	10.3	5.2	6.2	8.5	4.0	ミガキ	ミガキ	ナデ	7.5YR7/6 橙色	10YR7/3 にぶい黄褐色	1mm程度の砂粒を少量含む	
第 34 図 11	B8・ B9・B10	河1北陸溝・下層		高坏	16.8		3.0	ミガキ・沈線(1)	ミガキ・ナデ	10YR6/3 にぶい黄褐色	10YR6/3 にぶい黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良			
第 34 図 12	C14	河1		鉢	15.7	5.5	9.1	6.5	12.0	ナデ・ミガキ	ナデ・ケズリ・ ケズリのちナ デ・ミガキ	10YR6/4 にぶい黄褐色	5YR6/4 にぶい橙色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	良	
第 34 図 13	C12・ C13	河1土器集中区		鉢	21.9		4.8	ナデ・ハケ	ハケ・ケズリ	7.5YR7/4 にぶい橙色	10YR6/3 にぶい黄褐色	1mm以下的小石を1石含む	良			
第 34 図 14	C13	河1土器集中区		鉢	22.0		2.2	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	10YR6/3 にぶい黄褐色	10YR6/3 にぶい黄褐色	1mm以下	1mm以下			
第 34 図 15	C13	河1土器集中区		鉢	18.4		6.3	ナデ・ハケ	ハケ・ケズリ	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	良			
第 34 図 16	C13	河1土器集中区		鉢	21.6		1.3	摩滅	ハケ・摩滅	10YR7/3 にぶい黄褐色	10YR7/3 にぶい黄褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良			
第 34 図 17	C13	河1土器集中区		鉢	19.5		8.3	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	10YR6/3 にぶい黄褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	1~3mm程度の砂粒を多量含む	良			
第 34 図 18	C12	河1		鉢	19.9	3.5	3.3	12.0	ハケのちミガキ・ミガキ	ミガキ	10YR7/3 にぶい黄褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良		
第 34 図 19	C13	河1土器集中区		鉢	16.6		3.9	ナデ・ハケ	摩滅・ハケ	10YR7/3 にぶい黄褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	1mm以下	1mm以下			
第 34 図 20	C13	河1土器集中区		鉢	16.3		8.0	ナデ・ハケ・ハケのち ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	1mm程度の砂粒を少量含む	良			
第 34 図 21	C12	河1		鉢	17.1		8.6	摩滅・ハケのちミガ キ・ナデ	摩滅・ミガキ	5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良			
第 34 図 22	B10	河1下層		鉢	16.9		3.1	ナデ・ハケ	ハケ・ケズリ	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR6/3 にぶい黄褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良	外画ス付着		
第 34 図 23	C8	河1上層		鉢	16.8		3.8	摩滅	摩滅・ハケ・ケ ズリ	10YR7/3 にぶい黄褐色	2.5Y6/2 灰黄色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良			
第 34 図 24	C8	河1上層		鉢	2.4		9.0	摩滅	ケズリ	10YR7/3 にぶい黄褐色	2.5Y6/2 灰黄色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良	49-①と同一個体か		
第 35 図 1	D13・ D14	河1上面・モリ 土	須恵器	蓋	13.6		4.8	回転ヘラ切りのち回転 ナデ・回転ナデ	回転ナデ	2.5Y6/1 淡灰色	2.5Y6/1 淡灰色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良	内外画自然釉		
第 35 図 2		河1A上層		高台坏	6.2		12.0	回転ナデ	回転ナデ	ケズリ出 し高台	2.5Y7/4 淡黄色	5Y8/3 淡黄色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	やや 不良		
第 35 図 3	D7	河1上層	弥生土器	高坏	13.4		2.9	ハケ	ナデ・しまり	10YR7/3 にぶい黄褐色	2.5Y7/3 淡黄色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良			
第 35 図 4		河2黒砂	須恵器	甕	4.8		6.5	回転ナデのちナデ	回転ナデのちナ デ	回転ナデのちナ デ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良		
第 35 図 5	G10	河2黒砂・黒粘		鉢	5.1		5.3	回転ナデ・回転ヘラ切 りのちナデ	回転ナデ	回転ヘラ 切りのちナ デ	7.5Y5/1 灰色	7.5Y5/1 灰色	1mm以下	1mm以下	内面漆付着	
第 35 図 6		河2黒粘	土師質土器	甕?	12.8		1.2	ナデ	ナデ	回転ナデ	5Y8/1 灰白色	5Y8/2 灰白色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良		
第 35 図 7	D11		須恵器	壺	8.7		4.1	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良		
第 35 図 8		河2黒粘	土師器	高坏	13.0		2.8	摩滅	摩滅	7.5YR7/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	1~3mm程度の砂粒を多量含む	良	小孔4(残3)		
第 35 図 9	G11	河2黒粘		甕	28.0		0.7	摩滅・ハケ	摩滅・ハケ	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	1~3mm程度の砂粒を多量含む	良			
第 35 図 10		河2黒粘	須恵器	無台坏	11.7	6.8	3.6	3.8	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ 切りのちナ デ	10Y7/1 灰白色	10Y7/1 灰白色	1mm以下	1mm以下	
第 35 図 11		河2		皿	14.9	11.4	1.85	2.0	5.0	回転ナデ	回転ナデのちナ デ	5Y6/1 灰白色	5Y6/1 灰白色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	良	
第 35 図 12	G10	河2黒粘		無台坏	13.2	9.8	3.7	5.2	5.8	回転ナデ	回転ナデのちナ デ	7.5Y1/6 灰白色	2.5Y1/6 灰黄色	1mm以下	1mm以下	
第 36 図 1		河2黒粘	製塙土器		37.0			ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	7.5Y6/1 灰白色	7.5YR6/4 にぶい橙色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	良		
第 36 図 2		河2黒粘						ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	7.5Y7/4 にぶい橙色	7.5YR7/6 橙色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	良		
第 36 図 3	G11	河2黒粘						ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	10YR6/4 にぶい黄褐色	7.5YR7/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良		
第 36 図 4	G10	黒粘						ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良		
第 36 図 5	C2	河1上面						ナデ	ナデ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄褐色	2.5Y6/2 灰白色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	良		
第 36 図 6		河2黒粘						ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	2.5Y6/2 灰白色	7.5YR6/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良		
第 36 図 7		河1黒粘・河2 黒粘						ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	5Y6/1 灰白色	5Y6/1 灰白色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良		
第 36 図 8	C10	河1下層						ナデ	ナデ	ナデ	7.5YR7/2 明褐色	7.5YR6/1 明褐色	1~2mm程度の砂粒を多量含む	良		
第 36 図 9		河2黒粘						ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	7.5YR6/6 橙色	10YR5/2 灰黃褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良		
第 36 図 10	C9	河1下層						ナデ	ナデ	ナデ	2.5Y5/2 暗灰黄色	2.5Y5/1 暗灰黄色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	良		
第 36 図 11	G10・G 11	河1黒粘・河2 黒粘						ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	2.5Y6/1 黄灰色	7.5YR6/6 橙色	1~3mm程度の砂粒を中量含む	良		
第 36 図 12		河2黒粘						ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	7.5YR6/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を少量含む	良		
第 36 図 13	G11	河2黒粘			8.0		3.1	ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	7.5YR7/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良		
第 36 図 14	G11	河2黒粘			15.0		2.5	ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	ナデ・指揮え	2.5Y6/2 灰黄色	7.5YR7/6 橙色	1~3mm程度の砂粒を少量含む	良		
第 39 図 1	C11・ D11		縄文土器	深鉢				条痕・口端刻み	条痕のちナデ	ナデ・指揮え	2.5Y3/1 黒褐色	2.5Y3/1 黒褐色	1~3mm程度の砂粒多量含む 5mm大的小石を2石含む	良	外画ス付着	
第 39 図 2	C11・ D11		須恵器	鉢				沈線(3)	ナデ	ナデ	2.5Y6/3 にぶい黄色	2.5Y6/3 にぶい黄色	1~2mm程度の砂粒中量含む	良		
第 39 図 3	C8	モリ土	甕生土器	蓋	4.15		5.5	ミガキ	ナデ	ナデ	10YR5/4 にぶい黄褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	1~2mm程度の砂粒を少量含む 奈母多量含む	良	内面ス付着	
第 39 図 4	B8	河1北カベ溝	高坏	30.8		1.5	ミガキ・摩滅	ミガキ	ミガキ	7.5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	1mm以下	1mm以下			
第 39 図 5	C8	モリ土	壺	19.0		2.0	摩滅・ハケ	摩滅	摩滅	7.5YR7/6 橙色	10YR7/4 にぶい黄褐色	1~2mm程度の砂粒を中量含む	良			
第 39 図 6	C10	モリ土	壺	16.0		2.1	摩滅・擬凹線(2)・ナ デ	ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ	2.5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	1mm程度の砂粒を少量含む	良	外画ス付着		
第 39 図 7	C8	モリ土	須恵器	蓋	9.3		2.3	回転ヘラ切りのち回転 ナデ・回転ナデ	回転ナデ	7.5Y6/1 灰白色	7.5Y6/1 灰白色	1mm以下	1mm以下			
第 39 図 8		カクラン	魁		3.6		12.0	回転ナデ・沈線(2)・ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	摩滅	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	1mm以下	1mm以下	やや 不良	

第3表 石器観察表

挿図番号	グリッド	出土地	器種	遺存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
第18図8	Z13	SP360	石錐	完形	3.5	1.1	0.5	2.2	ガラス質安山岩	ガラス質安山岩 锐部摩耗
第21図3	C9	SD02	石刀?	略完形	19.3	3.91	2.0	209.5	ホルンフェルス	
第21図5		SD12	敲石	完形	12.0	9.2	6.0	1029.4	花崗岩類	両正面・周縁敲打痕
第21図6	B4	SD12	敲石	完形	11.3	5.7	4.9	511.8	砂岩	両正面敲打痕(凹部3箇所) 両端敲打痕著
第37図1	C11	河川1最下層	スクレイバー類	完形	8.6	2.7	8.0	25.3	頁岩	短冊形へら状 片面自然面広く残す 両側縁を刃部とする
第37図2	C12	河川1上層	打製石斧	完形	7.9	5.2	0.7	46.5	デイサイト	板状 刃部摩耗
第37図3	C8	河川1上層	打製石斧	完形	12.5	6.6	2.5	194.6	ホルンフェルス	全面摩耗(風化)
第37図4		河川1	打製石斧	片側刃欠	12.3	(5.4)	(2.0)	(158.5)	砂岩	
第37図5		河川1	軽石製品	完形	6.1	5.3	3.3	28.8	軽石	研磨により平坦面2面形成
第37図6	C12	河川1	石皿	1/2欠	(28.6)	(13.9)	(10.5)	(5660)	デイサイト	片面使用 使用面中央部に先行する敲打痕(凹部)
第37図7	C11	河川1最下層	砥石	略完形	31.0	12.3	11.1	7140	砂岩	断面方形 小口を除く4面を研磨面とする
第39図9	A12	遺構面	打製石斧	完形	15.5	5.4	2.7	233.7	凝灰岩	全面摩耗(風化)
第39図10	D3	客土	敲石	端部欠	(14.9)	(7.1)	6.2	(1106.1)	砂岩	両正面および片側面に敲打痕
第39図11	C8	客土	凹石	完形	9.7	8.2	4.3	570.2	花崗岩類	両正面凹部形成 周縁敲打痕
第39図12	D4	客土	石劍?	略完形	15.9	3.9	1.9	163.6	ホルンフェルス	風化により表面剥離

第4表 木製品観察表

挿図番号	グリッド	出土地	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考		
第7図1	C8	SB01 SP64	柱根	50.8	22.0	12.7			
第7図2	C8	SB01 SP62	柱根	67.2	15.3	7.9			
第7図3	C8	SB01 SP71	柱根	61.0	16.3	12.2			
第7図4	C8	SB01 SP72	柱根	64.2	20.0	9.2			
第9図1	B8	SB02 SP19	柱根	32.6	22.25	10.45			
第9図2	C8	SB02 SP69	柱根	32.3	21.1	8.5			
第9図3	B8	SB02 SP18	柱根	27.0	20.0	10.2			
第9図4	C8	SB02 SP109	柱根	25.8	6.3	5.3			
第9図5	C9	SB02 SP70	柱根	24.25	19.65	8.1			
第9図6	B8	SB02 SP102	柱根	32.7	16.7	7.2			
第9図7	C8	SB02 SP68	柱根	12.3	12.0	7.1			
第11図1	C6	SB03 SP22	柱根	13.95	18.2	6.55			
第11図2	C6	SB03 SP23	柱根	7.35	15.2	5.8			
第14図1	Z12	SB05 SP330	柱根	26.7	14.3	15.1			
第14図2	Z12	SB05 SP330	礎板	14.25	14.1	4.55			
第14図3	Y12	SB05 SP331	柱根	30.7	20.4	17.3			
第18図1	C8	SP58	柱根	33.55	21.7	10.8			
第18図3	C4	SP80	柱根	23.0	14.1	10.0			
第18図4	C4	SP81	柱根	22.4	16.5	13.5			
第18図5	C9	SP110	柱根	51.0	14.8	6.0			
第18図6	B14	SP129	柱根	26.4	16.7	18.3			
第21図7	B14	SD25	柱根	33.5	18.1	17.0			
第21図9	B13	SD26	柱根	61.65	17.05	2.95			
第38図1	C12	河川1	槽	76.4	12.4	2.2	樹種:スギ		
第38図2	C9	河川1上層	盤	28.7	9.6	5.5	樹種:スギ		
第38図3	C12	河川1	火鑛臼	25.9	1.2~2.2	1.3	樹種:スギ 火鑛穴4		
第38図4	C12	河川1	板材	13.6	8.2	3.4	樹種:スギ		
第38図5	C12	河川1	板材	52.8	40.1	3.6			
第38図6	C12	河川1	板材	27.2	9.8	1.0			
第38図7	C14	河川1	棒状具	106.0	3.5	3.3			
第38図8	C8	河川1	柱根?	46.5	17.8	4.9			
第38図9	C11	河川1	梁材	210.05	13.45	8.8	樹種:スギ		

第5表 ガラス小玉観察表

挿図番号	グリッド	出土地	器種	遺存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	穴径(cm)	重さ(g)	備考
第21図1	C9	SD01	ガラス小玉	完形	3.5	1.1	0.5	0.19	0.0488	浅葱色
第21図2	C9	SD01	ガラス小玉	完形	19.3	3.91	2.0	0.17	0.0306	青緑色

第4章 まとめ

1 遺構について

今回の調査区は、曾根田遺跡として周知されている範囲の東端にあたり、調査の結果、旧黒田川と考えられる旧河道とその両岸に展開する遺構群を検出した。

旧河道は河川1、河川2とした2条に大別される。河川1では縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代の土器が、河川2では主に古墳時代・平安時代の土器が出土していることから、河川2は河川1に遅れて形成されたと想定できる。は場整備などにより上部がかなり削平を受けていると推測されるため、完全に埋没した時期はいずれも不明であるが、河川1については掘立柱建物SB01、SB02がその埋土を掘り込んでおり、両建物の構築時には相当埋没が進んでいたことがうかがえる。

掘立柱建物は側柱建物4棟、総柱建物1棟の計5棟を検出した。帰属時期は、柱穴出土土器からSB01、SB02が弥生時代以降、SB03が古墳時代以降と想定されるが、SB01、SB02は上述のように河川1が相当埋没した後に構築されていることから、平安時代以降に下る可能性が高い。出土土器の主体を占める弥生時代後期の建物は今回の調査区では判然としないが、河川1で出土した建築部材は、共伴土器から該期に帰属するとみられ、舞鶴若狭自動車道建設に伴う調査を参照すると、河川1のより上流側、遺跡範囲の西部に該期の中心地を求めることが妥当と考えられる。

2 出土土器について

1) 縄文土器

河川1の下層を中心に出土した縄文土器は、晩期後葉に位置付けられる突帯文土器とそれに伴うと考えられる条痕文土器・無文土器である。また、舞鶴若狭自動車道建設に伴う調査では、同じ旧河道から浮線文系土器や遠賀川系土器も出土している。ここでは突帯文土器について概観するにとどめ、ほかの土器群を含めた詳細な検討は、資料のより豊富な舞鶴若狭自動車道建設に伴う調査の報告を待ちたい。

突帯文土器は若狭地方においてこれまで断片的に出土していたが⁽¹⁾、今回の一連の調査ではじめてまとまった資料が得られた。小破片が多く、全形のうかがえる資料はほとんど出土していないが、口縁端部に接する突帯や口縁端部の処理をみると、突帯文土器のなかでも後半～終末に位置付けられよう。一条突帯の個体が主体とみられるが、舞鶴若狭自動車道建設に伴う調査において二条突帯の個体も少数ながら確実に認められる。突帯は幅広・偏平で、刻みというより棒状工具や竹管状工具による刺突を施すものが多い。同様の特徴をもつ土器は小浜市丸山河床遺跡や府中石田遺跡でも出土しており、弥生時代前期中段階並行期に位置付けられること、若狭～丹後地域に分布の中心をもつことが指摘されている⁽²⁾。これらの遺跡では遠賀川系土器に混じって突帯文土器が少数出土している状況であり、本遺跡とは逆の様相を呈す。その差異が海岸部と内陸部という立地の違いに由来するのか、あるいは時期差であるのか、各遺跡出土資料の比較検討を進める必要がある。

2) 弥生土器

弥生土器が主に出土した河川1では縄文土器や須恵器なども出土し、時期的なまとめではない。弥生土器についても、甕には中期、また後期でも後半の可能性があるものもあるが、壺や高壺・器台などにはその可能性が明確なものは少なく、ここで図化したものは後期前半から中頃が中心と考えられる。若狭の弥生時代後期の土器は有段口縁の甕に代表される日本海側ではこの時期の典型的なものである。それは東の越前に近いものではなく、西の丹後系の土器と一括されてきた。しかし、舞鶴若狭自動車道閥

連の調査で当該期の資料が多く得られ、基準となる資料は明確ではないものの、周辺との比較から土器の変化についていくつかは推察されるようになった。時期が下るにつれて、甕口縁の擬凹線文の条数が多くなるとの指摘があるが、越前などの月影式ほど顕著ではない。むしろ有段口縁全体の時期的な変化指標である、口縁の無文化や外傾（外反）化などで検討するべきである。さらに若狭の場合は南に隣接する近江との関係はどの時代も避けることはできない。大鳥羽遺跡をはじめとする若狭の中期では、従来から近江系土器が注目され、後期にはその特徴的な受口状口縁土器は若狭各地で出土するのが当然とされている。しかし小浜市周辺では遺跡によってその多寡があり、それが単に近江との距離的な問題ではないようである。その理由が遺跡の性格による違いなのか、または時期的な違いなのかは結論できないが、敦賀の状況（吉河遺跡・舞崎遺跡と中遺跡との比較）では後者の可能性が高い。また近江北部と接する越前南部では、受口状口縁土器そのものも多いが、両者との折衷のものがあり、逆に近江北部でも擬凹線文を施す受口状口縁がある。今回、これと同じ北陸の特徴である有段口縁の胴部上半に刺突列点文のある土器の口縁部に、受口の特徴である刺突列点文を加える土器を1点（第29図11）図示することができた。しかし、若狭では丹後・北陸系の有段口縁と近江の受口状口縁とはその要素が混ざり合うことなく、本遺跡のように明確にそれと指摘できる状態である。この近江との関係が、若狭の各地で同じようなもののが注目される。なお、この時期の近畿周辺部では、大阪府の生駒山西麓産の胎土の広口壺が各地で出土しており、今回の曾根田遺跡の調査でも確認することができた（第31図2・3）。

3) 製塩土器

古墳時代以降の土器は極端に少なくなるものの、そのなかで点数も多く注目されるのが、海岸に面していない本遺跡で出土した製塩土器である。図上では口縁が若干開くタイプに復元できたもの（第36図1）は浜櫛II式の新段階で、これより厚手の胴部（第36図13）は船岡式に類似する。平底に近い底部も、その平底が完全なもの（第36図14）ではなく、丸みのあるもの（第36図9・11）などもある。さらに器壁の厚さなどは似ているものの、輪積みの粘土幅がこれまで知られている船岡式よりかなり狭く、内面のハケ調整も顕著ではなく船岡式そのものとは呼べない。つまり浜櫛II式と船岡式の間に存在するか、両者の特徴が混在するものと考えたい。これが時期差なのか、若狭の西部を中心に進んできた編年による、若狭東部との地域差なのか、さらに大型化した船岡式の小型のものは推察もできない。また最も近い海岸の田鳥とは、海拔約250mの海士坂峠を挟んで直線距離で約4km離れており、ここで多量の海水を扱う製塩作業が行われたとは考えられない。同じような状況は小浜市西部の稻葉山城跡E地区、同東部の大谷遺跡（小浜市史では八幡前遺跡）で確認されている。前者は海岸線から1.5kmほど内陸の標高約28mの山麓部で、同時期の土器を伴わない浜櫛II式新段階とされる。後者は海岸から尾根を挟んで約3km離れた谷奥の平地で、大量に出土している製塩土器は船岡式とされる。内陸部で製塩土器が出土する事例は古墳に伴うものや、興道寺遺跡のように官衙関連遺跡などで知られているが、本遺跡も含めこのように内陸部の一般的と考えられる遺跡で大量に製塩土器が出土することの説明は十分にできない。製塩が盛んになるこの時期の大きな問題と考え、今後もさらなる検討が必要である。

註

1 早川亮介 2007 「福井県の突帯文土器および併行土器群の概要・集成」 『関西の突帯文土器 資料集』 第8回関西縄文文化研究会 関西縄文文化研究会

2 伊藤淳史 2001 「近畿北部における「弥生化」の諸問題—小浜市丸山河床遺跡資料報告の紹介を兼ねて—」 『みづほ』 42号 大和弥生文化の会

なお、同文献で山陰地域に類例があることも紹介されている。また、久田正弘氏からも同様の教示を頂いている。